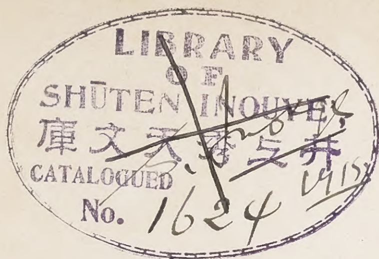
日本歴史畫譚









日本歴史畫譚

上田萬年解說



凡例

一　此の書わ日本建國三千年の重なる出來事を、二百個の繪畫に現わし、夫れに平易な説明を付けたもので、名付けて日本歷史畫譚と云います。

一　此の書の挿畫わ、主として名和永年氏の筆になり、其他二三子の補筆されたもので、又表紙わ太田三郎氏の意匠であります。

一　上下三千歲、出來事わ決して少くわありません、本書に漏らした所わ、追々版を重ぬるに從つて加えてゆく考えです。

此の日本歴史書譚わ、少年百科書譚の第一とも見るべきもので、次々にわ地理や理科に關する書譚をも編纂したいと思います。

故に少年諸君わ、此の重寶にして至便なる、歴史書譚を以て、先づ書齋を飾られたなら、編者わ大れに勵まされて、更に勉強したいのです、猶此の書編纂の主旨わ、別項緒言の中に、詳しく記してありますから、是非一度お讀み下され度いのです。

明治四十三年二月十一日、二千五百七十回目の紀元節に

編者識

日本歴史畫譚目次

日本歴史畫譚

文學博士　上田萬年解

緒言

少年用として編纂された、日本歴史の書物わ、世間に決して少いことわ有りません、けれども其多くわ、文字の方を主としたもので、讀んで面白くわ御座いますが、併し見ただけでわ左迄面白くわないのです。少年用書籍の目的が、第一に見て趣味を感じさせ、同時に讀んで面白く、知らず〳〵の内に智識の發達を促進すると云う點にあることわ。誰も御承知の事であろうと思います、で若しも玆に繪畫を主として、夫れに平

易にして趣味ある說明を付けた樣なものが有りましたなら、どんなに少年を面白がらせ、どんなに又彼等の智識を進めるか分りますまい。

一體繪畫と云うものわ、只一寸見ただけでも、既に大いに面白いものですから、書物の中に多くの繪畫、圖版の類が挿入されて居る時わ、啻に獨り少年ばかりでなく、大人も又其繪の面白さに、知らず〳〵一巻を讀んで仕舞うことも出來ますし、そして其讀み得た事柄……書物の內容わ、いつ迄も忘れる樣な恐れわ御座いません。ですから殊に少年用として出版せらるゝ書物にわ、最も多くの繪畫を挿入することが、第一に必要であろうと思います。

私わ此の事に就きまして、餘程久しい前から、繪畫を主とし文字を副とし、兩方併せて趣味の深い、少年用百科の書物を編纂して、國民敎育上の補助とし度いと云う希望を有つて居つたのです、けれども夫れわ希

望ばかりで、未だ之を實現する機會がありませんでしたが、幸いにも少年用書籍編纂に就いてわ、多年の經驗を有つて居る木村小舟氏が、私の希望と同じ様な考えを有つて居ると聞き、遂に氏の手を勞して大體の編纂だけをして貰い、夫れから隨時餘暇を見て訂正を加え、今度漸く出來上つたのが、此の一册の日本歴史畫譚で御座います。

思うに之迄世間に流布して居る少年用の日本歴史わ、事柄を主として繪と云う事にわあまり重きを置かれぬ傾きが有りました、勿論此の書物とても、歴史上のやかましい考證などわ一切抜きにして、只見て面白いと云う點を主としましたが、若しも之が從來の少年歴史書の缺を補うことが出來て、家庭敎育上に幾分の利益を與える事が出來れば、私の大いに幸福とする所で御座います。

殊に私が多年主張して居る、言文一致の普及と、新定假名遣流布の上

に、幾分の効果を収めることが出來たなら、夫れで私の平素の希望も叶うと云うもので有ります、何を云つても、上下三千年間の歴史を、僅に此の一小冊子に收錄したのですから、現に必要な事項と知りながらも、餘儀なく書き漏した事も少く御座いませんが、夫れ等わ他日更に機を見て本書の續篇を出し、以て少年用歷史書譚として、完全に近いものに致し度いと思うのであります。

1 Qwaji
2. Zutana no shima (Ozo)
3 Mitsugoro shima (Otei)
4 Tsukushi no shima
5 Ukai no shima
6 Tsushima
7 Sato
8 Hinashū

イザナギノカミ



諾冊二尊

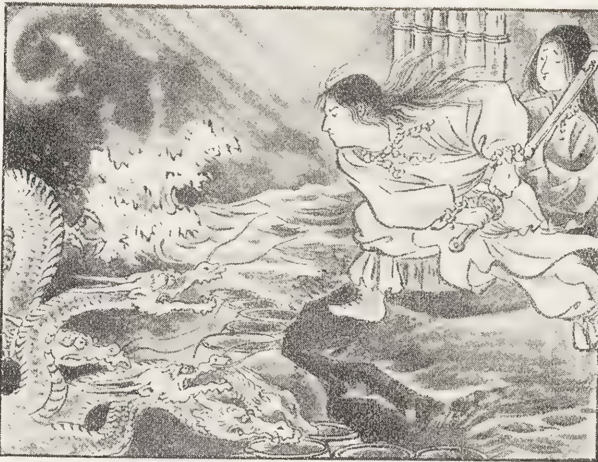
太古代

伊弉諾神と伊弉冊神とわ、神世七代目の神様で、はじめに大八洲國を産み、次に山野草木、河海などを司る神様を産み、一ばん後に火の神をお産みになりましたが、伊弉冊神わ火傷をしてお崩れなさいました。で伊弉諾神わ大層お腹立になつて、火の神をお斬りになると、其滴つた血の中から、又澤山の神様が産れなさいました。又伊弉諾神わ伊弉冊神の後を追うていらつしやいましたが、其國わ大層穢い所でしたから、途中でお歸りなさろうとすると、伊弉冊神わ多くの兵隊を連れて、反對に追つていらつしやいましたから、伊弉諾神わよう〳〵に其所を逃げ出して、筑紫の國まで來て、海の水で體を洗い、穢れた所を奇麗になさいました。只今神様の儀式に、御禊祓と云う事を致しますのも、元わ之から起つたのだと申します。

アマテラスオーカミ



天照大神 様わ前にお話した、伊弉諾尊のお子様です、至つて美しい神様で、その上御悧發なお方でしたから、日の神と申させられ、お父様も此の子ならばと、常々御自身が掛けていらしつた頸玉を與えて高天原と云う國えお遣しになつたのです。高天原とわ取りも直さず日本の事です、さて大神様わ、先祖の神々を祀つたり、農業や養蠶の事を初めて、國民のなすべき仕事を、何かとお授けなさいました。或時のこと、大神様わ弟の素盞嗚尊が、餘り亂暴をなさいましたので、どう〱天の岩戸と云う所えお隠れになりました。すると急に此の世の中が暗くなり、惡い神が現われましたから、他の神様も大きに心配して、よう〱の事で、大神様を迎え出しました、夫れで世の中わ再び明かになつて、無事に治つたと云うことです。



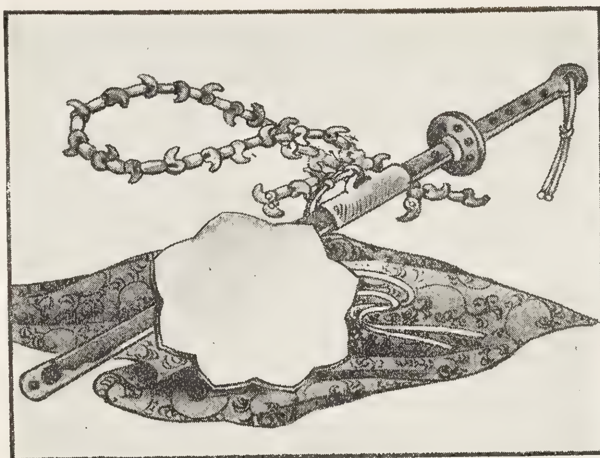
素盞嗚尊大蛇を斬る

素盞嗚尊わ至つて暴々しい神様で、亂暴な事をなさいますから、伊弉諾尊も持て餘して、遠い〳〵國え追いやつて仕舞いなさいました。所が尊わ間もなく出雲國え歸つていらしつて、簸川上と云う所までおいでになると、翁さんと媼さんとが、一人の可愛らしい娘を中に置いて、オイ〳〵泣いて居るでわありませんか、で尊わ可哀想に思召して、其譯をお尋ねなさいますと、八岐の大蛇が來て、娘を食べますから、夫れが悲しうて泣きますと申しました。之をお聞きになつた尊わ、よし夫れなら心配するな、己が其大蛇を殺してやるからと、計略を以て大蛇に酒を飲ませ、醉つて寢た所を、ズタ〳〵にお斬りなさいますと、尻の邊にカチッと音がしますので、よく〳〵改めて御覽になると、之わ立派な劍でしたから、直に天照大神樣え献上なさいました。



八雲立つの御詠

和歌の始わ素盞嗚尊からです、さても尊わ、今にも大蛇の餌食になろうとする櫛稲田姫を助け、やがて其姫を御自分のお妃になさいましたが、此の頃の習慣として、新たに妻を迎えると、屹度新規に家を建てなければなりませんので、尊も又須賀と云う所に、新宅をお作りになりました、すると丁度其所から五色の雲が、むら〳〵と立ち上つて、垣根を作る様に見えましたから、尊わ早速『八雲たついづも八重垣妻ごめに、八重垣つくる其八重垣を』とお歌い遊ばされたのです。一體歌わずつと太古から有つたのですが、三十一文字の和歌わ、全く素盞嗚尊のお詠みになつたのが始です、尊わ其後お妃との間にお子様を設けられ、やがて根の國を治めにいらつしやいました、此の根の國と云うのわ、他でもない、今の韓國の事だと申します。



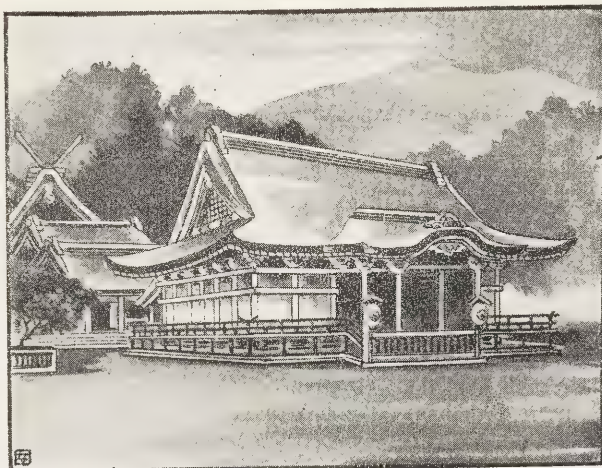
三種の神器 とわ何でしよう、夫れわ八咫鏡、天叢雲劍、八坂瓊曲玉の三つです、大むかし天孫瓊々杵尊が、日本えお降りなされた時、天照大神樣わ、此の三種の神器をば天孫にお授なさいまして、鏡を見ること吾を見るが如く思え、そして大切に御殿の中に祀つて置けと仰しやいましたから、夫れから代々の天子樣が皇位のしるしとなされたのです。一體鏡と玉とわ、大神樣が天の岩戸えお隱れ遊ばされた時に、大勢の神樣が御相談の上お作りなさいましたので、又劍わ素盞鳴尊が、八岐の大蛇を斬つて見付けられ、日本武尊が東夷御征伐の折りに、此の劍をお持ちになり、燒津の原で草をお切になつてから、草薙劍と呼ぶ樣になりました、後鏡わ伊勢に、玉わ宮中に置かせられ、大神樣の御勅語の通り、其御威光わ世界萬國に輝き渡ります。

San shu no shinki



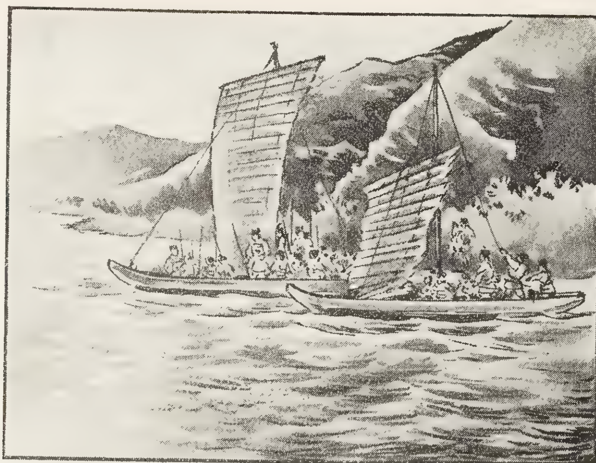
天孫の降臨

天孫瓊々杵尊わ天忍穂耳尊のお子様で御座いますが、天照大神様の仰せを受け、父尊の御名代として、日本の國えお降りなさいました。其お立の時に、大神様わ尊に三種の神器をお授け遊ばされ、且つ種々のお諭しがありました。そこで尊わ大勢の神々をお引き連れなされ、天上からお降りになつたのです。其時天忍日命だの、天津久米命だのわ、自身に弓矢を取り、夫れ〳〵兵士を指揮せられ、又猿田彦命わ天孫の御一行の道案内の役を務めまして、間もなく日向の高千穂の峰と云う所え着かせられ、天孫わ夫れより日本國を治める事について、いろ〳〵と御心配遊ばされ、後に木華開耶姫をお妃として、火闌降尊と、彦火々出見尊の二人のお子様を得させられ、多くの神々も、心を傾けて天孫の御事業をお助け申したと云うことです。



出雲大社

出雲大社　わ名高い神社です。はじめ大國主神わ、自分が之迄治めて居た日本の國を、殘らず瓊々杵尊に献上して、其所を立ち去つたのです。大國主の大人しい仕方を御覽になつた大神樣わ、大層御感心遊ばされて、出雲國に立派な宮殿を作り、天穗日命に云い付けて、其所で大國主に仕える樣に仰しやいました。此の宮殿こそ今の官幣大社出雲大社であります。一體大國主神わ、大己貴命とも申され、以前から出雲國に居て、方々を攻め取り、少彥名命と二人して、國を治めていらつしやいましたが、天照大神樣が皇孫を遣して、日本國の君とし樣と思召し、先づ武甕槌と經津主と云う二人の神樣に仰せて、詳しく其譯を大國主神にお傳えになりましたので、大國主も快く、之迄自分で治めて居た國を、殘らず献上致されたので御座います。



神武の東征

紀元前

神武天皇　わ天照大神樣から五代目の孫で鸕鷀草葺不合尊と仰しやる神樣の四番目のお子、お母樣わ龍神の姫の玉依姫と呼ぶお方、第一代目の天子樣です、至つて御悧發なお性質でいらつしやいます。○全體曾祖樣の瓊々杵尊から、代々日向の高千穗に居らつしやるので、西國の方わ前々から惡者も居りませんが、東國にわ大分よくない者が居りますから、神武天皇わ先づ大和國え行つて、惡者共を平げ、良民を救つてやり度いと思召し、兄樣の五瀨命をはじめ、重立つた家來を集めて御相談なさいましたが、皆々天皇のお言葉に贊成を致し、早速多くの船を仕立て丶、日向國を出發し先づ浪速（今の大阪）えとお渡りになつたのです。けれども大和國にわ土蜘蛛だの長髓彥だのと云う惡者が構えて居りますので、天皇の軍も充分注意して行つたのです。



金鵄の靈光　紀元前

長髓彥を滅さなければ、大和國を治める事わ出來ません、で天皇の軍わ、膽駒山から長髓彥の陣え向いますと、賊わ早くも大軍を以て〆孔舍衞坂と云う所で防ぎました。何しろ賊の方でわ、土地の有樣をよく知つて居て、巧みに戰爭をしますので、とう〳〵天皇の軍わ進むことが出來ず、兄樣の五瀨命わ賊の矢に中つて、お薨れになりました。で今度わ道を變えて、紀州の方から攻め入ることゝなつたのですが、矢張り長髓彥を滅すことわ出來ません、けれども此所で敗れてわならぬと、一軍皆決死の勇を振つて戰つて居ますと、忽ち一羽の金の鵄が、何所からともなく飛んで來て、天皇の御弓の先に止まりましたが、其光わ電光の樣でしたから、さしもの賊も之に目を射られて戰うことが出來ず、長髓彥も之にわ大きに困つたでしよう。

naga sune hiko

饒速日の誠忠



紀元前

金鵄の光 に目も眩んで、長髄彦わ一時驚きましたが、早速使を天皇の軍に送り、『私わ先に天神の御子の饒速日命がお下りになつた時、自分の妹を命のお妃にしました、所が貴君わ天神の御子だと云つて、私を攻め滅そうとなされます、天神の御子とわ全く偽でしよう、いゝ加減な事を云つて私を殺そうと思つても、此方にわちやんと證據が有ります』と云つて、饒速日命の持つて居た二種の寶物を出しますので、天皇わ『夫れならば此方にも有るぞ』と同じ二種をお示しになりましたので、長髄彦わ心の中で少しわ疑いましたが、未だ中々降伏しそうもありません。所が一方饒速日命わ天神の御子に敵わぬと覺り、自分で長髄彦を殺し、大勢の部下を連れて、天皇の軍に歸順しました。天皇わ深く御感心なされて、饒速日命をば重くお用いなさいました。



神武帝と橿原神宮

紀元元年

東征六年の後に長髓彦も土蜘蛛も、殘らず滅されて、大和の附近わ全く平定しましたので、こゝに畝傍山の西南の橿原で、即位の御式を行わせられました。其御儀式わ道臣命と大久米命とが、大伴と久米との二隊の兵を率いて宮門を守り、饒速日命わ内物部を率い、天富命わ齋部を率い、三種の神器を正殿に祀り、用意が出來ると共に門を開いて、四方の國々の重なる人を入らせ、天皇の御威光の尊いことをお示しになりましたので、國々の人民わ天皇を尊んで、神日本磐余彦火々出見天皇と申し上げました。後の御即位の御儀式わ全く此の時の御式に依らさせられますので、又神武天皇御即位の日わ、辛酉一月元日でありますが、之を今の太陽暦にすると、丁度二月十一日になりますから、明治五年此の日を紀元節とお定めになりました。



崇神帝の敬神

紀元　五百六十九年

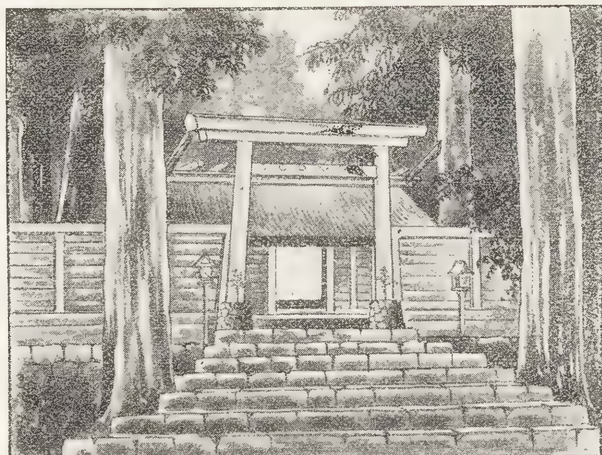
崇神天皇 わ常々深く神様を御信仰なさいましたが、三種の神器を御殿の中に祀つて置くのわ、如何にも恐れ多い事と思召し、鏡と劍とを大和笠縫の邑に移し奉り、皇女の豐鍬入姫に其お祭りを仰せ付けられました。で鏡と劍とわ別に新規にお作らせになり、之を八坂瓊曲玉と一所に、御自身の御璽となされたので、こゝで御殿と神宮とわ全く別々になりました。天皇わ神器を移し、天照大神を祀り。産土神の大國魂神や大物主神をはじめ、多くの神々をお祀り遊ばされ、風の神を龍田に祀つて米や麥のよく出來る樣に祈り、香取大神にわ天皇の威光の日本中に行き渡る樣に祈つて、神を敬うお志が深かつたので、御即位の初年にわ、天下に惡い病が流行つて居ましたが、夫れも間もなく止み、穀物もよく出來て、國わ太平に治まりました。



四道に將軍を派す

紀元五百七十三年

四道將軍　を國々に遣して惡い者をお討たせになつたのも崇神天皇です。神武天皇が東國をお定め遊ばしてから、天皇の御威光わ國々に輝き渡りましたが、夫れより十餘代も經ちましたから、又所々に惡い者共が頭を擡げて來たのです。で崇神天皇わ先づ德を以て天下の民を導き、皇化を全國に及ぼそうと思召して、四人の皇族方に勅し、之を四道に遣して、よく〳〵命に從わぬ者わ、兵力を用いてもよいと仰せ出されました。因て大彥命わ北陸道に、武渟川別わ東海道に、吉備津彥わ西海道に、丹波道主命わ丹波に向わせられ、大彥命わ武埴安彥の亂を平定なされ、吉備津彥と武渟川別とわ、出雲振根と云う惡者を殺して、夫れ〳〵勇名を轟したのです。そして此の四人の將軍の子孫わ、何れも任地に在つて常に朝廷の爲めに働きました。



大神宮を伊勢に奉遷す

紀元六百五十六年

伊勢大廟 わ日本で一ばん大切な神宮です。崇神天皇わ、鏡と劒とを大和の笠縫邑にお移し遊ばされましたが、垂仁天皇の御代になつて、皇女の倭姫命に仰せて、之を護らせ、別にお祀りする場所をお捜しになりました。倭姫命わ伊勢國えいらしつて、大神様の教えに従い、こゝに社を建てゝ、鏡と劒とをお祀り遊ばしたのが、今の宇治の内宮で御座います。所が景行天皇の御代に、日本武尊が東夷御征伐の折りに、倭姫命わ御餞別として劒をお授けになりました。さて尊わ劒を熱田に殘して置いて、伊勢國でお薨れになり、自然劒わ熱田に祀られ、伊勢にわ只鏡ばかりを祀られたのです。後に豊受大神を度會に祀つて、此の方をば山田外宮と呼び、内外兩宮を併せて大神宮と申しますが、伊勢大廟とわ取りも直さず此の兩宮の事であります。



土偶を製す

紀元六百五十九年

殉死を禁じ たのわ野見宿禰と云う人です。太古の世に身分の高い人が死ぬと、其重なる家來わ、生きながら死者の墓の側に埋められるのでした、で垂仁天皇の御兄弟の倭彦命がお薨れ遊ばした時も、矢張り此の規則に從つて大勢の家來を生埋めにしましたが、五日も六日も死なゝいで、夜晝泣き叫びますので、元より情深い天皇わ、大いに之を悼ませられ、勅して殉死の風を禁じ、後皇后のお薨れ遊ばした時にわ、野見宿禰の工夫した土偶を以て之が代用となされました。野見宿禰わ出雲の人で、至つて力強く嘗て當麻蹴速と云う勇士を蹴殺し、三十二年の永い間朝廷に仕えましたが、土偶を造つて殉死の風を改めた功で、土部職に任ぜられ、性を土部臣と呼んだのです。彼の大忠臣菅原道眞わ、即ち此の宿禰の末孫であります。



小碓尊熊襲を誅す

紀元七百五十七年

日本武尊 わ景行天皇の二番目の皇子です、天皇の十二年に、熊襲わ王命に反いて、良民を苦めましたから、天皇わ早速之をお討ちになりました。所が夫れより八年を経て、再び反きましたので、今度わ皇子小碓尊が出征なされたのです。時に尊わ年十六、僅の部下を引連れて、熊襲の國えと向わせられたので御座います。所が茲に熊襲の大將川上梟帥わ、新に立派な家を造り、其落成を祝うとて、盛な酒宴を開いて居ると解ったので、尊わわざと少女の姿になり、獨り嶮しい山坂を越えて梟帥の家に行き、酒宴の席で興を助け、やがて酔うて倒るゝのを見濟し、かねて匿し持たせられた刀を拔いて、只一刀の下に刺殺しなさいましたが、梟帥わ尊の勇しい振舞いを見て、苦しい息の中から、日本武尊の御名を奉つておいて死にましたとさ。



焼津の野火

紀元七百七十年

東夷の反亂を起したのわ、景行天皇の四十年でした、此の時も日本武尊わ勅命を奉じて御出征遊ばされ、先づ駿河國までおいでになりますと、土地の者わ尊を欺して遊獵に誘い出し、茫々たる野中で一時に四方から火を放ちましたから、背よりも高い枯草わ、忽ち一面の猛火となつて尊の御身を襲うたので、さてわ欺されたかと、尊わ燧を切て火を出し、向火を放ちて之を燒き、其佩び給う叢雲の劒わ、自然に鞘から拔け出て、草を薙ぎ拂いました爲めに、尊わ何の恙もなく此所をお立ちになりました。此の時から劒の名を改めて草薙と云い、土地を燒津と呼びましたが、今東海道鐵道の一驛となつて居るのが夫れです。さて尊わ相摸から上總え渡る舟の中で、橘姫を失わせられ、艱難苦勞を嘗めさせられて、蝦夷全國を平定されました。



草薙劍を祀る

紀元百七百七十三年

熱田神宮　わ尾張國愛知郡熱田驛にある官幣大社です。さても日本武尊わ東夷征伐のお歸りがけに、尾張國まで來て宮簀媛を娶り、別に臨み劔を止めて仰せらるゝにわ、吾都に歸らば間もなく其方を迎え取る程に、之をば其證據とせよと、夫れより尊わ伊吹山の暴神を討ち、毒氣に中てられて空しく伊勢の能褒野でお薨れになりました。熱田に止まつた宮簀媛わ、尊の消息をお待ちになりましたが、年經てから親族の人々を集め、自分わもう大分年を取つたから何時死ぬか分らない、どうか生きてる間に社を建てゝ、寶劒をお祀り申したいと云われましたので、早速社を築いて草薙劒をお祀りしました、之こそ只今の熱田神宮なので、宮にわ大樹森々として茂り、一度こゝに詣づる者わ、神威の尊さに、思わず頭が下ると申します。



皇化三韓に及ぶ

紀元八百六十年

神功皇后 わ仲哀天皇の皇后です、天皇わ熊襲征伐の陣中でお崩れ遊ばしたのですが、皇后わ誰にも夫れを知らさないで、早速多くの船を集め、熊襲を平げて後、直と男装をして新羅國を討ちにいらつしやいました。で新羅王わ吃驚して忽ち降参し、之より年々貢物を献ずる約束をしましたから、皇后わ大矢田宿禰と云う大将を殘して新羅を守らせ、やがて勇ましく御凱旋になつたのです。皇后わ開化天皇五世の孫、氣長宿禰王と呼ぶ人の女で名わ氣長足姫と申され、仲哀天皇の二年に皇后にならせられ、其三韓征伐の後わ威風よく行われ、皇子御誕生の後わ政を執り、群臣わ尊んで皇太后と申し上げました、政を執ること七十年、御齢百歳で稚櫻宮にお崩れ遊ばされたので、應神天皇わ氣長足姫尊を贈らせられ、後世神功皇后と謚したのです。



武内讒せらる

紀元九百三十八年

武内宿禰わ景行帝の廿五年に、東北を巡回し、成務帝の朝に大臣となり、仲哀帝に從つて熊襲を伐ち、更に三韓を征伐して外國に威を張り、後神功皇后の仰せを受けて忍熊と云う謀反人を誅し、應神帝の時にわ筑紫に役人と成つて忠義を盡しましたが、宿禰の弟わ何の怨がありましたか、宿禰わ内々で三韓と力を協せて、謀反を企てゝ居ると訴えましたので、應神帝わ之を御信用遊ばされ、直に宿禰を殺させ様となさいました。時に眞根子と呼ぶ者が宿禰に向つて、貴方が何の罪もなくて殺されるのわ如何にも殘念です、幸い私わ貴方の顔によく似て居ますから、及ばずながら身代りになりますと云つて、潔く自殺しましたので、宿禰わ泣いて都に歸り、罪のない事が明かになつて、元の通り忠勤を勵み、二百八十九歳で世を去りました。

takeno uchi sukune

菟道稚郎子



紀元九百四十四年

菟道稚郎子 わ應神天皇の皇子で、百濟の阿直岐、王仁の二人の學者を師匠として、深く彼國の書物を御研究遊ばし、天皇の廿八年に高麗國から表文を上りましたが、其書面に高麗王敎㆓日本國㆒との語がありましたので、皇子わ使者の面前で、表文を裂き棄て、無禮をお責めなさいました。で天皇わ大層御感心遊ばされ、やがて皇太子に立て、兄君の大鷦鷯皇子わ之を助けることゝ成つたのです。所が間もなく天皇のお崩御と共に、稚郎子わ位を兄君に讓ろうとなされ、兄君わ又容易にお引受がなくて、三年ばかり天皇の位がありませんで、百姓わ大きに困りましたが、稚郎子わ長く生きて居て、天下の心配を增すのわ本意でわないとゝう〳〵自殺してお薨れになり、大鷦鷯皇子わ餘儀なく位にお即きになりましたが、之が仁德天皇であります。



王仁千字文ヲ献ず

紀元九百四十五年

千字文 と云つて名高い漢字の習字帖わ、稚郎子の就いてお學びになつた、博士王仁と呼ぶ人が傳えたのです、はじめ皇子わ阿直岐を先生となされましたが、やがて天皇の思召しで、王仁をも呼び寄せたのでありました。此の人わ百濟の國でも有名な學者で、日本から呼びに行つた使に連れられて參り、其時論語十巻と千字文一巻とを献上致しました。日本に漢字が傳わつたのわ此の時からで、文明の光わ一段と其强さを增して來た樣な思いがします。又阿直岐わお父様の阿華王が死んだので、國に歸つて王の位に即きましたが、其子や孫わいつ迄も日本に殘り、王仁の子孫も矢張り河内の國に住んで、兩方とも日本の教育に就いて、よく働いたので御座います。そして論語と千字文とわ、今日でもなか／＼人に讀まれて居るのです。

17



三年の課役を免ず

紀元九百七十六年

高津の宮にお出遊ばす仁徳天皇わ、御即位の初年に、荒れ果てた宮殿の高臺に上つて、百姓の樣子を御覽になりますと、竈の煙が細々としか見えませんので、天皇わ百姓の貧乏なのを思召し、三年の年貢を免ぜられ、後再び三年前と同じ樣に、高臺にお上りになりますと、今度わ煙が太く立ちますので、天皇わさも御滿足氣に『朕わ富有になつた』と仰しやいますと、皇后わ不思議そうに『この樣に宮殿が破損して居ますのに、どうして富有になられますか』とお尋ねになりました、すると天皇わ『百姓の富有になつたのわ、朕が富有になつたのだ』と仰せられたのです。此の事を傳え聞いた百姓共わ、餘りの勿體なさに、直と宮殿の改築をお願い申しましたが、天皇わやつと三年の後にお聞屆け遊ばされ、宮殿わ忽ちの內に出來上りました。

Takatsu no miya



帝猪を蹴殺す

紀元千百十六年

雄略天皇が葛城山で御獵を遊ばした時、一匹の猪が、俄に林の中から現れ出ましたので、天皇わ家來にあれ射止めよと仰せられましたが、家來わ恐しがつて急いで樹の上え上りましたから、天皇わお腹立なされ、足を擧げて猪を蹴殺し、やがて卑怯な家來を手討になさろうとしました、其時皇后わ之を御覧じて『獸の爲に人を斬り給うとあつてわ、世間の者わ君わ虎狼とも申しましよう』とお諫めなさいますと、天皇わ肯きながら『人わ獵して獸を護るが、朕わ善い言葉を獲た』と、甚だ御滿足の樣子で、やがて皇后と同じ車に乘つて、御氣元よくお歸りになりました。一體雄略天皇わ、御氣象が荒々しくて獵を好ませられたのですが、よく皇后や群臣の諫をお用いになつたのです。そして此の時代にわ養蠶の業が著しく進歩致しました。



皇后自ら蠶業を勸む

紀元千百二十二年

衣服の改正 をする爲めに、雄略天皇わ大いに養蠶業を御奨勵遊ばされ、皇后わ御自身蠶を飼い、又家來を國中に遣して蠶兒を集めさせられたのです。所が栖輕と云う人わ、天皇の仰せを聞き誤つて、多くの嬰兒を集め來て献上しましたので、天皇わ笑いながら、其方自分で養えと、小子部連と云う姓を下されました。之わ當時蠶兒のことを、只子とばかり云つたので、こんな間違が起つたのでした。天皇わ又呉の國から、綾織 呉織 など云う織物や裁縫の職人を召し寄せられ、倭の飛鳥と伊勢とに、其工場を置かれました。かの應神天皇の御代に日本に歸化した秦氏の族一萬八千六百七十人を、各地から探し出して、専ら絹織物の仕事をおさせになりましたから、朝廷え献納する絹布わ、忽ち山の様に積み、秦氏にわ太秦と云う號を賜つたのです。



二皇子歌によせ志を述ぶ

紀元千百四十四年

億計と弘計の二皇子わ、履中天皇の皇子で押磐皇子と云う方のお子様ですが、押磐皇子が害に逢われてから、家來に連れられて播磨國まで逃れ、やがて細目と云う者の家に仕える事となりました。けれどもこの二人が、皇族の御身分でいらせられるとわ誰あつて知りません。或時宴會の席で、二皇子わ歌につれて其意味を述べさせられましたので、細目はじめ皆々驚いて、直に其旨朝廷え申し上げますと、幸いにも御代嗣のない折でしたから、早速迎え取られ、後位に即く段になると、二皇子わ互に夫れを譲らせられ、とう／＼弟の弘計わ兄君の億計に代つて即位せられ、兄君わ又後で弟に代らせられたのですが、前のを顯宗天皇と申し、後の方をば仁賢天皇と申し上げました、お二方ともよく下情に通じて、世わ太平に治まつたのです。



百濟佛像經文を献ず

紀元千二百十二年

欽明天皇 の十三年に百濟の聖明王から、金銅の釋迦如來の像と、經文とを献上しましたので、天子樣わ群臣を召して、佛像禮拜の可否を相談させなさいました。すると物部尾輿と中臣鎌子とわ、宜しくないと云い、蘇我稻目わ禮拜するがよいと申しました、で天子樣わ佛像を稻目に賜わり、稻目わ向原と云う所にある自分の家を寺として祀つたのです。之れから稻目と其子の馬子とわ、反對黨の尾輿や尾輿の子の守屋に、何彼につけて虐められましたが、佛教の一日毎にだん〳〵世間に廣まり、やがて聖德太子わ非常に佛教を御信心遊ばし、馬子と力を協せて、反對黨の守屋を攻め殺し、日本全國に佛寺をお造りなつたのです。さて佛教が日本え傳わつてから、新らしい文明も一所に入つて來ましたので、其頃の世間わ一般に之を喜びました。



佛教隆興し寺院を造る

紀元千二百九十四年

佛教 わ聖徳太子の力で、非常に盛になりました。はじめ太子わ守屋をお討ちになるに就いても、四天王の像を造つて戰勝を祈り、又今日も大和國の法隆寺村に殘つて居る、名高い法隆寺わ、矢張太子が六年の長い月日を經て造らせられた寺で、此の寺にある玉蟲の厨子や、曇徵と云う人の畫いた壁畫などわ、西洋人も驚くばかりの立派なものです。聖徳太子のお薨れになりましてから、推古天皇わ太子のお妃の心を慰める爲めに、宮中の女官に仰せて二張の絹を織らせ、夫れに太子が極樂往生の美しい景を畫かせられ、名付けて天壽國曼陀羅と呼び、今日に至るまで殘つて居りますが、當時佛教の隆盛につれて、日本の美術工藝が著しく進んで居たことわ、此の一幅の曼陀羅を見ただけでも、充分に窺い知ることが出來ると申します。



聖德太子の像

紀元千二百六十四年

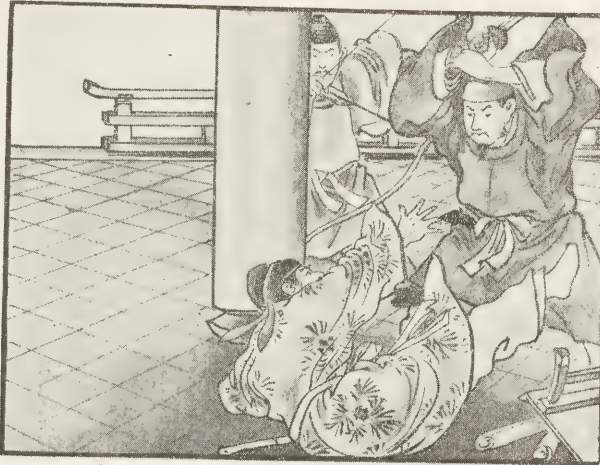
聖德太子　わ用明天皇の二番目の皇子で、豐聰耳皇子だの、厩戸皇子だの又わ上宮太子だのと仰しやいました。至つて御悧發なお方で、二十一歳で推古天皇の皇太子に立たせられ、蘇我馬子と力を協せて政に與り、憲法十七條を定めたり、暦や禮式の事を定めたり、又新羅征伐の軍を出し、國史を編纂したりして、之迄に例のない大きな仕事をいろ〳〵なさいました。殊に太子わ佛法を御信心なされて、四天王寺、法興寺、法隆寺など〻云う、大きな立派な寺を、いつくもお造り遊ばし、時にわ御自分で經文の講議を著し、説教をして人々にお聽せになりました。所が太子わ推古天皇の二十九年に、御壽四十九歳で斑鳩宮にお薨れになりましたので、天下の者わ上下の別なく、農夫も商人も皆聲を擧げて泣き悲しんだと云う事です。



遣唐使の出發

紀元千二百六十七年

遣唐使 とわ唐國に遣わされる使節の事て推古天皇の十五年に、使を隋國に遣わされたのが其初まりです。夫れから舒明天皇の二年にも遣唐使を送られましたが、之より二百五十餘年の間唐國 朝 廷の衰える迄わ、遣唐使と留學生とわ絶えず派遣せられて、唐國の文明を見たり、法律や文學を初め百般の工藝までも研究して、日本に應用したのです。で奈良朝の開化や平安朝の文明が、急に進歩致しましたのわ、全く此の遣唐使や留學生の見聞の結果でした。抑も遣唐使の一行わ、大使副使を初め學生畫工音樂者僧侶などを加えて、多い時にわ五六百人、少くも數十人に達しましたので、之等の人々が各々專門の學藝を研究して來るのですから、當時日本の文明が、急に著しい進歩をしましたのも、別に不思議でわ御座いますまい。



入鹿誅に伏す

紀元千三百五年

蘇我入鹿わ人臣の身分でありながら、天子様もなさらぬ我儘の振舞が多いので、中臣鎌足わ何とかして之を滅し度いと思つて居ましたが、或時中大兄皇子に知られ、夫れより二人で謀をしました。丁度皇極天皇の四年に、三韓から使節が参りましたから、皇子等わよい折りだと、先づ門を閉して、各々武器を取り、そつと時を窺つて居ました。やがて皇子わ子麻呂に入鹿を斬らせなさいますと、入鹿わ轉倒して御座の方に向き、罪なくて斬られるわ何事でしようと奏聞しますと、皇子も入鹿の悪事を奏上なされ、とう／＼此の不忠の臣わ誅せられてしまいました。夫れから入鹿の父の蝦夷を討ちに向いますと、蝦夷わ最早や逃れられぬと見て取り、家を焼いて自殺しましたから、こゝで朝廷の悪者わ、こと／＼く首尾よく滅びてしまいました。

大化元年
蝦夷入鹿の誅は皇極四年六月十二日
六月十四日以後大化元年

644 a.d.



革新の政を布く

紀元千三百五年

大化の改新 と云うのわ、孝徳天皇の御代に、中大兄皇子が鎌足と御相談なされて、日本の政治に大改革を行わせられた事で、其原因と云うわ、世の中が進んで人民の思想も變つて來ましたので、最早や太古の樣な簡易な政に依る事が出來なくなつた事、三韓に於ける日本の勢力を回復するにわ、どうしても先づ内を治める必要のあつた事、朝廷の命令を日本全國に及ばす事などが第一てありました。夫れで改革の要目とも云うわ、土地の處分だとか、京都の修築だとか、戸籍の定めだとか租税の改定だとか、風俗の改良だとかで、何れを見ましても前に例のない大きい改革でしたから、後の世の武家政治と、明治維新の改革とを合せて、之を日本政治上の三大變革と云い、一に大政三遷とさえ云われて居るので御座います。

比羅夫蝦夷を討つ



紀元千三百十八年

阿部比羅夫わ齊明天皇の時の人で、至つて強い大將でありました。で蝦夷を討つて後方羊蹄に日本の政所を置いて歸つて來たのも此の人で、後に肅愼國を征伐したのも比羅夫です。肅愼わ靺鞨とも云つて、欽明天皇の時代に、其國の船が佐渡に來て暫く滯在して居りましたが、毒水を呑んで大方死んでしまい、其骨が佐渡の海岸に、山の樣に積まれたと云ふ話です、比羅夫わ一度ならず二度迄も、此の肅愼を討ち、大勝利を占めて歸りました、此の頃肅愼と申すのわ、多分今の樺太邊であろうとの事です、さても比羅夫わ之より後、新羅を討つて百濟を救うために、大いに唐國の軍勢と戰いましたが、しまいにわ太宰帥と云つて、九州の鎭守の役を仰せ付けられ、大錦上と呼ぶ、立派な官に進んだのです、嗚呼比羅夫わ眞に日本男兒です。



西海の邊防を嚴にす

紀元千三百二十五年

三十八代 天智天皇 わ舒明天皇の第二皇子で、葛城皇子とも中大兄皇子とも仰せられ、近江大津に都して位にあること僅に四年に過ぎませんでしたが、天皇の御偉業わ數え切れぬ程で、先づ皇極天皇の御代に蘇我入鹿を誅し、孝徳天皇を輔けて大化の改新を行い、齊明天皇の時に新羅を征伐し、水時計を作つて人民に時刻を知らせ、學校を興して教育を盛んにする等、一々擧げて見ますと、全く中興の天皇の名に負かない、英明の天子樣で御座います。又之迄三韓などの屬地わ、日本に何の益もなく、却つて其取扱に困りますので、夫れよりも海防を嚴重にした方がよいと思召して、筑紫に水城を築き、專ら内國の政治に盡させられましたから、從つて唐國が日本に對する考えも變り、之れより双方共使者を送つて、仲よく交る事となつたのであります。

鎌足と談山神社



紀元千三百二十九年

藤原鎌足 わ本姓中臣、天兒屋根命の後裔でありま
す。皇極天皇の三年に神祇伯と云ふ官に任ぜられました
が、病氣の爲めに之を辭退し、やがて輕皇子に知られ、
中大兄皇子と共に入鹿を滅し、孝德天皇の御即位遊ばさ
れてから、内臣に任じて政を輔け、大錦冠を授けられ
ました。天智天皇御即位二年の秋に、鎌足わ重病に罹り、
天子樣わわざ〳〵其家にお出になつて望む所をお尋ねな
さいますと、鎌足わ天恩の忝きを感謝し、臣不肖生き
て軍國に益なく、此の上死して百姓を煩わすに忍びませ
んから、願くわ臣の葬儀わ質素にして戴き度いと奉答し
ました。之を傳え聞いた人民わ何れも鎌足の德を感じた
のです、後天子樣わ大織冠と金香爐とを下賜せられ、特
に大臣の位をもお授けになりました、大和多武峰の談山
神社わ即ち鎌足の墳墓です。



大海人兵を吉野に擧ぐ

紀元千三百三十二年

壬申の亂　とわ大友皇子と大海人皇子との戰です。天智天皇お崩れの後、大友皇子わ即位して弘文天皇と仰せられました、所が前皇太子大海人わ兵を吉野に擧げ、遂に叔父と甥との戰になりましたが、不幸にも弘文帝の軍わ負けて仕舞いました、初め大海人わ病身の爲に皇嗣を辭して吉野山に入つて僧となられたのです。夫れと云うのわ大海人わ、兄君の天智天皇と御仲が悪いので、一時體よく引退つたので、間もなく反旗を立てゝ、弘文天皇を攻められたのです。弘文天皇わ未だ二十五歳の御身で、近江園城寺のあたりで自殺せられ、大海人わ美濃不破の陣から、倭の京に歸り、岡本宮で位にお即きになりました。即ち天武天皇とわ此の方の事です、そして此の戰わ、丁度其年が壬申に當りますので、世に之を壬申の亂と申します。



大和平城宮成る

紀元千三百七十年

奈良の都　わ元明天皇の和銅三年に、之迄の大和藤原宮が不便なので、こゝえ遷されて平城京と呼んだのです。平城京の規模わ至つて大きく、宮城から役所、市街などの規則正しく、後の平安城の作り方も全く之に依つた位です。平城京わ元明天皇から光仁天皇迄、七代七十五年間の帝都で、朝廷の最も盛んな時でしたから、文明の光りわ後の世に迄輝いて居ります、即ち佛敎の盛大わ其極點に達し、繪畵だの彫刻だの建築だのゝ術が非常に進歩し、遣唐使の往復も多く、唐國の文明を輸入し、古事記や風土記等と云う歴史も新たに出來ました、夫れが平安に都の遷ると共に、奈良の京わ忽ち衰えて、弘仁の亂の後にわ、さしも美しかつた市街も頽れて仕舞いたので、即ち今の奈良わ、昔の左京のたゞ一部分に過ぎぬので有ります。



太安万侶古事記を撰す

紀元千三百七十二年

古事記 わ日本で一ばん古い歴史の本です、はじめ天武天皇わ、正しい日本歴史を作りたいとの思召しで、川島皇子等に其撰定の勅が下りました。所が其頃漢文の歴史を作るのわ、なか〳〵難しい仕事でしたから、先づ稗田阿禮と云う物知りに、其道の本を讀ませ、天武天皇のお崩れ遊ばしてからわ、矢張此の業を續けたのですが、やがて阿禮も年老いて、いつ世を去るか知れませんので、急に太安万侶に命じて、阿禮の述べる所を筆記させることになつたのです。で此の本わ日本開闢から推古天皇の御代迄の出來事を、都合三巻に記したもので、和銅四年九月十八日から始めて、翌五年正月二十八日に出來上りました。阿禮の如き物知りと、安万侶の樣な勉強家がありましたから、日本の古い歴史わ、もう此の時代に編纂されたのでした。

東晋 317 a.d. 419 a.d.



渤海國初めて來聘す

紀元千三百八十八年

渤海の存立

渤海國 とわ何所でしよう○支那の東普と云つた頃に、今の滿洲邊に國を建てた一族です、さて聖武天皇の神龜四年に、渤海王わ使を日本に送りましたが、途中路に迷つて蝦夷に流れ着き、使節わ土人に殺され、生き殘つた者が命から／＼京師に來て、王の手紙と產物とを献上しました○其手紙の文わ至極丁寧で、新たに交際を請い、貂の皮三百枚を贈り奉つたので、天子樣にも大きに御滿足で、使の者にわ夫れ／＼位を授け、長途の苦勞を慰め、わざ／＼引田喜麻呂に仰せて送り返させ、渤海國王にわ答書をお送りになりました○之より同國からわ代々使節を遣し、越前敦賀を上陸地と定めてありましたが、醍醐天皇の御代に、渤海國わ近所の强國のために滅されて仕舞いましたから、自然日本との交際も絶えたので御座います。

317 a.d. 420

A.D. 728, in this year messengers came from Bokkai



山邊赤人富士を詠ず

奈良朝の歌人　にわ名高い人々が多く御座います、一體奈良七代七十五年の間わ、文學美術が著しく進步して、靑丹よし奈良の都に咲く花の、匂うが如く今盛りなりと云う歌を見ても知ることが出來ます。日本の一ばん古い歌の集の萬葉集も此の時代に出來ましたので、當時名高い歌人にわ、柿本人麻呂、山邊赤人、大伴家持、山上憶良などで、中にも赤人と人麻呂とわ、山柿とさえ呼ばれて、何れ劣らぬ歌の名人であつたのです。赤人が東國の旅をして、駿河の田子の浦から、富士の姿を望み見ながら『田子の浦ゆ、打ちいでゝ見れば眞白にぞ、富士の高根に雪わふりける』と詠んだのわ、明治の今日に至るまで、知らぬ人わ有りますまい、萬葉集が一ばん古い歌集である如く、懐風藻わ最も古い詩の集で、之も同じ頃に出來ました。


僧行基と東大寺

紀元千四百〇七年

奈良の大佛 の鼻の穴えわ傘をさして入れるとわ、其大きいことを例えた話ですが、此の大佛わ、聖武天皇の天平十二年に、鑄造の事を思し立たせられ、十五年秋勅を下して、大和添上郡に地を撰び、畏くも天子様御自身に、土を御衣の袖に裹んで壇をお築き遊ばされ、僧行基わ日本國中を勸進して廻り、前後八度鑄直してやつと出來上りましたから、孝謙天皇の天平勝寶元年に、東大寺を落成して其所に移させられた、大佛御像の高さ五丈三尺五寸、之が鑄造に用いた銅ばかりでも、七十三萬九千五百六十斤を要したと申します、扨天平勝寶四年の四月、大佛開眼の供養會わ行われ、天皇上皇文武百官を率いて之に臨ませられ、一萬の僧を請じ、諸寺の音樂を殘らず集め、日本に佛敎が渡來して後、最も盛な御儀式を行わせられました。



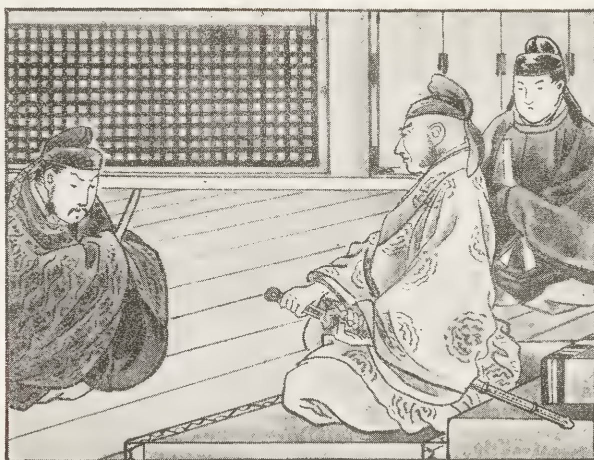
王朝の隆盛時

聖武孝謙稱徳帝時代

Tenpyō jidai

729 a.d. 748

天平時代 わ奈良の朝廷の最も盛な時代でした。夫れわ隋唐二國の文明が、絶えず日本に入り、中にも天平時代にわ唐朝全盛の絶頂に達し、我國からわ留學生を送り、先方からわ僧侶が來て、遠く歐羅巴の文明さえ、唐の朝廷を經て、悉く日本に集りましたから、此の際奈良の都わ、百花爛漫として咲き匂うとも云う樣な全盛時代でした。今正倉院に納められてある天平時代の美術品にわ、西洋の學者さえ感心する立派なものが少くありません、夫れと云うのわ、桓武天皇の平安遷都の後、奈良わ急に衰微して、兵亂に逢うこともありませんでしたし、殊に空氣が乾燥して居て、品物の保存にわ、自然に適した土地でしたから、一千有餘年の今日、猶天平時代の花やかな藝術品を見ることが出來るのわ、何と幸福なことでわ御座いませんか。

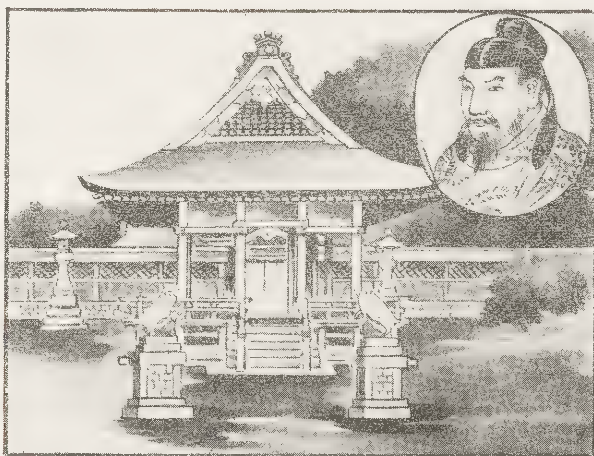


道鏡天位を窺ふ

紀元千四百二十九年

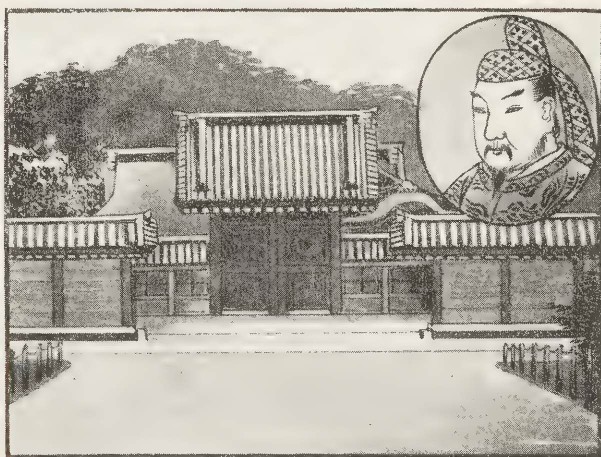
弓削道鏡 わ河内の人、少年の時僧となつて學問の名高く、遂に孝謙天皇に寵せられて太政大臣禪師と云う、立派な位を戴き、文武官百の上に立つ樣になりましたが、夫れでも未だ飽き足らないで、我儘勝手な振舞をして、とう〳〵太宰府の神官で阿曾麿と呼ぶ者の言に從つて、天皇の位に即こうとしましたので、流石の天子樣も之には惑わせられ、和氣清麿を使として宇佐八幡の神敎をお聞せになつたのです。清麿わ勅命を奉じて筑紫に使し、やがて歸つて、神のお許しのなかつた旨を奏聞しましたから、道鏡わ目算が外れ、大いに怒つて清麿を遠國に流しました。けれども間もなく孝謙天皇がお崩れ遊ばして、光仁天皇の御即位となり、惡人道鏡の罪わ、殘らず知れて、忽ち下野國え流され、朝廷の奸賊わ潔く除かれたのであります。

清麿と護王神社



紀元千四百三十年

和清氣麿　わ備前藤野郡の人で、孝謙天皇の朝に道鏡が天位を奪おうとしました時、勅を奉じて宇佐に使し、神の教えを聞きました。曰く、我國わむかしから君臣の分が明かである、臣として天位に即くことわ相成らぬ、無道の人道鏡如き者わ速かに之を除けと、清麿わ歸つて有りのまゝを申し上げました。すると道鏡わ口惜しさの餘り、清麿を別部穢麿と改名させて大隅國に流し、猶途中で之を殺そうと企みましたが、神様のお助けで御座いましよう、急に大雷雨が起つて、道鏡の遣した刺客わ手を下すことが出來ませんでした、あゝ道鏡わ悪者です、此の危急な場合に、一人の忠臣清麿がありました爲めに、我皇室わ幸いに何の事も御座いませんでしたが、若し清麿が居なかつたら、どうでしよう、清麿が護王神社と祀られたのも當然です。



桓武帝と平安宮

紀元千四百五十四年

平安城　とわ桓武天皇から後、代々の天子様の宮殿のあつた、今の京都の事です。さても奈良に都を定めさせられてより、早くもこゝに七十餘年を經て、さしも立派だつた宮殿も頽れてしまいました、元來奈良わ都としてわ狹いばかりか、交通の便も悪いので、萬事に不都合が少くありませんから、此の際どうしても他え都を遷さなければなりません、桓武天皇わ天資英明に渡らせられ、政の改革を行わせられたばかりか、山城國葛野郡の地を以て都と定め、其規模をば支那の都の長安に倣つて構えさせられ、奈良の舊都に較べると、又一層立派な都が出來上りましたから、延暦十三年こゝえお遷りになり、人々喜んで平安京と呼びましたが、案の定皇都わいよいよ平安に、夫れから明治維新まで、歴代の帝都となつたので御座います。

弘仁 810
(嵯峨) 823



田村麿蝦夷を平定す

紀元千四百六十一年

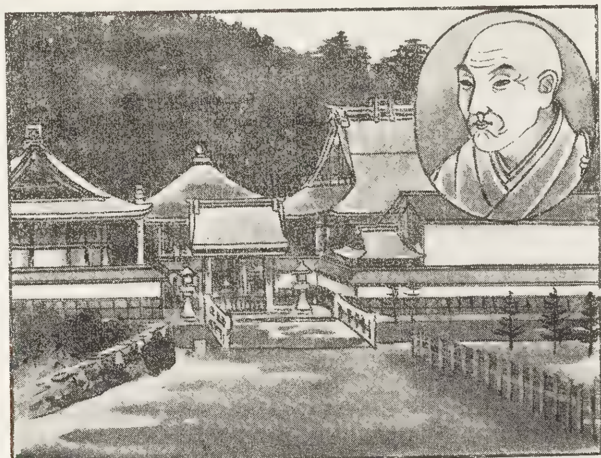
坂上田村麿 わ身長五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、眼わ蒼隼の樣で髯わ金の針を植えた如く、一度怒れば鬼神も恐れ、又笑う時わ小兒も馴れると云う、天晴れ名將でありました。近衞少將となつて蝦夷を征伐し、常に賊軍平定に出で、殆ど都に止まつた事がありません、田村麿わ佛敎を信心して、京都に清水寺を造り、戰爭に行く時にわ、屹度參詣しました、こう云う豪い大將も、病にわ勝たれず、弘仁二年五十四歳で世を去りました、死骸をば棺の中に立てゝ、平安城の方に向わせ、甲冑弓矢米鹽の類も一所に埋めたのです。で之より後戰のある時にわ、屹度此の將軍の墓が鳴りました、又大將の出征する時にわ、先づ將軍の墓え參詣することゝなりました、吁何と偉い人でわありませんか、さればにや將軍の名わ今も名高いのです。

Saka-gami no Tamura maro

藥子の變

紀元千四百七十年

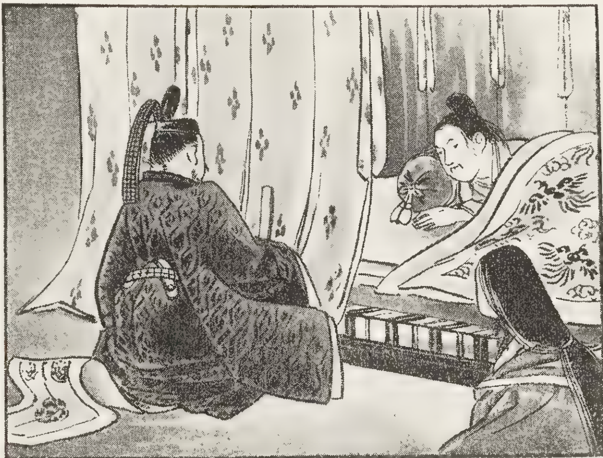
藤原藥子わ仲成の妹です、仲成わ桓武平城の二朝に仕えて參議となり、藥子わ內侍となり、平城帝に可愛がられ、仲成わ增長して大臣大將も及ばぬ權力を振いました。所が嵯峨天皇の御即位遊ばすや、藥子わ平城上皇に勸めて、都を遷して再び位にお即きになる樣に企み、仲成も又此の謀を助けました、上皇わ藥子の言葉を御信用なされ、仲成に宮殿を造る事をお任せになりましたから、嵯峨帝わ藥子の職を奪い、仲成を捕えて殺させ、平城上皇と藥子とわ、東國さして逃げ出しましたが、田村麿わ嵯峨天皇の仰せを受けて多くの兵隊を引き連れて、其途を守つて居て、上皇を通しませんでしたから、もうどうする事も出來ません。上皇わ宮に歸つて髮を削り、藥子わ毒を飮んで死にました、之が歷史に名高い藥子の變と云ふのです。



弘法大師と高野山

紀元千四百七十六年

弘法大師わ讃岐多度郡の人で、幼い時から學問を好み、十五歳の時京都に上つて僧侶となろうと思い、二十歳で髮を削つて敎海と云い、夫れから東大寺で空海と云ふ名に改めました。空海三十歳の頃に、遣唐大使藤原葛野麿について唐に行き、各地の名僧に就いて敎えを受け、やがて唐の都の長安の青龍寺で慧果を師匠として學問しましたが、慧果わ空海のえらい事を知つて、よく敎えて吳れました。さて空海わ日本え歸つて後わ、諸國を廻つて說敎をなし、遂に紀伊國の高野山に一寺を建て丶、之を金剛峯寺と名付けたのです、そして此の名僧わ、六十二歳で金剛峯寺に示寂しました。示寂とわ名僧の死んだ事です、空海わ詩文も上手で、書も巧みに、かの伊呂波四十七文字わ、此の人が創めたのだと云う說もある位で御ざいます。



基經攝政關白となる

紀元千五百四十七年

攝政關白 とわ天皇を輔けて、文武百官を統い、そして萬機の政をする職であります。一體此の職わ、元慶八年に太政大臣藤原基經から初まつたので、時の帝の光孝天皇にわ大勢のお子様がありましたが、帝わ基經を憚つて未だ太子をお定めになりません、所が仁和三年帝の御病氣の時に、基經わお床に侍つて、太子の事をお話申上げますと、帝わ只卿の考えに任せると仰しやいました、で基經わ臣の見る所でわ定省が適任かと存じますと、申し上げますと、帝わ聞いてさも御滿足氣に、早速定省を召て右に其手を取り、左に基經の手を取つて泣きながら、大臣の勳わ多い、汝決して忘れるなと、遂に定省を太子になさいましたが、之が宇多天皇です、そして基經わ光孝帝の遺勅に從つて關白となり、萬機の政を行つたのです。

× Gen-pei-ni-shi
"Genji" "Heike"



源平二氏 の起つたのわいつでしよう。平氏わ桓武天皇の皇子葛原親王の子、高望にはじまり、清盛の時代が一ばん盛でしたが、遂に源氏の爲めに壇の浦で滅されました、又源氏わ淸和天皇の皇子貞純親王の子の經基に、源姓を賜わつたのがはじめです、全體平氏わ赤い旗を、源氏わ白い旗を用いて、共に朝廷に仕えて遠近の悪者を平げたのですが、平清盛の時代にわ、二氏の間が仲悪く、保元平治二度の戰で、源氏の勢わ挫けてしまいました、けれども頼朝わ、やがて東國に起つて、見事平氏を滅し、白い旗の色わ再び鮮になつたのです。かくて頼朝わ鎌倉に幕府を開きましたが、之も三代で滅びてしまい、源平二氏の勢力わ共に消え失せましたが、之に代つて天下の兵權を握つたものわ、實に彼の北條氏で御座いました。

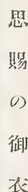


金岡馬を描く

紀元千五百四十八年

巨勢金岡　わ名高い畫家であります。で時々宮中に召されて、屛風や襖に得意の筆を振いましたが、中にも賢聖障子と云つて、昔から名のある人々の肖像を書いた事わ、誰知らぬ者もありません、金岡に就いて面白い話わ澤山ありますが、其中で宮中の障子に書いた馬わ、夜になると其所を抜け出して、萩の戸の萩を食い荒しましたが、馬を繫いだ風に書き直させてから、もう其事が止んだと云います、夫れから又仁和寺の壁にかいた馬わ、之も夜な〳〵抜け出して、近所の田畑を荒しますので、とう〳〵兩眼とも傷付けて、抜け出るのを防いだと申します、こう云う說わ、元より信用することわ出來ませんが、如何に金岡の筆が巧みで、世に貴ばれたかわ、こんな話が殘つて居るので見ても、知ることが出來るでは有りませんか。

Sugawara michizane


恩賜の御衣

紀元千五百六十一年

A.D. 901. michizane died in A.D. 903.

× **菅原道眞**　わ是善の三番目の子で、幼名わ阿呼、十一歳の時月夜の梅を見て詩を作り、後都良香に就いて學問しました。宇多醍醐の二朝に仕えて大臣に任じ、一身を抛つて國家の政に盡しましたが、當時の朝廷わ藤原氏の勢いよく、爲めに儒者の家から身を起した道眞わ、藤原時平等の小人に恨まれて、遠く筑紫の端に流され、延喜三年五十九歳で彼の地に空しくなつたのです。けれども後になつて其罪のない事が明かになり、大臣の役を復して正一位を贈られたばかりか、天滿天神と祀られました、道眞の筑紫に居た時、丁度九月の十三夜の月を見て、一篇の詩に感慨を述べましたが、其詩わ『去年の今夜清涼に侍し、秋思の詩篇獨り斷腸、恩賜の御衣今此に在り、捧持して日々餘香を拜す』と云うので、之を讀む者わ誰も泣かずに居られません。



寒夜の脱衣

延喜時代

醍醐天皇が或冬の寒い夜に、御衣を脱がせられて、百姓の苦しみをお察し遊ばされた事わ、仁徳天皇の御聖徳と共に、後代まで傳えられてあります。天皇わ宇多帝の第一皇子で、寛平九年十三にして即位せられ、時平と道眞とわ萬事お世話申し上げたのです。で昌泰二年時平を左大臣に、道眞を右大臣になさいました、翌年上皇に御相談の上、道眞を關白にしよやうとなさいましが、間もなく其道眞わ、時平に怨まれて、筑紫に流されました、之と云ふのわ天子樣のお歳がお若くて、前後のお考が足らなかつたからです、巨勢金岡に代々の功臣の像を描かせ、小野道風に字を書かせて、之を賢聖障子と名付けられたのも醍醐天皇です、さて天皇わ延長八年位を皇太子に讓り、藤原忠平に幼主を輔けさせ、四十六歲でお崩れになりました。

紀元千六百年、



将門誅に伏す

天慶の亂　とわ平将門の反いた事です。将門わ鎮守府将軍良持の子で、至つて勇しい男でしたが、藤原忠平に檢非違使と云う役にして呉れと頼みましたけれども、忠平が許しませんでしたから、怒つて東國に行き、叔父の國香を殺しました、て國香の子の貞盛わ将門と戰つて敗れ、将門わ圖に乘つて上野下野を奪い、平親皇と呼んだのです。又将門の友達の藤原純友わ、伊豫で旗を上げ、東と西と一時に騷動をはじめましたので、朝廷でわ大いに驚き、藤原忠文を征東大将軍に、小野好古を山陽追捕使に任じて、東西の賊を伐たせられました。所が之より先貞盛わ下野の藤原秀郷と共に将門を殺し、一方純友も又殺されまして、二人の首わ獄門に梟され、貞盛等わ皆褒美を戴いたのです、之わ丁度天慶三年の事ですから天慶の亂と申します。

老吏の進言

紀元千六百七年

村上天皇が或時紫宸殿にお出ましになつて、一人の年取つた役人を召させられ、今の世の政わ延喜時代に較べて如何であるかとお尋ねになりましたが、役人わ只恐れ入つて何とも申し上げません、そこで天子様わ二度も三度も御下問になりますので、役人わ恐る恐る頭を上げて、謹で申し上げます、只今の御代わ太平で、何とも申し上げようが御座いません、けれども主殿寮で松明を多く進め、率分堂の前に草の生えるのわ、少しく私の殘念に思う所で御座いますと答えました、之わ主殿寮が松明を點して、夜遲くまで務るにも拘らず率分堂に貢物が少くて、人の行來が少なく、其爲め草が生えたと云う意味でした、で天子様わ之を聞し召して、大いに愧ぢさせられ、夫れよりわ一層政治に大御心を注がせられたので有ります。

x Fujiwara no Michinaga

道長の驕奢

紀元千六百五十五年

〆**藤原道長** わ後一條天皇の御即位遊ばしてから攝政となり、從一位に叙せられて驕りを極めた人で、其娘が中宮になつた時に、嬉しさの餘り『此の世をば、我世とぞ思ふ望月の、缺けたる事のなしと思へば』と云ふ一首の歌を詠みましたが、全く此の歌の通りで、道長わ其位人臣を極めたばかりでなく、三人の娘わ皆皇后の位に上り、四人目の娘わ敦良親王の妃、五番目の娘わ小一條院の妃となりました。で一條院に取つてわ叔父、後一條天皇にわ祖父に當り、天下の榮譽を自分一人の身に集め、其法性寺と云ふ寺を造る時などわ、神泉苑の庭石をさえ遠慮なく採り、又國々に布令を出して、假令朝廷の事を怠つても、己の云い付けた仕事を怠たてわならぬぞと申し付けましたが、此の榮華の大臣も、萬壽四年十二月六十二歳で薨じたのです。



六歌仙

平安朝時代

和歌の隆盛 になつたのわ、醍醐天皇の御代に紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑など丶云う、當時第一の歌人に勅して、古今和歌集を撰ませになりましたのを見ても解ります、其頃名高い歌人でわ、僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、大友黒主、小野小町の六人で、世に六歌仙と云うわ、此の人々で、又大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城を梨壺の五歌仙と呼びました。女でわ紫式部、清少納言をはじめ、赤染右門、和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔など丶云う、著名な人々が一度に出て、巧みな歌を作りました、唐の文學が日本え入つて來てから、平安朝わ歌にも文章にも、後の世までも殘るものが多く出來て、前にも後にも、例のない隆盛で、全く春の花が一時に咲き亂れた樣で御座いました。

29



石山の秋(S)月

平安朝時代

源氏物語 清少納言 紫式部

Murasaki Shikibu

Jōtō-mon-in was the title of Fujiwara Akiko, daughter of Michinaga and a court lady to Ichijō-tennō and the mother of the emperors Goichijō & Go-suzaku (a.d. 988–1074)

紫式部わ上東門院の仰せを受けて、石山寺に立籠り、有名な源氏物語五十四帖を著しました、此の物語わ、醍醐朱雀村上三朝の事柄を、小説風に面白く書いたもので、文章も巧みに考えもよい、立派な書物です、一條天皇が之を御覧なさいまして、紫式部わよく日本紀を讀んだものぢやと仰せられましたから、之よりわ日本紀の局とさえ呼ばれたのです、さればこそ今日に至るも、國文の模範として廣く用いられて居ります、紫式部わ藤原爲時と云う人の娘で、子供の時から一を聞いて十を知ると云う風で、誠に悧口な女でしたが、後藤原宣孝と呼ぶ人に嫁して、よく家を修めました、殊に式部わ大層品行の正しい人で、女の道を固く守り、人々からも敬われて居たのです、其娘の大貳三位も、又和歌に名高い人となりました。

日本紀 = 日本書紀 神代より持統十一年までの歴史 692 a.d.



刀伊の寇を退く

紀元千六百七十九年

刀伊の賊が五十餘艘の軍艦を以て、九州え攻めて來たのわ、丁度後一條天皇の御代の事です、賊わ對馬を取つて、壹岐に入り、守護藤原理忠はじめ、島人を殘らず殺して、なか／＼勢が激しくありました、太宰權帥藤原隆家わ、弓矢の家に生れた人でわ御座いませんが、早速軍隊を繰出して自分が先に立て進み、首尾よく賊を打ち退けました、併し此の戰爭て、日本方の損害わ、戰死三百餘、捕虜千二百、牛馬の奪われたもの丈でも二百匹に達したのです、一體遣唐使が止められて、外國との交際が絶えてから、高麗や新羅とも交通しませんでしたから、高麗わ日本を侮つて、時々侵入して來たのですが、とう／＼刀伊の賊が攻め込んだのです。こんな大敵を引受けて、思うまゝ打敗つた隆家の手柄も、又大きいでわ有りませんか。

紀元千七百十六年



頼義頼時を討つ

安部頼時 わ陸奥の豪族で、近隣を攻め平げて六郡の酋長となり、大いに威を振いましたから、朝廷でわ源頼義を遣つて、之を平げさせたのです。所が頼時の戰死してからわ、其子の貞任が官軍に敵對をして、九年の間よく戰いました、中にも天喜五年冬の大戰にわ、官軍わ散々に敗れて僅に六人を餘す丈になりましたので、頼義わ出羽の清原氏に加勢を頼み、賊を小松の柵に攻めて大勝利を得、次で衣川の柵を拔き、勢に乘つて厨川を攻めた時わ、賊の守備が固くて、官軍の旗色が惡いので、頼義わ近所の人家を崩して濠を埋め、賊の陣に火を放けて燒き拂い、賊將貞任を捕えて斬り、宗任等を降參させました、で朝廷でわ頼義の勳功を賞して伊豫守とし、義家を出羽守に任じ、目出度く平定したのです、之が名高い前九年の役です。

後三條帝の御精勵

紀元千七百三十年

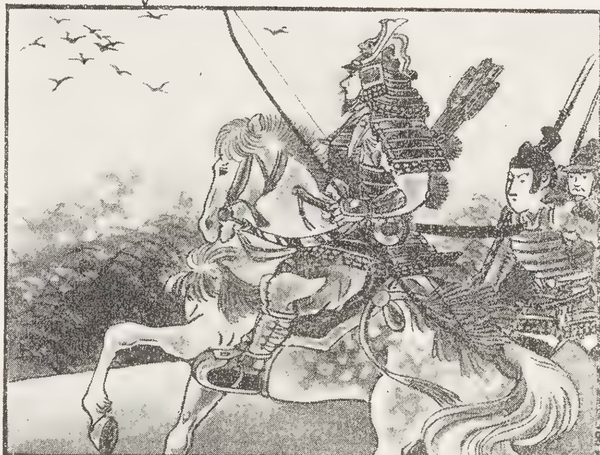
後三條天皇 わ後朱雀天皇の第二皇子で、常に藤原氏の我儘な振舞を不快ず思召し、御即位の後わ政治の上にも一方ならぬお骨折をなさいましたが、桝の法を定める爲めに、御自身で簾の竹を抽いて寸法をお定めになり、桝の出來るなり御殿の庭の砂を盛つて試驗せられ、後穀倉院の米を一々斗らせなさいました。名高い延久の宣旨升わこうして出來上つたのです、其他藤原氏の權力を壓え、或わ儉約の美風を勸め、記錄所を設けるなど、前代に例のない程、政務にお盡し遊ばされたのですが、惜い事にわ位に在る事僅に四年、御壽四十で空しくお崩れになつたのです。天皇崩御の知せが傳わると共に、上下皆泣き悲み、藤原頼通さえ、御飯の箸を投げ出して泣いたと申します、されば後世天皇の御治世を、延喜時代と併せて稱します。



延暦園城二寺の僧兵

紀元千七百三十五年

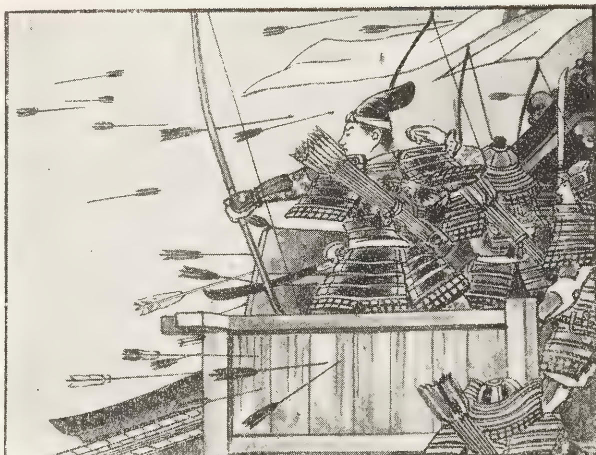
僧兵とわ僧侶の兵士です。平安朝以後わ、長く太平が續いて、人の心も弱々しくなり、戰爭の事も僧侶の禱を本としましたから、佛寺の繁昌と僧侶の威勢とわ其極度に達し、一方藤原氏の威力に壓えられて、英雄も志を伸べることが出來ず、餘義なく僧侶の群に入つて、こゝに僧兵と云う一團體が出來たのです。で僧兵の中で、最も亂暴を働いたのわ、延暦興福の二寺をはじめ、園城寺、清水寺、多武峰、金峰山などで、少しでも朝廷の役人の仕方が氣に入らぬと一山の僧兵が蜂の巣の様に起つたのです。故に白河法皇でさえ、朕の心の儘にならぬのわ、加茂川の水、双六の釆、山法師の三つだと仰せられました、そして僧兵わ朝廷に迫つて來るばかりでなく、勢力の關係から諸寺互に爭い、其勢わ華山帝の頃から鎌倉幕府の始迄盛んでした。



義家再び陸奥を征す

紀元千七百四十七年

源義家 は前九年の役が濟んで都に還り、關白頼通を訪ねて彼地の戰爭談をし、たまたま大江匡房の言葉に感心して此の人を師匠と仰ぎ、兵法を學びました。後陸奥守となつて家衡淸衡等の軍と戰い、數萬騎を率いて金澤柵を攻めました時、敵わ伏兵を以て待つたのを、折から雁の列が亂れたのを見て、忽ち夫れを覺り、一戰の下に大敵を破つたのです。其時義家わ將士を顧みて、吾もし匡房に學ばなかつたなら、屹度敵の計略に陷つたで有うと、心から喜びました。此の人わ頼義の長男で、七歳の時に岩淸水で元服して八幡太郎と呼ばれ、文武兼備の名將として、誰知らぬ者も有りません、陸奥に行く時、勿來關に散る花を見て『吹く風わ勿來の關と思えども、みちもせに散る山櫻哉』と詠みました、世を終る時その年六十八でした。



崇德上皇兵を擧ぐ

紀元千八百十六年

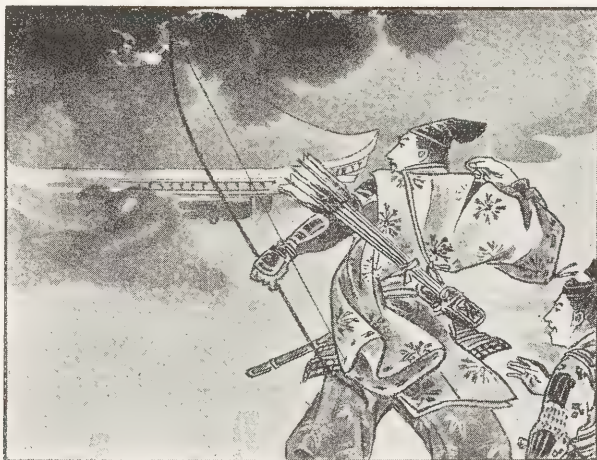
保元の亂　とわ後白河天皇と崇德上皇との戰爭です。天皇わ源義朝平清盛等に勅して、上皇の軍を討たせ、夜に乘じて上皇の宮を襲う事となりました、所が之より先に上皇わ、白河殿に武士を召され、平忠正源爲義其子の爲朝等が參殿して、戰の工夫をしたのです。時に爲朝わ夜襲の利ある事を申し出ましたが、左大臣頼長が不賛成を唱えましたから、上皇の軍わ全く戰爭の時機を失つて、反對に清盛等に夜襲せられたのです。清盛や義朝わ勝に乘つて方々の門を攻め、上皇わ命からく仁和寺に逃げ込んで髮を削り、頼長わ逃げ出す途中で敵の矢に中つて斃され、爲朝や忠正わみんな降參してしまいました。で清盛わ叔父の忠正を斬り、義朝わ父の爲義を殺して、事わ治りましたが、此の時から清盛の威勢わ急に加わつたので有ります。



重盛義平と紫宸殿前に闘う

紀元千八百十九年

平治の亂 わ續いて起りました。平治元年に清盛わ、重盛等を連れて熊野に參詣しましたが、其留守中に藤原信頼わ、義朝と相談して旗上げをしたのです。藤原氏の權力爭いと、源平二氏の勢力爭いとが、此の戰の原因となつたのでした。さて平治の亂で、源氏の嫡子義平わ、平家の嫡子重盛と、紫宸殿の椋の木の下で花々しく戰い、お庭の櫻と橘の木とを七度迄も駈け廻つて、追いつ追われつしましたのわ、名高い話です。そして此の戰の結果わ如何かと云うに、信頼わ殺され、義朝わ尾張國まで落延びて長田父子に殺され、源氏の一門とてわ、頼政の一家を殘すばかりで、他わ殘らず滅び、之に反して平家の方わ、朝日の昇る勢となりました。つまり保元と平治との戰わ、清盛に取つてわ、眞によい機會であつたのであります。



頼政怪禽を射る

紀元千八百二十八年

源三位　頼政わ、高倉帝の時に、紫宸殿上の怪物を射て名を擧げ、治承元年にわ謀を以て延暦寺の僧兵を退けました。常に清盛の振舞を憎らしく思い、とう〳〵以仁王の令旨を奉じて平氏を滅そうとしたのです。此の時頼政わ、最早や七十餘の老人でしたが、其計畫わ悉く外れ、宇治川まで退いて、こゝに平氏の軍を食い止め樣としました、けれども此の戰わ、全く頼政の負けとなり、以仁王わ南都え落ち延びる途中で、流れ矢に中つて薨じ給い、力と頼む一子兼綱も戰死し、頼政自身にも重傷を負いましたので、最早や此の上どうする事もならず、平等院の扇が芝と云う所で『埋れ木の、花咲くこともなかりしに、みのなる果ぞ哀れなりける』と、一首の辭世の和歌を殘し、見事に腹掻き切つて、此の白髪の英雄わ世を去つたのでした。



重盛父を諫む

紀元千八百三十九年

後白河上皇

平清盛 わ刑部卿忠盛の長男です。保元平治の亂に戰功がありましたので、だん〱位を進められて從一位大政大臣となり、後病氣の爲め髮を削つて名を淨海と改めましたが、我儘勝手な振舞を致し、福原に都を築いたり、法皇を幽閉したり、亂暴な事ばかりやりました。けれども其子重盛わ、父に似ぬ忠義な人て、常に清盛の行を諫めたのです。で重盛が死んでからわ、最早や誰も諫める者が無いので、平家の人望わ一體に惡くなりました。其間に源頼朝わ東國で旗あげをして、怨み重なる平氏を滅さうとしかゝりました、清盛わ一家の急を前に扣え其心配の最中に、熱病に罹つてとう〱死んでしまいましたが、其遺言に、屹度頼朝の首を斬つて、己の墓に供えて呉れよと云いました。けれども此の望みわ遂げられませんてした。

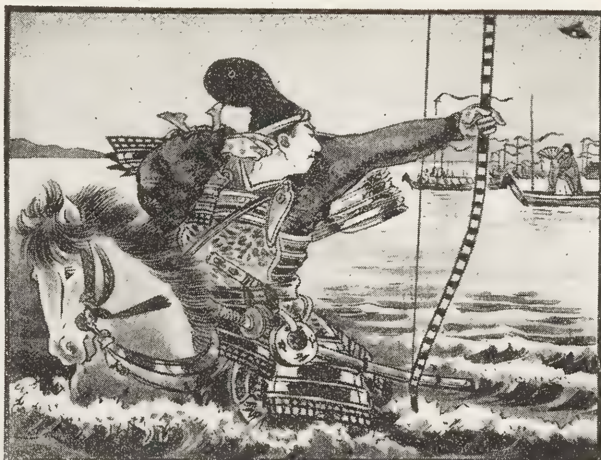


鵯越の嶮を下る

紀元千八百四十四年

一の谷は平氏が安徳天皇の御殿を造り、城を築いて頼朝の軍を待つた所です。こゝわ廣さ三里、北わ山に圍まれ、南わ海に向い、西わ一の谷、東わ生田森を境として、十萬餘人の軍勢が之を守り、別に海にわ數萬艘の船を浮べて海戰の用意までしたのです。所が頼朝わ敵の様子を探り、弟の範頼と義經とを遣して一の谷を攻めさせたので、範頼わ五萬騎を以て生田森の東門に向い、義經わ家來に西門を攻めさせ、自分でわ三千騎を率いて夜の間に鵯越の崖を下り、直に敵陣に突込んで、内外一時に攻め立てましたので、平氏の驚き様わ大抵でなく、忠度經正敦盛等わ戰死し、重衡わ擒となり、狼狽た將士わ、先を爭つて船に乘り、船が覆つて溺れた者も少くありませんでしたが、やつとの事で讃岐の屋島まで落ち延びたのであります。

扇の的



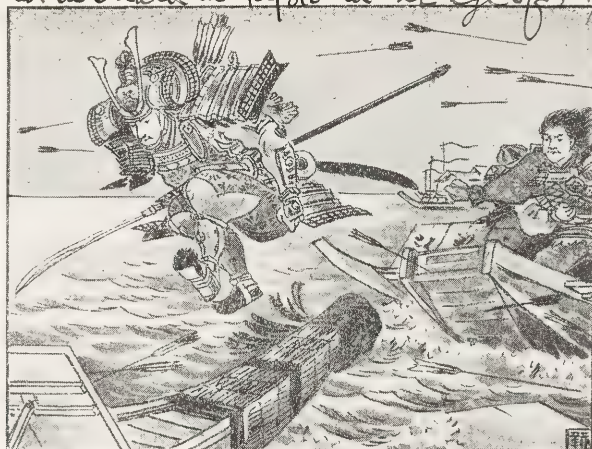
紀元千八百四十五年

A.D. 1185

屋島の戰　わ一の谷に續いて間もなく初りました。さて平氏わこゝに行宮を新築して源氏の軍を防ごうとしたのですが、勇敢無双の義經わ、壽永四年の春二月、屋島の敵陣を燒拂い、平氏の大將宗盛わ、又もや天皇を奉じて、遠く長門國えと奔りました。丁度此の戰の末だ勝敗の定まらぬ時、日わ西海に沈もうとして、忽ち平氏の軍中から、一艘の船に一人の女官を乘せ、長い竿の先に扇をつけ、源氏に向つて之を射落して見よと挑みましたので、大將義經わ、那須與一宗高に命じて、アレ射落せと下知したのです。で宗高わ馬を海中に乘り進め、八幡大神を念じつゝ、弓を滿月の如く引き絞つて、兵と放つた一本の矢わ、見事扇を射落して、首尾よく重い役目を果しましたので、敵も味方も聲を揃えて、喝采の響わ海をも動かしたので有ります。

Ya shima no tatakai

"Nii no ama", the grandmother of Antoku, a wife of Kiyomori;
Kenreimon-in = Nii no ama = Taira no Tokiko
She died in Ohara in Kyoto in her age of 57.



平氏壇浦に滅ぶ

紀元千八百四十五年

A.D. 1185

壇浦の合戰 わ源平最後の大激戰でありました。茲に屋島に敗れた平氏わ、九州に落延びましたが、之より先範頼わ、早くも九州を打從え、野も山も白旗ですから、平氏わ陸え上られず、餘義なく長門の壇浦に船を休めて居りますと、義經わ七百艘の軍艦を率いて攻め來り、壽永四年三月、敗餘の平氏と決死の大激戰をしたのです。即ち其結果平軍わ見事に敗北し、二位尼わ安德天皇を抱いて海に投じ、建禮門院宗盛時忠等わ擒にせられ、新中納言知盛をはじめ、一門の猛將勇士わ、殘らず此の戰に斃れてしまいました。吁榮華の夢も只一時で、さしも盛大を極めた平家の一族も、春未だ寒い海の水を、赤く染めて空しく滅びました。扨宗盛わ一度鎌倉に送られましたが、やがて近江の篠原に斬られ、天下の政權わ賴朝の手に歸したのです。

dan no ura no kassen

x Kamakura Bakufu



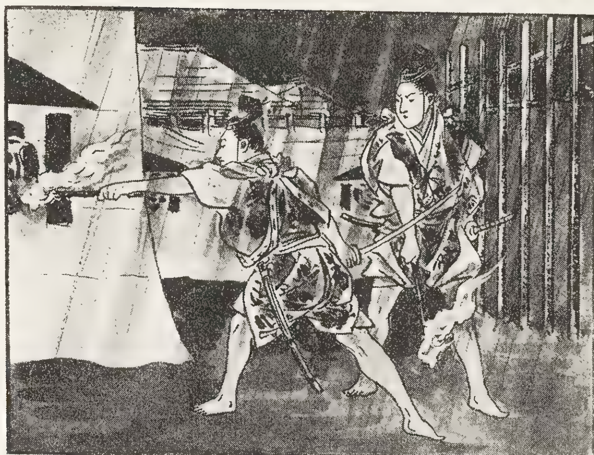
鎌倉に幕府を開く

紀元千八百五十年

鎌倉幕府

鎌倉幕府わ頼朝の開いた政府です、平氏の盛な時代にわ、日本の半を我物とし、一族わ悉く高位高官に上りましたが、壇浦の一戰に殘らず滅びましたので、頼朝わ此の點に注意して、先づ根據を定めてから、次第に天下を收めようと思い、富士川の勝戰の時にも、將士の功賞を先にして新恩を知らせたのです。一體鎌倉わ義朝の邸宅の在つた所で、こゝを根據としましたのわ、深い由緣のある事でしよう、斯樣にして東國の平ぐと共に、侍所、公文所、問注所などの役所を新設して、幕府の設備もだん／＼整いましたから、更に之を改良して完全なものとし、政權を一手に收め、其基礎わ容易に動かぬものとなり、又京都をはじめ、重なる土地にわ、夫れ／＼幕府の出張所を置き、日本國中無事太平に、よく治まつたので有ります。

裾野の雨



紀元千八百五十三年

曾我兄弟が首尾よく父の仇を討つて、名を千歳に殘したのわ、建久四年源頼朝が、富士野の獵の一夜の事で、こゝに曾我十郎祐成、同五郎時致の兄弟わ、父河津祐泰の仇、工藤祐經の首を斬る爲め、十餘年の艱難をしましたが、今度の獵に祐經も交つて居ると知り、降る五月雨の暗を衝いて、工藤の陣え打入りました。其時二人の兄弟わ、母の餞別の小袖を絞り上げ、祐經の枕を蹴つて我名を云い、只一刀に首掻き斬り、思わず雀躍して喜びますと、營中一時に騒ぎ起ち、兄わ仁田忠常に殺され、弟わ五郎丸に捕つて、頼朝の陣所に引立てられました。頼朝わ時致の勇氣を愛して、特別に其命を助けようとしましたが、祐經の子犬房丸の願に動かされて、とう〳〵之を斬らせました。時に兄十郎わ二十二歳、弟の五郎わ二十歳の青年でした。

x Minamoto Sanetomo



實朝鶴ヶ岡に弑せらる

紀元千八百七十九年

A.D. 1219

×源實朝 わ承久元年正月右大臣になりましたから、後鳥羽上皇から衣服を賜り、其拜賀の禮を鶴岡八幡で行いました。重なる家來わ殘らず之に從いましたが、實朝わ神社の樓門で悉く人々を退け、只文章博士源仲章わ劒を持て從い、禮終つて石段を下る時、頼家の遺子公曉が、突然暗の中から躍り出て其首を斬り、父の仇を取つたと叫び、暗に其姿を匿したのです。實朝わ頼家の弟で、建仁三年九月頼家の廢せらると共に、政子わ父時政と相談して將軍に立てたのです、けれども北條氏わ何とかして實朝を殺そうと企み、實朝も又北條氏の振舞を不快とし、内心でわ既に覺悟を定め、拜賀の當日にも、一筋の髮を拔いて家來の公氏に、紀念にせよと云つて渡し、庭の梅を見てわ『出ていなば主なき宿となりぬとも、軒場の梅よ春を忘るな』とよみました。

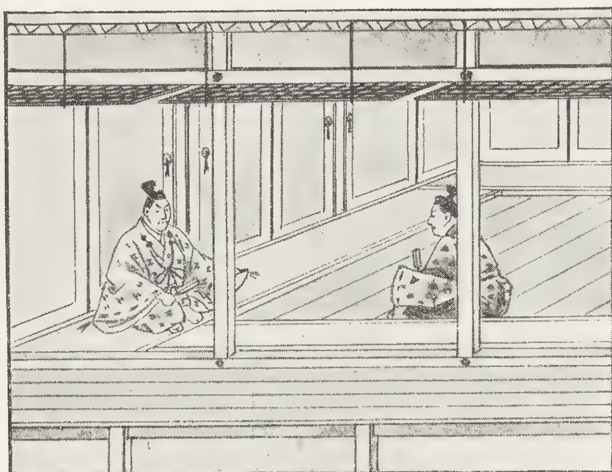


三上皇關東を征討す

紀元千八百八十一年

承久の亂　わ後鳥羽上皇が、執權北條義時の專恣を憎ませられ、順德帝に御相談の上、承久三年一千七百餘人の兵を集め、朝臣の諫を用いず、いざ義時を討うとなさると、義時わ十九萬の大軍を進めて、京都を犯したと云う戰です。所が上皇の軍わ、忽ち義時に破られて、散散な目に遇い、後鳥羽、土御門、順德の三上皇わ、悉く遠國に流され給い、公卿の重なる人わ、殘らず殺されてしまいました。で此の時から、北條氏の權力わ、一層强さを加え、陪臣の身分でありながら、皇位繼承の事に迄口を出し、とう〳〵其意見に依つて、新に御即位遊ばされたのが後堀河天皇です。さて又此の亂の後わ、泰時と時房とが、南北に別れて、京都の守護となり、兩六波羅の探題わ斯くして設けられ、北條氏わ源氏に代つて天下を治めたのであります。

x Hojoshi no shukken


泰時執權となる

紀元千八百八十四年

1224

北條氏の執權

執權わ朝廷に於ける攝政關白の如くに、甚だ權勢のある役目で、初め賴朝が兵を起す時、北條時政わ其參謀として權力を握り、治承四年以來執權となり、元久二年義時が其後を繼ぎ、和田義盛の敗死して後わ、文武の二權悉く義時の手に收まり、元弘元年高時の滅亡迄續きました。さて北條氏が源氏の後を受けて、天下を我手に收めた譯わ、賴朝が死んでから其子賴家將軍となり、母の政子わ政を見、北條時政わ母方の親類として權力を振い、子の義時と相談して、種々の惡企みを起し、とう／＼源氏の天下を奪いましたが、其惡策の中でも賴家を除き、比企能員、畠山重忠、和田義盛の如き、源氏の功臣を片ッ端から殺し、一ばん最後に將軍實朝を殺させた事などわ、最も著しいので、其行方わ如何にも巧なものでした。

1220
1332



鎌倉武士の風俗

北條時代

鎌倉武士　頼朝が幕府を鎌倉に開く時、平氏の將卒が柔弱で、早く滅びた事を思い、義氣ある武士を自分の配下に集めたばかりか、更に此の氣風を養う手段として、笠懸、犬追物などゝ云う、勇しい遊戯を習わせ、禮義を尊び粗忽を戒め、卑怯未練の振舞をば、武士の大恥辱として、此の方面の教育わ出來る丈注意させました。で當時の武士わ、命を君に捧ぐるのを、一生の務めと心得、日本無双の勇士、日本第一の弓取などゝ、自分の武勇を褒められる時わ、百萬石の領地を受けたよりも、一層愉快に感じたのです。殊に又一方にわ儉約の美風を勵まし、朝廷を崇め神佛を敬い、更に北條時代にわ、禪學を勵みて武士の精神修養の資けとしました、かくて我國の武士道わ、こゝに堅固に築き立てられて、世界萬國に誇るべき物となつたのです。

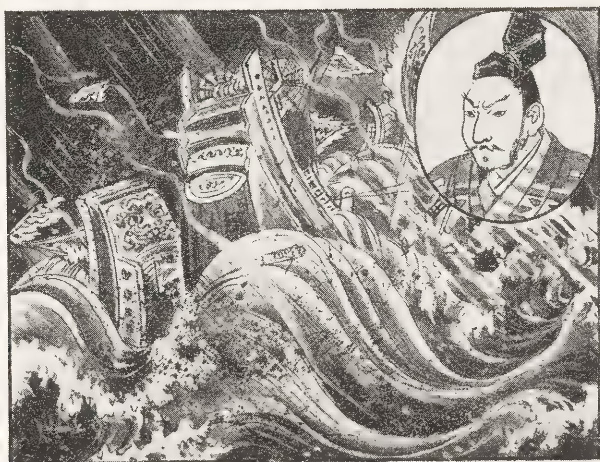


鎌倉五山の一建長寺

紀元千九百年前後

鎌倉の佛教　鎌倉時代わ佛教の盛な時で、新に出來た宗派も少くないのです。中にも禪宗わ後鳥羽天皇の建久二年に、榮西が宋から歸つて臨濟派を傳え、弟子の道元わ曹洞派を立て、共に朝廷や武家の信仰も厚く、建長圓覺壽福淨智淨妙の五大寺さえ出來ました。此の五つの寺わ、鎌倉五山と呼んで、當時名高い寺でありました、又法然上人わ淨土宗を開き、其弟子の親鸞聖人わ、淨土眞宗を起して下民の歸依する者多く、日蓮上人わ法華宗を創めて武士を敎化しました。其他一遍上人の時宗、役小角の末を受けて野山を跋跡する修驗道など、種々の流派が一時に起つて花を咲かせました。殊に其頃わ戰爭が打續いて、文學の如きも全く五山の僧徒の手に委せられ、從つて當時出來た書物にわ、佛教に關係したものが多いのであります。

91 × Kōan no eki



時宗元寇を滅す

紀元千九百四十一年

1281

×**弘安の役**　わ起りました。元の英雄忽必烈わ、使を以て我國え交際を申込みましたが、鎌倉の執權時宗わ、使を斬つて開戰の用意をしたのです。すると案の定忽必烈わ、三千五百の軍艦に、十萬の兵を乘せ、堂々として攻めて來ました。で龜山天皇わ深く之を御心配遊ばされ、身を以て國の難に代るとの願文を伊勢大廟えお捧げになつた程です、所が敵わ壹岐對馬を奪つて老幼婦女を殺し、更に筑前に迫りましたので、鎮西探題實時わ、兵を指揮して防戰する折から、七月の晦夜に西北の風が吹き起り、敵艦悉く沈沒して大半溺死し、鷹島に上陸した敗殘の敵わ、我勇士の手に屠り盡し、生きて還つた者わ只三人、爲めに流石の忽必烈も、再び攻めてわ來ませんでした。吁神の守れる我國わ、一指だも外敵にわ染めさせなかつたので御座います。

弘安四年 1281



紀元ヲ九百九十一年

南北朝でわ足利尊氏に依つて分立しました。扨尊氏わ光嚴院の弟豐仁親王を立て、光明帝とし、延元元年に後醍醐天皇が都えお還り遊ばすと、直義わ途に迎えて天皇を花山院に幽閉し、光明帝わ天皇に神器の受渡を申出られたのです。で後醍醐天皇わ兼て用意の新造の神器を與え、夜になつてから眞の神器を持て宮を出でさせられ、やつと吉野山に入つて玆に行宮を建て、之を南朝と呼んで專ら恢復をお計りになり、一方光明帝わ京都に在て北朝と呼び、南朝を滅すのを目的となされたのです。吁建武中興の新政も、僅に二年の夢となり、今わ皇統南と北に分立すると云う、不思議な世となりました。そして此の時から後小松天皇の時代に、南北合一する迄、凡そ五十七年の間をば、世にこれを南北朝時代と、呼んだので御座います。

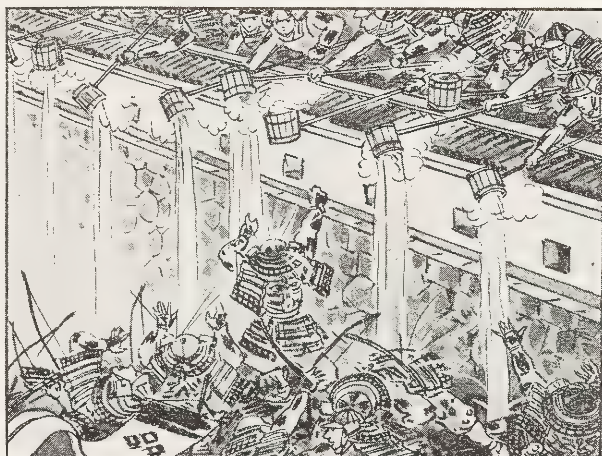


後醍醐帝笠置を出ず

紀元千九百九十一年

後醍醐天皇　わ北條高時の亂暴を惡ませ給い、元弘元年事を擧げ樣となされましたが。早くも高時の知る所となり、天皇わ笠置山え落ちさせられました、けれども此所も又やがて賊軍が陷れたので、獨り藤原藤房を供に召され『さして行く笠置の山を出でしより、天が下にわ隱れ家もなし』との御歌を詠み出されました。で藤房わ泣きながら『如何にせん賴む蔭とて立よれば、猶袖ぬらす松の下露』と、かくて天皇わ遠い隱岐國えお遷されなさいました。此の時尊雲法親王わ名を護良と改め、吉野に兵を擧げさせられ、勤王の士爭つて王の旗下に集り、中にも楠正成わ、金剛山に城を築き、寡兵を以て大軍を防ぎましたが、流石の高時も之を拔くに苦しみ、已にして新田義貞の爲めに、其本城たる鎌倉を衝かれて、一門殘らず滅びてしまいました。

正成の智謀



紀元千九百九十三年

赤阪城の奇計

正成の赤阪城わ急造の脆いものですから、北條高時の大軍わはじめから油斷して掛りましたが、智略に長じた正成わ、僅かの兵を指揮して、目に餘る大敵を、散々に打退け、而も夫れが二度も重なつたので、流石の賊軍も之に懲り、三度目にわ城の眞下迄進み行き、石垣を這いながら城内え攻め入ろうとしますと、豫て用意のして有ることゝて、正成わ家來に命じて、長柄の柄杓に、グラ〳〵と沸き返る熱湯を汲ませ、群る賊軍の頭の上え、ザア〳〵と注ぎかけましたので、何で堪りましよう、其熱湯が冑の間から浸み込んで、來るのも〳〵顔や手足を燒き爛らせて、バタリ〳〵と斃れ死し、此の樣にして三度迄も、追い退けられてしまいましたから、流石の敵軍も最早や此の上わ、攻め寄せる勇氣も挫けたので有ります。



船上山の忠臣

紀元千九百九十三年

名和長年　元弘三年後醍醐天皇わ、隱岐を出て伯耆に幸せられ、名和の地頭長高の邸に入らせられたのです、で長高わ家人を率いて帝を迎え、船上山で旗上げをしますと、近國の將士が數萬人集つて來ましたので、帝わ長高に長年と云う名を賜つたのです。京都の戰が平定して御還幸の後わ、長年わ正成等と都を守り、延元元年足利尊氏の叛いた時わ、之を瀨田に邀えて戰いましたが、帝の延暦寺え幸せられたと聞いて、急いで歸ろうとしますと、賊が路を遮つて容易に通しません、けれども忠臣長年わ、十七度迄賊軍と斬り合い、尊氏を九州え走らせましたが、其再び攻め込んで來た時、路傍の人が『三木一草一木僅に存す』と、長年の勳を褒めました、所が長年わ自分の死後れたのを嘲るのだと覺り、やがて見事に戰死したのです。



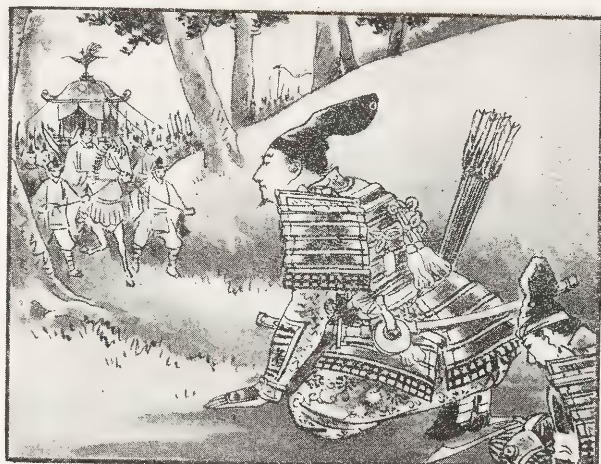
直義親王を弑す

紀元千九百九十五年

1335

Mori naga shin no

護良親王わ後醍醐帝の第三王子で、延暦寺の座主として大塔にいらつしやいました。常に北條足利の振舞を憎み、還俗して旗上げなされてからわ、奈良の般若寺に、十津川に吉野山に、一方ならず苦しみを重ねられ、而も事志と違い、鎌倉に從され、直義の爲めに二階堂谷の土牢に押込められ、心わ如何に逸るとも、どうする事も出來ません。已にして北條時行が、鎌倉を攻めましたので、直義わ敗走するに臨み、淵邊義博に命じて、親王を土牢の中に刺させました。義博わ先づ親王の膝を斬て之を倒し、更に咽を刺そうとしますと、親王わ首を縮めて刀を嚙み碎かれました、で二刀を拔いてやつと首を落しましたが、猶も目を瞋らして居らつしやるので、とうとう路傍に棄てゝしまいました、時に年廿八、吁喬木わ風に折れたのです。



正成車駕を迎う

紀元千九百九十五年

1335

建武中興　北條高時が誅せられたので、後醍醐帝わ船上山を出て、京都えお還りになり、正成わ兵庫迄出迎えました。で其翌年年號を建武と改め、新政をお布きなされましたが、其重な事わ、諸將の勳功を調べ、天皇親ら政を見、公卿を國司に、武士を守護に任じ、貨幣を鑄り、皇居を新築するなど、全く朝廷の面目が變りましたが、夫れも僅かに三年とわ續かないで破れてしまつたのです。尤も之にわ色々な譯が御座いますが、第一の失策わ諸將の勳功調査が不公平で、正成の樣によく働いた人が、却つて尊氏の下になつた事や、第二に北條氏わ滅びましたもの丶、天下の不平黨が折を見て居た事で、殊に尊氏わ拔け目なく立働いて此の不平黨を味方に付け、天下を我物にしようとしたのですもの、どうして之が長く續きましよう。



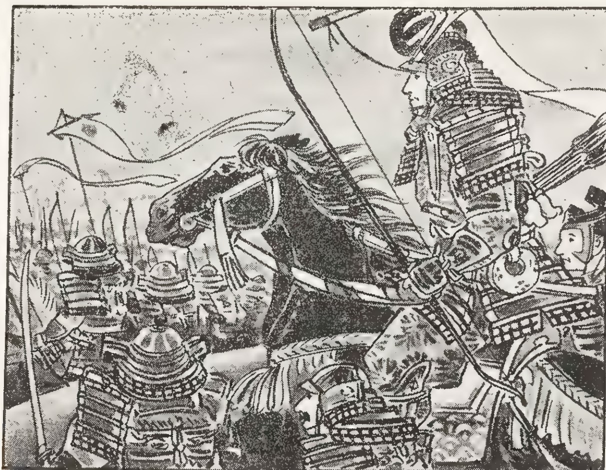
櫻井驛遺訓

紀元千九百九十六年

1336

楠正成　後醍醐天皇の御夢に召されて、金剛山に菊水の旗を飜し、吉野に千劍破に赤坂に奇計を用い、身も命も忘れて首尾よく逆賊を滅し、天皇を都えお迎え申しましたが、夫れも束の間で、やがて又足利尊氏わ、天皇に反いて兵を起したのです。で正成わ之を宇治に迎え、計を以て京都に導き入れ、尊氏直義の軍を包圍して見事九州迄奔らせましたが、尊氏わ間もなく再び京都え攻め寄せました。此の時正成わ計を進めましたが、朝廷でお用いなされませんので、今わ之迄と覺悟を定め、長男の正行にわ櫻井驛で遺言して、菊水の刀を授け、自分わ湊川で直義の大軍と戰い、部下の將士も殘らず討たれ、身に十一創を受け、七生報國を盟つて潔く自殺しました、時に年四十六、後湊川神社に祀られ、維新の後別格官幣社に列したのです。

Kusu no ki masa shige



尊氏京師を犯す

紀元千九百九十六年

足利尊氏 わ初め高氏と云い、源義家の末孫であります。元弘元年後醍醐天皇が兵を起しなされた時、赤阪城に正成を攻めましたが、やがて天皇の味方となり、高時を滅した功で正三位參議に任じたのです、平生護良親王を惡み、又新田義貞とも仲惡く、勅許を受けて之を討とうとしますと、義貞も又尊氏の惡事を上書しましたから、天皇わ義貞に仰せて、尊氏をお討たせになりました。所が不幸にも官軍わ尊氏の爲めに散々破られ、一時わ危く見えました、すると正成等の計で、尊氏わ敗れて九州に奔り、こゝから軍艦七千艘に二十萬の大軍を率いて押し寄せ、官軍を湊川に破り、其勢に乘つて京都に攻め入り、光明院を立て征夷大將軍となりましたが、南朝の勢力が衰うるにつれて、日本全國わ殆ど尊氏の物となつたのです。



七生報國

紀元千九百九十六年

湊川の戰　延元元年五月に足利尊氏わ、二十萬の大軍を以て九州から攻め上りました。正成わ七百人の家來を率いて湊川の西に陣を構え、義貞と連絡して專ら陸軍に當り、敵將直義わ正成の軍を突き、忽ち破れて須磨方面に走りましたので、尊氏わ六千の新兵を送つて之を助け、正成わ再び其兵と戰つて奮鬪十六回に及び、次第に其兵を失つて餘す所僅に十三騎、夫れも多くわ重傷の者ばかりで、最早どうすることも出來ないのです。こゝで一族十三人、家來六十餘人、湊川の北の百姓家に入つて潔よく自殺しました。時わ五月二十九日の事、茲に於て尊氏わ直義と力を合せて義貞を破り、忽ち京都え攻め込みましたので、後醍醐天皇わ叡山に遁れ、尊氏わ兵馬の權力を握り、室町幕府の基礎わ、こゝに立派に築き上げられたのです。



金崎城陥る

紀元千九百九十七年

1337

Kanagasaki Rakujo
（敦賀町にあり）

金崎落城　延元元年足利尊氏わ、後醍醐天皇を京都に迎え奉り、天皇わ新田義貞に北國の事をお任せになりましたから、義貞わ皇太子恒良親王を連れて越前敦賀に行き、氣比氏治に迎えられて金崎城に入りますと、間もなく賊わ大兵を以て來り攻め、一方天皇わ尊氏の計略に陥つて花山院に幽閉られ、夜に乘じて吉野に遁れ、亘理忠景を越前に遣して回復の勅を義貞にお下しになつたのです。其翌年の春脇屋義助わ義貞を援けに行きましたが、途中で敗れ、金崎城わ非常に苦しい場合となり、雪消えて道の通ずると共に、賊わ一時に攻め寄せ、義貞わ命から〲杣山城に幽れ、皇太子わ虜となり、義貞の子義顯をはじめ、重なる勇士の面々わ、城を枕に討死をしました。そして義貞もまた程なく藤島で、花々しく戰死してしまいました。



室町に幕府を開く

紀元千九百九十八年

1338

Muro machi Bakufu

室町幕府　建武中興の政の未だ整わない内に、早くも尊氏わ謀反を起して之を倒し、延元三年を以て、京都室町に幕府を開きました。けれども足利氏が天下を取つたのわ、全く親類や家來の力ですから、幕府を開くに際しても、思う様に嚴しい事が出來ません。尤も尊氏わ考えも大きく、策略も機敏て、後に義滿の時代に定められた規則も、實わ尊氏の初めて置いた事が整つた迄です。室町幕府わ、はじめ二條高倉に在りましたが、永和四年義滿の代に、室町に新館を建て、四足門を造つて皇居に擬え、四季の草花を植え並べて花御所と呼び、又室町殿とも云い、天子樣の行幸遊ばされた事もあります。さて夫れより七十餘年の後、義政の代に於て、此の見事な花御所も、全く毀されましたが、其趾わ今の上京御所八幡の邊だと申します。

小楠公の最後

紀元二千八年 1348



四條畷　神社わ楠正行を祀る所、正行わ正成の長男で、父の遺訓を奉じて、家來三千人を率い、高師直師泰等の將たる、尊氏の軍六萬を、四條畷に邀えて大いに之を破り、首尾よく敵陣に攻入ると、上山高元が師直だと云つて戰死しましたから、正行わ一時氣を安めたのです。が其僞なのを覺り、再び戰を交えて接戰三十余回、部下の兵士わ悉く戰死しましたので、今わ之迄と弟正時と交刺て死にました、時に年僅に二十三歳。之より先正行わ既に戰死を覺悟して、吉野の行宮に天顏を拜し、如意輪堂の壁に矢尻を以て『歸らじと、かねて思えば梓弓、なき數に入る名をぞ止むる』と、一首の辭世を記しました。吁父子共に王事に忠勤して命を捧げ、千歳の後迄も人々に崇められ、父わ湊川に子わ四條畷に、共に神と祀られました。

Shi jo nawate



日本武士海外に威を振う

紀元二千九年

倭寇 とわ何の事でしよう。平安朝の政が衰えて、仁明文徳の御代にわ、海にも陸にも盗賊が横行し、清和帝の時代にわ、盛に貢物を奪うと云う有様でしたが、北條氏が天下を治むると共に、之等の盗賊共わ、遂に外國え手を延ばし、先づ朝鮮の海邊を襲い。更に明國に向つて、百餘艘の軍艦で乘り廻し、順天府を衝いて敵首を斬り、家を燒き財物を奪うなど、なか〳〵勢が猖獗かつたのです。所が明の海防が固くなり、國內でわ織田豐臣氏が天下を治めて、よく命令が行われましたので、さしも不逞の海賊共も其勢いを挫かれ、其代り今度わ南に手を延ばして、呂宋暹羅邊に行き、專ら貿易を事とし、最早や先の樣に暴行をしませんでした、こゝに倭寇とわ、即ち朝鮮人や明國人が、日本の海賊を怖がつて付けた名なのであります。

義滿新第を營む



紀元二千三十八年

1378

金閣寺　足利三代將軍の義滿わ、將軍職を退いてから、京都北山に金閣寺を建てゝ、其所に住みましたが、金閣の庭わ廣くて美しく、鏡湖と呼ぶ池や、龍門瀧、九山八海、銀河泉、衣笠山などゝ云う名所もあり、又其樓閣わ三層で、下を法水觀、中を潮音閣、上を究竟頂と名付けて、何れも立派な飾りをしたものです。一體義滿わ義詮の子で、足利家にとつてわ大切な人であります、殊に將軍の職に就いた初めにわ、南北朝の合一を取計らい、官職を定めて幕府の基を固くし、一方外交の事にも注意しましたが、明國と交際して明の王から日本國王だと云われて、大きに嬉しがりました。此の事わ後世國體を恥かしめるものだとの批難を受け、又晩年にわ驕りを極めて、室町の第を花御所と呼んだ位で、政事上にわあまり功が無かつたのです。



義満高麗の贈物を受く

紀元二千五十二年

1392

足利義満　わ幼名を春王と云い、正平二十三年征夷大將軍となり、應永元年大政大臣に任じて、世間でわ公方と呼びました。翌年職を辭して髪を削り、天山道義と改めたのです、曾て僧の祖阿、商人肥富等を明に遣して交際を求め、明國王も又三度迄僧を送つて交易を請い、之より兩國の使わ絶えず往來しました。或時明國王わ、璽と服とを義満に贈り、朕汝を封じて日本國王となすと云つて來ましたら、義満わ明王を尊んで皇帝陛下と呼んだのです。足利尊氏わ天下を取つてから、頻りに諸將を厚遇しましたので、次第に驕恣を極め、どうかすると謀反を企てぬとも限りませんでしたが、義満の將軍となると共に、賞罰共に嚴しく、諸將蟄伏して政わよく行われました、けれども晩年外國に媚び、驕を極めたのわ、惜むべき事であります。

Ashi kaga Yoshi mitsu



持氏自殺す

紀元二千八十八年

1428

足利持氏　わ應永十六年管領となり、後兵を起して上杉氏憲等を殺し、將軍義持と父子の約束をしましたが、やがて將軍の薨去と共に、持氏わ其後を望み、却つて義敎に取られましたので、今度わ上杉憲實を憎んで兵を擧げました。持氏わ其子の元服の禮を、鶴岡で營みましたが、儀式が將軍と同じなので、憲實わ心を盡して諫めたのですが、少しも用ゐられず、其爲め元服の當日わ席に列りませんでした、すると持氏わ、又もや兵を發して討とうとしましたから、憲實わ其事を將軍に告げ、將軍わ早速持氏を追討させました。時に諸將わ皆持氏に叛いて、一人も助ける者なく、流石の持氏も髮を削つて援を請いましたが、將軍義敎わ之を許しません、で憲實わ持氏を永安寺に圍みましたから、進退谷り、とう／＼火を放つて自殺したのです。

Ashi Kaga mochi uji



滿祐將軍義敎を弑す

紀元二千百一年

1441

嘉吉の變

足利六代將軍義敎わ、常に强臣を滅そうと思い、永享十一年赤松滿祐の弟義雅の領地を奪つて、之を他人に與え、やがて滿祐の身も危いとの噂が立ちました。で滿祐わ豫て將軍を怨んで居ますので、遂に決心して將軍を殺そうと、一族群臣を集めたのです。嘉吉元年の六月、戰勝祝賀會を名として、將軍を自分の邸え招待しました。酒酣に猿樂の舞のはじまつた頃を見て、滿祐わ家來に命じて馬を放たせ、其逸走を防ぐ爲に四方の門を閉したのです。折から聞ゆる只事ならぬ物音に、將軍わ何事が起つたかと、座を立とうとすると、俄に伏兵が現われて、其首を斬り、從臣をも悉く死傷させました。さて滿祐わ義敎の首を提げて、弟と共に其家を燒き、丹波路から播磨をさして落延びたのですが、之を追う者わ一人も無かつたのです。


京都焦土となる

紀元二千百二十七年

應仁の亂　畠山細川山名三氏の權力爭いわ、此の亂の因となりました。けれども又一方に足利義政の夫人が、我儘の振舞をして政を亂した事も重なる原因です。一體足利氏の方針わ、家來を重く用い、其爲め家來の勢いが主人を凌ぐと云う倒事が少くなかつたので、之等も又應仁の亂の原因の一となりました。かく込入つた譯が御座いましたから、諸國の兵士わ悉く京都に集り、戰爭わ何時迄も止まず、重なる邸宅や神社佛寺わ、大半燒き盡され、壯大な建築物、貴重な美術工藝品をはじめ、朝廷の記錄なども燒かれ、其結果朝廷わ甚だしく衰微して、儀式を擧ぐる費用にも事缺き、公卿わ四方に流浪の身となり、一方幕府の財政も、大いに亂れて、さしも花やかであつた室町幕府も、此の一戰で全く其勢いを挫かれてしまいました。



義政東山に新第を造る

紀元二千百三十九年

1479

東山時代　將軍足利義政わ、其夫人の我儘なのと、細川山名等の權力爭いの爲めに、不平を懷いて政治に遠ざかり、專ら驕りを極めましたから、上下共此の風を見倣つて、こゝに東山時代となつたのです。文明十一年義政わ、室町邸の新築に着手して全國に重税を課し、又東山別莊の費用を、山城一國に負わして、庭石や樹木等わ京都の社寺公卿の邸に徵發し、落成の後之を東山殿と呼びました、即ち今の銀閣寺が夫れであります、此の樣に冗費多く、度々の重税の爲めに、人民の困苦其極に達し、方々に百姓一揆が起り、盜賊が橫行し、餓死加茂川の流を止むる有樣となりましたので、義政わ明國から通貨を送らせましたが、應仁の亂に幕府の實力のない事が解り、そのため世の有樣わ一變して、群雄割據の時代となつたのであります。

Higashi yama jidai

韮山は伊豆の田方郡にあり、



早雲小田原を略す

紀元二千百八十五年

1495

北條早雲わ舊姓伊勢氏、新九郎長氏と呼びました。足利氏の末に群雄競い起り、戰爭が方々で始りましたので、英雄の志ある長氏わ、先づ豪傑の士と結び、駿河に行て今川義忠に依り、義忠の死後わ幼主を援け、後私に伊豆を窺つて居りました。時に足利政知愚昧にして、人心服せず、其死後國內の亂るゝに乘じて、長氏わ手早く伊豆を取り、韮山に築き北條氏を娶つて姓を改め、髮を削つて名を早雲と呼んだのです。此の時上杉定正と顯定と仲惡く、早雲わ定正を援けて顯定を攻め、又箱根の遊獵に託して小田原を奪い、兩上杉氏の威勢衰うると共に、早雲の威氣頗る盛になり、三浦父子を殺して相摸全國を得、八十八歲を以て韮山に歿しましたが、其子の氏綱わ、よく父の遺命を守り、遂に關東をも併呑したのであります。



紫宸殿の荒廢

凡紀元二千百六十年前後

皇室の衰微　應仁の亂後わ皇室が衰微して朝廷の儀式わ何一つとして行われず、御土御門天皇の時代にわ、讓位の式の擧らぬ事三十六年に及び、又天皇御崩御の節も、御葬送の費用なく、聞くだにお傷わしい限でありました。次で後柏原天皇御即位の時にわ、本願寺の僧實如の献金に依て行わせられ、次の御奈良帝わ大内義隆の献金により、正親町天皇わ毛利元就の献資で、漸く御即位になりました。こう云う有樣ですから、三條の橋の上から内侍所の燈火が見えたり、紫宸殿の橘の下でわ市人が茶店を張り、或わ謝儀を收めて御宸筆を下されるなど、皇室の式微わ其極度に達しましたが、幸にもやがて織田信長の勤王に依つて、初めて元の如くになりました。吁足利氏の末の有樣わ、耳にするさえ涙がこぼれるでわ有りませんか。



天下の珍器傳わる

紀元二千二百三年

鐵砲の傳來　天文十二年八月二十五日、葡萄芽人ピント等が、はじめて種子島え來て碇泊した時、領主時堯わ之に面接し、ピント等の所持する鐵砲を見て、天下の珍器と思い、直に就て其術を學びました。ピントわ的を置いて試みに數發を放て見せましたが、放つ度に必ず的に命中しますので、時堯わ大いに喜び、遂に莫大の金を投じて二挺の鐵砲を買い受け、一家の珍寶とし、別に家來に命じてピントから火藥の調合法を受けさせたのです。さて時堯が、かゝる天下の珍器を手に入れたのを聞き知つて、千里の道を遠しとせず、わざ〳〵見に來た武士も少くなかつたのです。後時堯わ功を以て從五位下に叙し、左近衛將監となりましたが、一度鐵砲の傳來すると共に、戰爭の上にも一大改革を來し、鎧の造り方までも一變したのです。



信長の改心

紀元二千二百六年

1546

Oda Nobunaga

織田信長　わ尾張の人、幼名吉法師、備後守信秀の二男です。天文十五年元服して名を改め、性武斷にして些細の事に氣を止めず、頗る大きな志を懷いて居りました、父信秀の死んだ時、信長わ弟と共に葬儀に列りましたが、突然起つて香を位牌に擲つなど、狂人じみた行をなし、少しも國政を見ませんので、家來の平手政秀が之を心配して、折々意見を加えましても、一向聞入れませんから、遂に五事の諫言を遺して自殺しました。流石の信長も之にわ吃驚して、責を引いて暫く外え出ず、政秀の爲めに一寺を建てゝ佛事を營み、夫れより私に志を立てゝ天下を統一し樣と思い、其桶狹間に今川氏を破つてより、勇名四隣に轟き渡り、殆ど全國を擧げて其手の中に入ろうとしましたが、惜い哉中途で逆徒の手にかゝつてしまいました。

嚴島の役



紀元二千二百十五年

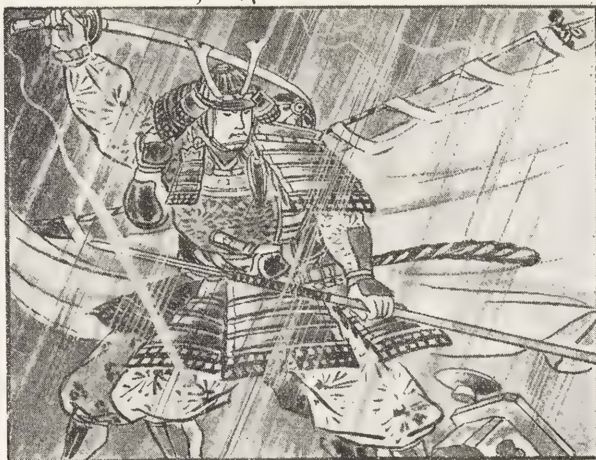
1555

毛利元就　天文廿年九月陶晴賢わ、其主大内義隆を殺しました、因て元就わ復讐を名として晴賢を討うとしましたが、尋常の手段でわ勝たれぬと知り、敵を嶮岨の地に誘い、一戰に鏖にしようと、嚴島に城き、策を以て晴賢を招きました。すると晴賢わ二萬の兵を率いて來ましたので、元就の軍わ晦日の夜陰に乘じて晴賢の本陣を襲い、見事に之を撃破り、之より威名大いに揚り、次で防長藝の三國を取つたのです。かくて正親町天皇の御即位の時、皇室衰微して禮を擧ぐる事も出來ません、元來勤王の志厚い元就わ、此の際米千石を献じて之を助けましたので、永祿三年正月漸く即位の大典を擧げさせられました、天皇嘉賞まし〳〵、勅して大膳大夫に任じ菊桐の記號を賜りました。そして此の英雄わ元龜二年七十五歳で世を去つたのです。

Mōri moto nari

1551

清洲は今の清須、尾張にあり。



紀元二千二百二十年

1560

桶狹間の戰　正親町天皇の永祿三年五月、今川義元わ駿河三河遠江を併せて勢い盛に、遂に信長の領分に迄手を延そうとしましたので、信長わ家來を清洲城に集めて、戰の相談をしました。何しろ敵わ四萬の兵を有し、味方の僅に三千に足らぬので、只でわ迚も勝たれる見込がありません。そこで信長わ一同に向つて、名をあげ家を興すわ此の一戰にある、各人努力せよ！と、直に敵陣を衝きました。打から雨風激しい眞夜中で、義元わ油斷して居りましたが、急に起る吶喊の響に、將士狼狽してなす所を知ず、信長の軍わこゝを先途と奮戰して敵首二千五百を獲、主將義元はじめ殆ど全滅しました。さて信長わ清洲に凱旋して戰功の將士を賞を與え、織田氏の威名わ一時に天下に現れ、之に反して義元の勢力わ衰微してしまいました。

Oke ha za ma no tatakai

1560



紀元二千二百二十一年

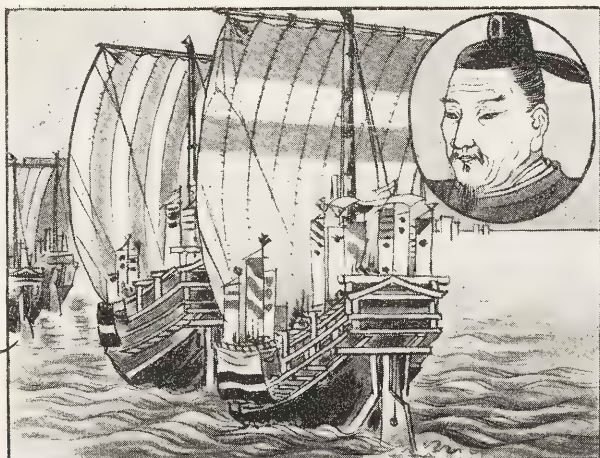
川中島の戰　信濃葛尾山の城主村上義清わ、武田信玄に逐われて、上杉謙信に身を寄せました。そこで謙信わ弘治元年義清と一所に、川中島で信玄の軍と戰いましたが、今川義元が間に立つて和を媾じました。所が永祿四年十月に、上杉武田の兩雄わ、又もや再び川中島で戰い、兩軍共夥しい死傷を出しました。殊に此の際信玄の旗色わ、甚だ振いませんで、弟の信繁も戰死し、大將の身も一時わ餘程危かつたのです、で斯くと見て取つた小山田彌三郎わ、横合から急に打ち入つて、やつと信玄の危急を救いました、一體義清わ、信濃の舊族でありますが、天文二十二年越後に奔り、謙信に自分の領地の回復を依頼しましたので、とう〳〵此の大合戰が起つたのです、吁筑摩の水わ昔ながらに流れて居ます、川原の砂わ昔のまゝに白いのです。



光秀の謀反

紀元二千二百四十二年

本能寺の變　織田信長わ東國をこそ平定させましたが、西國の毛利氏の勢いが盛なので、自ら出て秀吉を援けようと思い、子信忠と手兵百六十餘を率いて京都の本能寺に宿りました。こゝに明智光秀わ平生信長の仕方を不快に思つて居ましたが、今や時が來つたと、大軍を以て急に攻め寄せたのです、さて信長わ夜更けて門外に人馬の音を聞き、かくと知て大に怒り、弓を射て群敵を斃し、侍臣森蘭丸も目覺しい働をしました。けれども敵わ大軍ですから、今わ之迄と火を放つて自殺しました、秀吉わ此の悲しい知せを聞いて、直に東に向い、光秀を山崎に迎えて　吊合戰をしましたが、光秀わ敗走の途中間もなく土民の爲めに、敵なき最後を遂げたのです。そして光秀わ謀反を企てゝから、僅十二日目に、もう滅されてしまつたのです。



秀吉の雄圖

紀元二千二百五十二年

朝鮮征伐　秀吉わ既に日本全國を從えて、夫れから朝鮮に手を延しました。尤も秀吉の目的わ明國を攻取ろうとしたのです、さても文祿元年正月朝鮮征伐の部署わ定められ、浮田秀家元帥となり、第一軍小西行長第二軍加藤清正、第三軍黒田長政、第四軍島津義弘、第五軍福島正則、第六軍小早川隆景、第七軍毛利輝元、第八軍浮田秀家、第九軍織田秀信各々軍を統べ、總勢三十万人、秀吉も又那古耶に陣を進めて、全軍に令したのであります。かくて我征韓軍わ、數千の巨艦海を壓して、堂々と釜山より京城を突き、八道の野山を切從えましたが、中にも武勇の清正と智略ある行長とわ、共に軍の先鋒となつて、よく戰いましたので、明軍も遂に支えきれず、間もなく講話條約を結び、我征韓軍わこゝに勇しく凱旋したのであります。



伏見城の地震

紀元二千二百五十六年

加藤清正 わ朝鮮に出征して居る間に、三成や行長が、何かと清正の事を讒言しましたので、秀吉わ之を眞に受けて、一時清正に勘當を申付けたのです、で清正わ心外に思つて居る折から、或夜大地震が起つて、方々の家邸が壊れましたので、秀吉公の安否を心配し、勘當の身分をも忘れて、公を伏見城に見舞いますと、大勢ある家來の中で、誰一人來て居りませんので、公も大きに喜び、直に城門の守護を仰せ付かりました。さて秀吉の死後わ、徳川家康と結托し、かの關原の戰の時にわ、清正わ九州に居て、私に三成の黨を牽制しました。併し一日も太閤の恩を忘るゝことなく、心を盡して秀頼を護り、慶長十六年熊本で薨じましたが、此の人の亡き後わ、誰も豊臣氏を思うものもないので、間もなく大阪城も陷つてしまいました。



秀吉明の册書を裂く

紀元二千二百五十六年

慶長の役　慶長元年八月明韓二國の使節を乘せた船が、泉州堺浦に着き、九月伏見城に秀吉に謁見しました。秀吉わ僧承兌に明の來書を讀ませると、其文中に爾を封じて日本國王と有りましたので、秀吉は怒つて其書を裂き、明使を叱つて追返しました。こゝに於て翌二年正月秀吉わ陣を那古耶に進め、小早川秀秋を元帥とし、清正行長を先鋒として總勢十三萬人、釜山に根據地を置いて頻りに明韓軍を破せましたが、中にも清正の蔚山城に於ける大苦戰、義弘の泗川で敵首三萬を斬り伏屍二百餘里に亘る大勝利を博した事などわ、著者な戰であります。明年八月秀吉重病に罹り、臨終に目を開いて、我十萬の兵を海外の鬼とするなと遺言して薨じたのです、で家康わ遺命を奉じて使を朝鮮に遣し、和を講じて全軍を還らせました。

鋭敏な小僧



紀元二千二百六十年

石田三成　幼名佐吉近江の人、十三の時寺の小僧をして居りましたが、或日秀吉が其寺に休み、三成の才智の尋常でない事を知り、貰い受けて給仕人に取り立てたのです。之より三成わ秀吉の寵愛を一身に受け、天正十三年従五位下治部少輔に任じ、事大小となく委任せられ、近江佐和山の城主として十八萬六千石を領したのです。秀吉の薨後、徳川家康上杉景勝二人を憚り、何とかして之を滅ぼさうと圖り、遂に彼の關原の大戰を惹起したのです、けれども不幸にして此の戰わ、三成の大敗に歸し、身を以て膽吹山に匿れましたが、佐和山にある一族の戰死したのを聞いて、高野山に行うとして、井口村で捕り、京都三條磧の露と消えました、併し三成も家康を相手に戰う程の人ですから、中々立派な英雄だつたに相違ありません。



石田三成滅ぶ

紀元二千二百六十年

1600

關原の役

石田三成わ平生から德川家康の威望を妬んで居りましたが、家康が東征の留守中に、浮田秀家小西行長等を味方とし、家康の伏見城を奪い、更に關原に敵を鏖にして天下を我物にしようと企みました。三成の兵勢わ十二萬八千人、さしもに廣い關原も、人馬を以て埋るばかり、こゝに家康わ五萬五千の兵を提げて三成の軍と戰を交え、只一日に之を敗走させ、首を獲ること四萬餘級、家康の軍わ一將をも失わず、僅に四千の血を以て物の見事に天下を取りました。さて三成わ一旦伊吹山の谷間に匿れましたが、間もなく捜出されて首を斬られ、京都三條の磧に梟されたのです。家康わ三成が叛いた爲めに、譯もなく豐臣氏に代つて、天下の政權を手中に納め、十五代三百年の江戸幕府の基を開いた古今に稀な英傑であります。

Sekigahara



アダムス家康に謁す

紀元二千二百七十三年

三浦安針　德川家康わ大に海外の通商貿易を盛にしましたから、從つて日本人が海外に出掛け外人が我國に來朝する事も多くなつたのです。英人ウヰリアム・アダムスと蘭人ヤンヤンステンとが、遠征隊の小舟に乘つて、慶長九年豐後に着しました。そしてアダムスわ大阪で家康に謁し、江戸に留つて厚く遇され、英蘭二國と我國との交通について、色々骨折ましたが、後に相摸國三浦郡逸見村の領主となり、名を三浦安針と改めて、一生を我國の爲に盡しました。こう云う風に家康わ、外交に寛大な方法を執つたのですが、外人が來航する結果として、天主敎が興つて國を亂す恐がありましたので、慶長十七年外敎を禁止し、從つて外交の事も衰え、三代將軍の時島原の亂以後わ、和蘭支那朝鮮の三國の外わ、全く交通しませんでした。



紀元二千二百七十四年

方廣寺の鐘　慶長十九年豊臣秀頼わ、京都方廣寺の鐘を鑄て、東福寺の清韓に命じて其鐘銘を作らせましたが、文中に國家安康の文字がありましたので、日頃清韓を惡んで居る五山の僧徒が之を見て、銘に家康の二字を入れたのわ關東滅亡の呪であろうと、直に家康に告げますと、家康わ五山の僧を召して其吉凶を占わせましたが、何れも不吉だと申しますので、家康わ頻りに大阪の無禮を責めたのです。で片桐且元わ秀頼の名代として駿府に行き、百方辯解しましても、家康わ容易に承知しませんので、大阪に歸つて三ヶ條の策を出しました。此の間に家康わ間諜を大阪を出して、秀頼と家來との間を仲惡くして、戰を起させ樣とし、大野治長わ意を決して兵を募り、遂に大阪冬の役わ、端をこゝに開くことゝなつたのであります。



豐臣氏滅ぶ

紀元二千二百七十五年

大阪の役

豐臣氏わ大阪兩度の戰で、全く滅びてしまいましたが、慶長十九年冬の役にわ德川方十五萬、豐臣氏十萬と稱せられ、結局城の外濠を埋めることを約して、和を講じたのです。大阪城わ流石に秀吉が築いた丈に、德川氏の大軍を以てしても、容易に陷る事わ出來ませんでした。併し條約わ結ばれましても、大阪方でわ之を快く思わず、更に元和元年四月四日を以て、再擧を企てることゝなりました。眞田幸村わ戰爭が上手で、頻りに東軍を苦めましたが、やがて城中に內應する者が出來て、火を放つたので、幸村わ戰死し、秀賴母子わ自殺し、大野治長等廿人と共に死ました、時に五月八日、さしも一時わ榮えに榮えた豐臣氏も、天下の大權を執る事僅に十三年、こゝに世わ全く德川氏のものとなつてしまいました。



石合戰の豫言

紀元二千二百七十六年

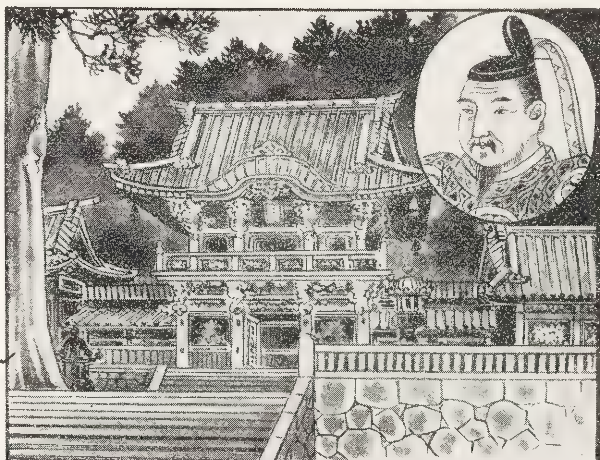
徳川家康　わ贈太政大臣廣忠の長男で、天文十一年十二月廿六日參河の岡崎城で生れました。幼名竹千代、廣忠わ織田信秀と戰爭するに當つて、家康を人質として今川義元に送りました。家康が義元の家に居た頃、端午の節句に安倍川原で、土地の子供の石合戰を見、少數の方え味方して人々を驚かした事わ、誰知らぬ者もありません。此の樣に子供の時から悧發な人でしたから、年を取ると共に、次第に地位を得、遂に豐臣氏に代つて、天下を統一したばかりか、廣き武藏野の一角に、江戸幕府を開き、十五代三百年の基礎を開きました。して見ると信長よりも秀吉よりも、世を治ることに就いてわ、遙かに上手であつたのです、『上を見な』『身の程を知れ』、此の二つの格言わ、家康が一生中忘れずに守つたのだと云う事で御座います。



常長羅馬法王に謁す

紀元二千二百七十六年

伊達政宗 わ幼名梵天丸、常に大志を懐き、其島津氏の琉球征伐を聞くや、自分も大いに南蠻を討うと思い、家來の支倉常長と云う者に、六十八人の隨行者を以て、先づ羅馬法王ポール五世の許に、贈品と書面とを屆けさせました。茲に於て日本奥州王の名わ、一時に彼國に響渡り、常長わ法王の返書と種々の珍奇なる贈物とを以て、約八年の後に歸國し、詳しく彼地の事情を復命して、南蠻を討つ意見を述べましたので、政宗大いに喜び、早速開戰準備に着手しましたが、折から耶蘇敎の禁が嚴重になつて、事を果すことが出來ませんでした。大阪の役東軍に加つて功を立て、寬永十三年五月、七十歳で卒したのです。政宗わ詩歌を喜くし、又茶事を好み、木下長嘯等と交り、武將としてわ珍らしい風流な英雄であつたのであります。



東照大權現

紀元二千二百七十七年

日光廟　わ徳川家康の靈を祀る所、家康わ元和二年四月、七十五歳で駿府城に薨じました。遺命に從て久能山に葬り、翌年三月更に日光山に改葬して神號の宣下を請い神殿を營み、後寛永十三年改築に際し、幕府の全力を盡して天下の美觀を添えしめ、次で後光明天皇の正保二年勅して東照大觀現の神號を賜い、夫れより毎年勅使を遣される事となりました。又慶安四年三代將軍家光の柩をも、こゝに收められ、徳川氏宗廟の地として、士民の尊崇する所となつたのです。何しろ徳川氏が將軍の威力を振つて、善美を極めた社殿ですから、今日明治の世になりましても、日本に二とない美觀を呈し、日光を見なければ、結構とわ言われぬとさえ稱せられ、殊に日本觀光の外人わ、先づ此の日光廟を訪うのを何よりの樂みとして居る位です。



紀元二千二百八十一年

冒險的快男兒

1621 This may be the year in which Nagamasa went to Siam.

山田長成　德川の治世太平打續いて、功名を立つる地なく、一商船に乘て遠くシャムに入り、王を援けて六昆の大軍を破り、王の親任を得て王女を娶り、國政を掌つて日本町を造るなど、海內無事の時に當つて日東帝國の武名を發揚しましたが、惜い哉中途反人の爲めに殺されたのです、併し長政わ冒險的快男兒であります。山田長政わ駿河の人で、少年時代から大きな志を懷き、農事や商業を嫌つて兵學を好み、二十七歲の時臺灣に航し、夫れよりシャム國に渡つて日本男兒の手並を見せたのです。常に故鄉の事を忘れませんで、戰に出る每に靜岡の淺間神を祈り、後當時の戰鬪を描いた額面を造つて、わざ〳〵淺間に獻じました。所が此の英雄わ、我寬永二年敵の爲めに毒殺せられて、部下の多くわ大概日本え歸つて來たのです。

Yamada Nagamasa

1625

徳川幕府のある所



紀元二千二百八十二年

1622 This is the last year of the second Shogun Hide-tada.

江戸　わ徳川氏が十五代三百年の永い間幕府を置いて天下に號令した地で、明治以後わ皇居をこゝに奠め、名を東京と改め、日本帝國の主府となりました。一體江戸わ南北朝の頃にわ江戸郷と呼び、足利氏の末に太田道灌が城を築き、大永四年にわ北條氏綱が江戸城を取つて、家來の遠山景政を以て、其守護としたのです。所が天正十八年北條氏が亡び、代つてこゝに封ぜられたのが、誰あろう徳川家康でした、さて家康わ遂に天下を統一して、江戸の城をも修築し、市街を開き、諸侯の邸宅をもこゝに構えさせましたから、人民が四方より群集し來り、年一年毎に繁榮に赴いて、とう〳〵今日の様な盛んな都の基となりました。茫々たる廣い武藏の原に、三百年太平の根據を固めた徳川家康も、また先見の明ある人でわありませんか。



三代將軍の威光

紀元二千二百八十三年

徳川家光　わ秀忠の第二子で家康にわ孫に當り、元和六年元服して從二位に叙し、權大納言に任じ征夷大將軍となりました。其始めて將軍職を繼いだ時、諸侯を召して云うにわ『我祖先が天下を統一したのわ、全く諸公の力であつた、故に賓客の禮を以てしたが、予わ座ながら四海を治め、先君と同格でわない、故に他日君臣の義を用いて諸公を待うと思う、今より三年各其國に就き、策を定めて處分せられよ』と、夫れより諸侯を一人宛寢室に招き、一刀を授けて刀身を改め見よと云いましたので、皆々家光の度量に敬服したと云うことです。家康の興した事業わ、家光の時代に整頓したものが多く、後世其徳を稱して、中興將軍と呼ぶも其筈です、慶安四年四月四十八歳を以て世を去り、勅して大猷院殿と諡し、日光山に葬りました。



キリシタンの禁制

紀元二千二百八十八年

1626.

踏繪（フミヱ）と云う物わ、耶蘇敎を信ずる者に改宗させるとて、耶蘇基督の繪をかいた物を踏ませるので、寛永三年水野守信が長崎奉行となつた時、はじめて造つたのだそうです。又耶蘇改宗の事を、切支丹轉と申しました、之わ大久保忠鄰が、京都で耶蘇信者を改宗させる時に、信者を俵に包み、群衆の前に持出し、一人の役人が鐵棒を振つて、轉べ〳〵と責付けますので、信者わ苦しさの餘り、轉びますと云うと、夫れで最早や改宗したものと見傚して赦されたのです。當時の狂歌に、「ころび吹く尺八竹を切支丹、俵にまかれこも僧になる」と云うがあります、扨踏繪の事わ、安政四年に和蘭領事の請によつて、全く廢止されましたが、當時使用されたものわ、今も猶東京帝室博物館に陳列して、此の時代の掟を見る便に供えて有ります。

1626 1629 1857 228 1857

In this year Harris saw the Shogun Iyesada.

商人の臺灣征伐



紀元二千二百八十八年

1628 In this year the event happened in Formosa.

濱田彌兵衛　わ長崎の商人末次平藏に使れて、貿易業に從事して居りましたが、何しろ海賊が横行するので、船員わ常に武裝して居ました。或時彌兵衛の船が臺灣に寄港しますと、和蘭の警察が武器の引渡を迫つたのですけれども彌兵衛わ之に應じません、すると臺灣總督が彌兵衛を招待して、充分に酒に醉わせ、其間に船中の武器を沒收してしまいました。彌兵衛わ後に此の事を知り、歸國の後平藏と相談して弟左衛門、子新藏等を伴い、二艘の船を以て臺灣に行き、總督に面會するなり用意の日本刀を振い、先日の復讐として奮戰しました。流石の總督も日本刀の威力に恐れて、遂に一萬二千餘斤の生絲と、純銀八萬六千マルクを出しましたから、彌兵衛わ總督の長男を人質に取り、やがて勇しく長崎え歸つて參りした。

Hamada Yahei

幕府の專恣



紀元二千二百八十九年

1629 Emperor Gomizunoo died in this year

後水尾天皇　わ後陽成帝の太子で、御即位の後わ常に幕府の處置を不快に思召し、「あし原よ茂らば茂れ武藏野に、とても道ある世にしあらねば」。「世の中わ上に目がつく橫に這う、葦間の蟹のあさましき世や」など、云う御歌さえ遊ばされました、幕府の專恣一日每に甚しく、御憤愈深く、遂に位を皇女に讓らせられたので、時の所司代板倉重宗わ之を聞て大に驚き、傳奏の中院通村に就て、主上の御心の程を尋ね參らせると、通村わ幕府の專斷今日の樣でわ、迚も永く位に在らせられぬと云いましたので、重宗わ早速かくと關東に知せますと、秀忠わ大に怒り、心の儘に仰せらるる上わ、海島え移し參らせるの外わないと申しましたが、家光の盡力で事なく濟みました。在位十八年、院に在らせらること五十一年延寶八年崩御、壽八十五。

Go mizu no o tenno



武家の行列

紀元二千二百九十四年

參覲交代　德川幕府でわ諸國の大名を取締る爲に、邸宅や妻子を江戸に置き、時を定めて江戸に在勤させる規則がありました。普通江戸に一年國に一年の定めで、關東八州の大名に限り半年交代でした。之が即ち參覲交代と云うので、其出入の期日わ、一日でも違えてわならぬと云う、嚴しい規則で御座いました。一體參覲交代の制を設けたのわ、幕府と諸大名との親密を圖る上にもよろしく、又大名が江戸で安樂に暮し、謀反の心を起さぬ樣になり、往復の費用が多くて、大名の財政が苦しく、自然幕府に頭を下げ、幕府わ其權力の強いことを、日本全國の諸大名に知らせるなど、德川氏にとつてわ、眞に都合のよい規則でした。併し之と云うのわ、昔から大名が諸國に割據して、夫れ〱威を振い幕府で其取締に困つたからであります。



耶蘇教徒反す

紀元二千二百九十七年 1637

島原の亂　天草島原わ耶蘇敎の中心地で、德川氏わ之を滅す爲に、百方苦心し、領主板倉重政わ寛永五年多數の信徒を、生きながら穴に埋め、或は竹槍に貫き、又わ其背を割て熱湯を注ぎ、之を噴火口に投げ込むなど、殘忍なる手段を用いましたので、十四年十月不平を抱く信徒等わ、遂に反亂を企て、天草の代官を殺し社寺を毀ち、僧侶を殺すなど、容易ならぬ狀態となりました。報を聞いた幕府わ大に驚き、老中松平信綱以下重なる人々を遣して、之が鎭撫に從わせ、鎭西の諸侯わ悉く兵力を合せて賊の城を圍み、一方蘭人を召して海上から砲擊させ、十二萬の大軍を以て城を陷れ、男女を併せて一人も殘らず悉く殺し、さしもの大亂も全く平定しましたが、之から耶蘇敎の禁一層嚴しく、延て外船の來航も絕えたのです。



家光とその乳母

紀元二千三百〇三年

春日局　わ徳川家光の乳母です。時に秀忠の夫人わ、次男の國千代を可愛がり、秀忠も又内心に世子を代え樣として居りますので、局わ之を見て徳川家の一大事と心得え、私に駿府に行つて詳しく事情を家康に訴えました、で家康も大いに心配して夫れとわなしに江戸に下り、秀忠の二子に謁見させましたが、其待遇を明にして長幼の別を立て、家光をば殊更に上座に置きましたから、玆に於て紛議もなくなつてしまいました。後家光が將軍職に就てからわ、局を重用して奥向の事を一切任せました。寛永六年命を奉じて京都に行き、後水尾天皇に拜謁して天盃を賜り、特に二位に叙せられ、春日局の號をさえ下されたのです。かくて局わ二十年九月六十五歳を以て世を去りましたが、女ながらも天晴の丈夫でわありませんか。

大日本史成る



紀元二千三百十七年

水戸黄門　水戸の城主で名わ光圀、博く書物を讀んで日本歴史の編纂を思い立ち、有名の學者を集めて其事に當らせ、かくて出來上つたのが、世に名高い大日本史であります。光圀わ又勤王の志厚く、楠正成の忠義に感じて、紀念碑を湊川に建てましたが、こう云う事から天下の人々も、皇室の尊い譯を知り、遂に明治維新の機運をこゝに萠したのです。光圀の力で出來上つた大日本史わ、安積澹泊と云う學者が、最も力を盡しましたので、一度此の書が編纂されてからわ、後世の歴史の書物も大抵之を元としたのです。さて光圀わ常陸の西山に居をトし、自ら西山隱士と呼んで世に遠ざかり、元祿十三年此の地で薨じましたが時に七十三歳、諡して水戸義公と申しました。吁光圀わ當時稀に見るの明君でわありませんか。



振袖火事

紀元二千三百十七年

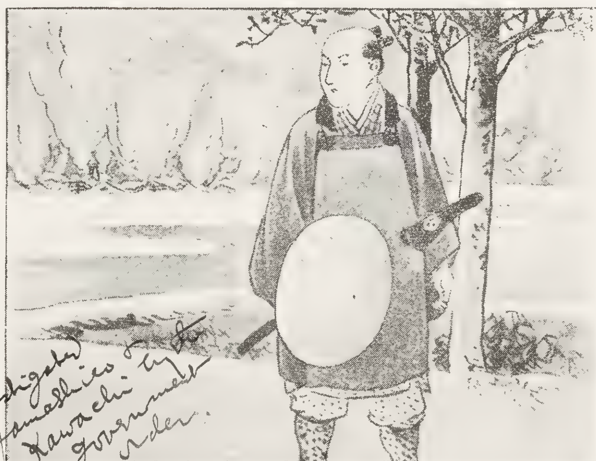
明暦の大火　明暦三年正月江戸創つて以來の大火災が起りました。火元わ本郷の本妙寺で、折からの風に殆ど江戸全市を焼拂い、江戸城さえ只西丸を殘したばかりで、悉く焼失したのです。此の火事わ振袖を焼いて、端なく大事に至りましたから、俗に振袖火事とも申します。老中松平信綱わ、鎮火と共に直に後の始末に着手しましたが、其重なる事わ、夥しい焼死者を本所に合葬して回向院を建て、旗本諸侯の罹災者にわ金を貸出し、且つ一時參勤交代の規則を中止して、臨時に國に歸る事を許し、人民の救恤に注意し、之を機として市區改正を行つて面目を改め、本所深川鐵砲洲を埋めて町を擴げ、淺草川に兩國橋を架けて本所と淺草との交通を便利にし、消防の制を設けて火災に備うる等、見るべき良政が多かつたのです。



和唐内の奮戦

紀元二千三百十八年

鄭成功 わ明の鄭芝龍の長子で、母わ長崎平戸の人、成長の後父に迎えられて明の朝廷に仕えましたが、隆武元年清軍大擧して來り攻め、明王を擒にしたので、成功わ之より明の爲に、屢々清軍と戰い、後明の勢が振わなくなり、とう〱部下の兵を率いて臺灣に入り、頻りに諸城を陥れてこゝを根據地とし、一方人を呂宋に遣して、之をも占領しようと企てましたが、不幸にも清の康熙元年に病の爲め世を去り、折角の志も果すことわ出來ませんでした。成功わ清軍と戰う時に、屢々使を幕府に送つて、援軍を願いましたが、幕府でわ外國と事を構うることを恐れ、遂に其請に應じなかつたのです。さて成功わ康熙三十九年に南安に改葬せられ、光緒元年にわ祀を臺南城内に營み、土人の爲に神と崇められたのであります。



紀元二千三百四十三年

In this year 1683 Zuiken investigated the waters of Yamashiro & Kawachi by the government order.

河村瑞賢　わ江戸の人で、はじめ車力を業として人に傭われて居りましたが、至つて敏活な性質で機智に富み、或時江戸に大火事のあつた時、まだ其火の鎮まらない内に、急いで木曾え旅立ち、一時に夥しい材木を買い占めて忽ち富豪となりました。浅草本願寺の屋根瓦を修繕するのに、面白い工夫を凝して人を驚かせ、又大阪の安治川をはじめ、淀河、長柄川、中津川等が、年々洪水のために、附近の住民が、少からぬ迷惑をするのを見て、巧みに其害を絶ち、治水に就いての書物を著して、後の世までも世人に重んぜられました。瑞賢わ後に幕府に召し出されて、米百五十俵を賜わり、子孫又代々幕府に仕えて御用達を致しましたが、瑞賢が我家の燃ゆるのを後にして、木曾路に馳け付けた機敏にわ驚くの外ありません。

Kawa mura Zui Ken

Genroku-period
1688 to 1703



華やかな風俗

紀元二千三百五十年

元祿風とわ何でしよう。五代將軍綱吉の治世わ、太平長く續き、將軍をはじめ諸候も、有らん限りの驕りを盡し、紀文、奈良茂などと云う民間の富豪も、金のあるのに任せて此の風を見倣い、衣服や遊具に迄贅澤を極め、華美なる元祿風わ起りました。併し一方にわ木下順菴新井白石、室鳩巣雨森芳洲などの儒學、北村季吟僧契沖等の國學者が出で、殊に太平につれて、文學わ一種の特色を現し、西山宗因松尾芭蕉等の俳諧、井原西鶴の浮世草子、近松門左衛門の戯曲、安藤自笑江島其磧等の小説類わ皆元祿時代を中心として起り、官府の修撰になつたのでわ本朝通鑑、武德大成記、大日本史、扶桑拾葉集など、何れも立派な大部の書物であります。即ち元祿時代わ、近代に於て最も文學の隆盛を極めた時と云うてよろしい。

gen roku fu

1690 In this year Chikamatsu was in Osaka, and Kempeller published a book on Japan at Nagasaki.



殿上の刃傷

紀元二千三百六十一年

淺野長矩　わ播州赤穗の城主、元祿十四年三月十一日勅使權大納言藤原資廉以下の人々が、江戸え來ましたので、幕府わ長矩と吉良義央とに接待の役を命じました。一體義央わ至つて貪慾な男ですが、禮式に明い所から、勅使の下る度に、いつも饗應掛になり、義央と同じ役に當つた者わ、賄賂を贈つて其指揮を受くるのでした。けれども長矩わそんな穢しい事をせず、且つ義央の言に服しませんので、義央わ面白からず思い、遂に衆人の前に於て散々恥をかゝせたのです。で長矩わ大いに怒り、直に刀を拔いて義央を斬ろうとし、僅に其額を傷けました。將軍綱吉わ命じて長矩を捕え、田村邦顯の邸に幽し、即日死を賜うて領地邸宅迄も沒收しました。長矩時に年三十五、如何に悲憤の涙に咽んだでしよう、思うても氣の毒な話です。

四十七士



紀元二千三百六十二年

1702

大石良雄　わ赤穂藩の老職です。元祿十四年藩主長矩わ、吉良義央を傷けて即日死を賜り、其報赤穂に達するや、老臣以下何れも吃驚してどうすることも出來ませんでしたが、獨り良雄わ覺悟を定め、藩士を諭し退かしめ、京都山科に家を作り、同志の士と復讐の事を相談したのです。併し充分大事を取つて容易に事を擧げないので、年少氣鋭の士わ何れも良雄の躊躇するのを見て、疑を懷きましたが、良雄わよく之を慰め、力めて敵の窺うのを避けて居りました。元祿十五年十二月十四日、義央の家に酒宴の催あるを見、同志四十六人と共に、急に其家を襲い、首尾よく主君の仇を報いました。幕府四十七士を諸侯に預け、翌年二月死を賜つたのです。東京芝高輪の泉岳寺の主君の墓畔に並び立つ、四十七基の石塔こそ義士の靈の眠る所です。

Ōishi Yoshio

1701



朝鮮の使節來る

紀元二千三百七十一年

新井白石　名わ君美、字は在中と云います。明暦三年生れ、三歳にして字を寫し、六歳で書物を讀みました。長じて益々學問に長け、兼て膽力ある好丈夫となり、時の富豪河村瑞軒わ、白石の賢明に感じ、其女の婿とし、且つ三千圓で買つた地所を學費とし度いと申し出ましたが、白石わ立派に之を退けました。寶永八年朝鮮の使節が來朝した時、幕府わ白石に命じて使節と應接させたのです。所が詩文に筆話に行く所使節の右に出で、遂に彼わ白石を尊んで甘盤と呼びました。即ち功を以て從五位下に叙し筑後守となり、領地を增して千石を賜わつたのです。享保十年五月六十九歳にして世を去り、淺草報恩寺に葬りました。著した書物の中でも藩翰譜、讀史餘論、采覽異言、西洋紀聞などわ、後世迄もてはやされたものです。

+ Rangaku no Kigen



長崎の外人街

紀元二千三百七十二年

1712

蘭學の起原

新井白石わ將軍の命を奉じて、蘭人に就て泰西の事情を質し、西洋紀聞采覽異言などの書物を著しました。之こそ日本洋學の起りで、次で吉宗の時代にわ、青木昆陽西川如見等を長崎に遣して蘭學を修めさせ、其後杉田玄白桂甫周大槻玄澤等が出て、醫學と共に洋學も著しい進歩をしたのです。て安政三年には蕃書調所を江戸九段坂の下に設け、はじめて玆に洋學校が出來ました、(蕃書調所わ後の開成校の事です）恰も此の頃川本幸民わ、頻りに西洋の理化學書を紹介し、一方獨乙の醫師シーボルトわ、醫療法の新説を傳え、蘭學の外に英佛獨露の國語も、漸次輸入されました、世に新井白石、青木昆陽、前野良澤、杉田玄白の四人を、洋學の四大家と申しますが、之等の人々が當時の苦學わ一通りでなかつたのです。

+ Ōoka Echizen no Kami



明判官の裁判

紀元二千三百七十七年

大岡越前守 わ初めの名わ求馬、後に忠相と改めました。正德二年山田奉行となり、其裁判の決定が如何にも公平で、權威ある人をも少しも憚る樣なことはありません。德川吉宗が將軍となるや、忠相を召して普請奉行とし、間もなく町奉行に轉じて越前守と云いました。忠相の判決わ前に記した通り、實に公明正大でありましたから、後世迄訴訟の事とさえ云えば、大岡政談と云う如く、田夫野人に迄も其名を知られる所を見ると、當時の名奉行であつた事が解るでわありませんか。さて忠相わ元文元年に社寺奉行となり、寛延元年にわ一萬石の領地を食み、諸侯に列して奏者番と云う役目をも兼ねて居りましたが、寶曆元年病のために兩職共これを辭し、そして間もなく此の世を去りましたが、時に年七十五歲でありました。

+ Kyōho no ji



御藥園成る

紀元二千三百八十一年

1721

享保の治　徳川吉宗わ八代目の將軍で、紀伊光貞の第三子です。家繼に次て將軍に成るや、前代の弊政を改革して、貨幣を改鑄したり大岡忠相を擧げて法律を定め、物價を一定する等、大いに規率が正しくなりましたので、世に此の將軍を呼んで德川中興の英主としました。吉宗わ又一方に學問の發達を奬勵して、洋書舶來の禁を弛め、小石川の御藥園(今の植物園)に施藥院を建て丶貧病者を療養させ、天文臺を設けて天文曆數の學問を勵まし、室鳩巢、荻生徂徠、林鳳岡などの學者を登用して政務の顧問とし、青木昆陽に蕃藷考を作らせて諸國に甘藷を作り、砂糖、墨、木蠟等の製法をはじめ、蘭人より洋馬を購入して各地の牧場に配りました。故に後世吉宗の治世をば、享保の治と云いまして、其善政を喜んだのであります。

+ Ogyu Sorai



豆腐屋のなさけ

紀元二千三百八十七年

1727

十荻生徂徠　字わ茂卿、有名な學者です。二十五歳の時江戸芝の增上寺の門前に家を構え、寺僧儒生等數百人に敎授して居りましたが、至つて貧乏で三度の食事も不自由勝でした。で近所の豆腐屋が徂徠の志を憫み、毎日腐査を贈つて飢を凌がせました。後に徂徠わ祿を得てから、月々米三斗を以て此の恩に酬いたと云う事です。當時の學者伊藤仁齋の說を駁して徂徠の名聲いよ〳〵高く、貴紳多く其門に集り、人に後れぬ樣に馳せ參じたのを見ても、如何に豪かつたかゞ解ります。享保六年將軍綱吉に召され、夫れより屢々將軍の示問に答え、同十三年正月六十三歳で歿しました。此の時代に名高かつた學者にわ、太宰春臺、服部南郭、伊藤仁齋同東涯、中江藤樹、熊澤蕃山、山鹿素行などで、何れも德川時代に重ぜられました。

+ Tanuma fushi

老中の豪奢



紀元二千四百四十七年

1787

田沼父子　田沼意次の父わ意行と云つて、紀州藩の小吏でしたが、徳川吉宗が將軍となると共に、入て其近侍となりました。所が意次わ父の後を繼いで將軍家重家治の二代に仕え、遂に老中に迄進んで祿七萬七千石を受け、老中松平乘邑の死んでからわ、己獨り權威を專にして、我儘勝手に振舞い、家治將軍の病に罹つた時わ、自分の懇意の醫者を進めて毒を盛らせ、後事が發覺して老中を褫われ、意次の親族わ悉く其關係を絕つたのです。又其子の意知わ、父と共に權職に上つて、朝日の昇る勢で、贅澤を極めて居りましたが、天明四年三月、土佐政言の爲に不意に肩を斬られ、鞘を以て防ぐ間もなく、數ケ所の重傷に、敢なき最後を遂げましたから、さしも一時わ飛ぶ鳥も落る勢の奸人原も、見事に滅びてしまいました。

+ Kansei no Sankishi



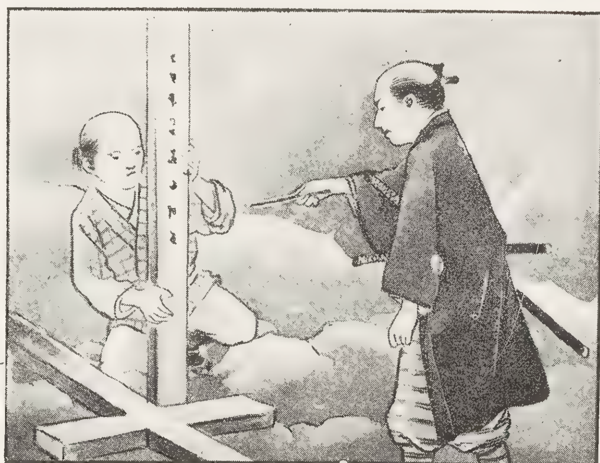
三條橋上の涙

紀元二千四百五十二年

1792

寛政の三奇士　京都三條の橋の上に、一人の武士が土下座して遙に皇城の方を俯拜み、草奔の臣高山正之と、泣いて云いますので、路行く人わ皆狂人だと嘲笑いました。之わ誰あらう上野の人、高山彦九郎正之、常に勤王の志厚く、皇室の衰微を歎いて思わず涙に咽んだのです。林子平わ仙臺の人、夙に海防の事に心を注ぎ、海國兵談、三國通覽等を著して世人の迷いを覺まし、幕府の爲めに著作の板木を奪われ『親もなし妻なし子なし板木なし金も無ければ死たくもなし』と讀みました。蒲生君平わ下野の人、子平と同じく海防に注意し、又皇室の衰微を歎じて山陵志を編み、勤王の士の心を振起しました、此の三偉人わ、將軍家齊の頃、即ち寛政年間の人々て、世に三奇士と呼ばれ、明治の聖代に何れも位を贈られたので有ります。

+ Kondo Juzō



大日本の國標を立つ

紀元二千四百五十八年

1758

近藤重藏　名わ守重、寛政十年露西亞人が蝦夷に寇した時、大使に從つて擇捉島に渡り、露人の建てた標柱と十字架とを拔き棄て丶、其代りに大日本擇捉府と記した標を建て丶歸つて來ました。重藏わ此の時から大いに心を北邊の事に注ぎ、邊要分解圖を作り、又北海警備の策を二回迄も幕府に献じて、松前に奉行を置くこと丶なりました。丁度其頃間宮林藏わ、松前奉行の命に從い、松田傳十郎と二人で樺太島の探檢に行つたのです。尤も初めわ途中から引返しましたが、二度目の時にわ海峽を越えてシベリヤに入り、詳しく其地の人情風俗を調べ、松前に歸つてから、東韃紀行と云ふ書物を著しました。日本人ではじめてシベリヤえ行つたのわ、林藏が第一着です、此の人は弘化二年、江戸深川で歿しました、時に年六十五歳。



日本地圖成る

紀元二千四百六十年

伊能忠敬　今でこそ完全な日本地圖があつて、机上で全國の地形を見ることが出來ますが、世の開けなかつた昔わ、日本の有様さえ知ることが出來ませんでした。所が伊能忠敬と云う人わ、少年時代から暦數の學問が好きで、一生を其研究に盡そうと思いましたが、家産がないので心に任せず、遂に家を其子に讓り、自分わ江戸で修業して、測量の學問にかけてわ、天下第一の名人になりました。後幕府の命によつて、五畿七道を歩き、山海の形勢を測量して一々圖面に記し、こゝに初て宇內輿地全圖と云う物が出來上りました。忠敬わ文化四年七十七歳で歿しましたが、其著書の內でも、國郡晝夜時刻對數表、地球測遠術問答などわ、何れも後世大に役に立つたのです。明治の御代になつて、忠敬が正四位を追贈されたのも其筈でわ有りませんか。

+ Takataya Kahei



露艦上の談判

紀元二千四百六十年

1800

高田屋嘉兵衛 わ淡路の人、寛政十年函館に行き、擇捉島えの航路を開いて十七所の漁場を設け、土人に漁具や衣類を與えて村制迄も定め、こゝを日本の屬領としました、所が一方文化年中に、露國の使節が長崎に來て、通商を請いましたが、幕府に拒まれてから屢々我北邊を荒しましたので、嚴重に警戒して居ましたら、同八年に露國の海軍中佐が來て千島の測量をしましたので幕府の役人わ之を捕えたのです。折から嘉兵衛わ、擇捉からの歸航中に、露艦に捕えられましたが、多少露語に通ずる所から、兩國の惡感情を解くに力め、遂に日露双方の意を通じ、自分も幸にして自由の身となりました。そこで幕府わ嘉兵衛に賞金を與え、又阿波藩主蜂須賀侯からも、夥しい恩賜品がありました。吁嘉兵衛も又偉人でわありませんか。

十 Hanawa Hokiichi

盲目の學者



紀元二千四百八十一年

1821

塙保己一わ盲目の學者で、群書類從六百三十六巻、續集千百八十五巻を編輯した豪い人です。保己一わ武藏秩父郡保木野邑に生れ、七歳の時盲目となりましたが、家が貧乏でしたから江戸の瞽僧に養われ、琴や鍼を學び、後志を立てゝ古書を研究し、遂に幕府の和學講談所の教師となつて生徒を教授したのです。或夜教授の最中に、風が吹いて蠟燭の火が消え、生徒等わ迷惑して居りますと、保己一わ笑いながら、さて〳〵目あきと云う者わ不自由な身だ、私わ燈火がなくてもよく本が讀まれると云つたのわ、名高い話です、嗚呼保己一わ不自由な盲目でありながら、一心に勉强して、よく此の大部の書物を著しました、目あきの私達が、どうして出來ぬ事が御座いましよう、さても此の偉人わ、文政四年七十六歳で世を去りました。

+ Gaisen uchi harai rei



外國船の入港を禁ず

紀元二千四百八十五年

1825

外船打拂令

寛政四年露國わ公に通商を求め來て、北海道を騒がせました。所が文化五年にわ、英將ペリューが、オランダの國旗を揚げた軍艦に乘つて長崎に入り、頻りに港内を掠め、和蘭人を縛つて國旗を代えたと云う珍事が起りました。之と云うのも其頃英國と和蘭とわ、大いに仲が惡かつたからです。ここに時の長崎奉行松平圖書頭康英わ、兵を隣國の諸藩に募つて間に合わず、責を引いて自殺したのです、これより英艦わ屢々我近海に出沒しましたので、文政八年幕府わ外船打拂令を下し、異國船が港に入り來る時わ、直に砲撃せよ、若し彼等が上陸したならば、一人も赦さず擒殺せよと嚴しく達しました、けれども民間の有志家にわ、西洋の事情に通ずる人も多く、中にも杉田玄白の如きわ、熱心に開港説を主張したのであります。

+ Rai Sanyo



母を伴いて吉野の花に遊ぶ

紀元二千四百八十六年

1826

賴山陽　安藝の人名わ久太郎、日本外史の著者として天下に知らるゝ名高い儒者です。至つて孝心の深い人で、老いたる母を伴うて芳野山の花を見に行つた事も、傳えて美談とします、山陽わ十八の年、叔父の賴杏坪について江戸に出で、尾藤二州の塾で一年ばかり勉强しましたが、後國に歸り、更に備後に行つて菅茶山の塾で諸生を敎え、文政六年京都の三本木に家を構えて、こゝを山紫水明所と號し、生徒を敎うる傍に專ら著述に從つたのです。山陽の大著述たる日本外史わ、全部二十二卷で、源平二氏から德川氏迄、主として武家の事をかいたもので、二十年間の苦心で出來上りました、初めわ固く家に秘して置きましたのを、白川樂翁が禮を卑うして切に之を乞い受け、はじめて世に公になつたもので御座います。

+ Matudaira Sadanobu



白河樂翁公

紀元二千四百八十九年

1829

松平定信 わ田安宗武の七番目の子で、白河の城主松平定邦の嗣となりました。天明七年老中に進み、待從に任じましたが、常に學問を好み儉約を第一としたのです。夫れわ當時上下一般に、奢侈が甚しかつた爲で、定信わ此の惡風を改めるとて吉宗の制に倣い、無駄の費用を省き、武備を嚴重にしたので、中にも民政に注意し、諸侯にわ豫備倉を設けさせ、江戸の町會所にわ積立金を作らせ、奢侈を禁じて風俗を改め、又幕府の政治にわ、中井竹山をはじめ、多くの學者を登用して顧問とし、一方朝廷の尊いことを知らせる爲に、新に皇居を營み、海防の事にも注意しました。寛政六年職を辭して樂翁と呼び、國史の研究を何よりの樂みとして又世事を見ませんでした、文政十二年卒す年七十二、著す所集古十種、花月草紙など。

+ Zeni ya Gohei



饑民船を待つ

紀元二千四百九十三年

1833

銭屋五兵衛　わ加賀國石川郡の船商で、遠大な希望を懷いて居りました。恰も天保の飢饉に際して、飢餓の人道に横り、藩の財政も餘程苦しくなりました。そこで五兵衛わ一策を献じ、藩の納る丶所となりましたので、早速多くの船を集め、之を加賀藩用船と號し、六十餘州の津々浦々を漕廻つて品物を賣り、其利益を以て貧民に施し、藩の財政をもよく整理したのです。夫れより五兵衛わ、三男の要藏と共に、屢々船を北海に出して、外國人と秘密貿易をなし、忽の内に巨萬の富を積んだのであります、けれども後年河北潟を埋めて新田を開こうと思い、漁夫の生業を妨げた罪によつて獄に入れられ、空しくこ丶で病死して仕舞つたのわ、惜いことでした、五兵衛の仕業わしらず、其勇氣の程わ實に感服でわありませんか。

+ Ōshio Hei hachirō



平八郎奉行に說く

紀元二千四百九十七年

1837

大鹽平八郎　名わ後素、中齋と號し幼より讀書を好み、長じて大阪の町奉行を助け、罪人を捕え訴訟を斷じ、威名一時に高くなりましたが、後職を辭して生徒を敎授して居ました。天保八年の飢饉に米價が高くなり、諸方に餓死する者多く、平八郎之を見て奉行に說き、倉を開いて貧民に米を與え度いと云いましたが、奉行わ容易に承知しませんので、自分の藏書を賣つて飢民を助け、攝津河内和泉播磨等の百姓を煽動して、火を市中に放ち、城代の館を攻めました。所が城代跡部山城守わ平八郎の軍を散々撃破り、爲に平八郎わ一時姿を晦まし、一商家に匿れて居りましたが、捕吏に圍まれて潔く自殺したのです、平八郎わ常に王陽明と云う學者を慕い、其學を研究したばかりか、役人としてわ實に豪い人でした、死する時四十六。

+ Takano Nagahide

長英蘭書を學ぶ

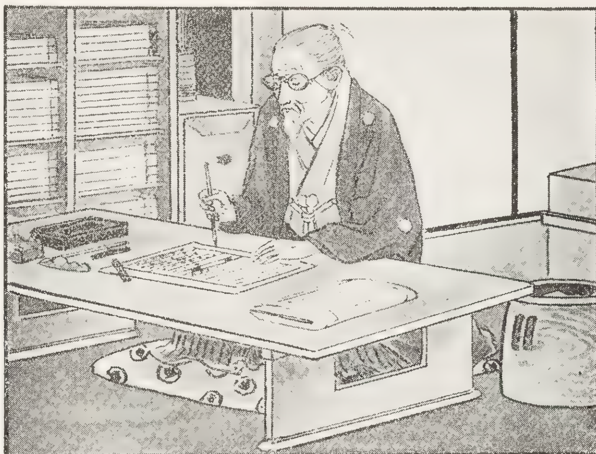


紀元二千四百九十九年

1839

高野長英　わ陸奥水澤の人、文政七年長崎に行き、蘭醫シーボルトに就て蘭學と醫術とを學び、後江戸に出て醫を業としました。天保九年英人來航の噂が立ち、幕府が之を討とうとしましたので、長英わ夢物語を著し、同志渡邊華山と共に、外國の事情を述べて攘夷の下可を唱えたので、終身禁獄の命を受けました。所が同十二年獄内に火事が起り、囚徒わ悉く解散されましたから、長英わ遁れて伊豫に走り、宇和島藩主の譯官となつて、三年を送り、再び江戸に歸つて高柳柳之助と改名し、專ら洋書の飜譯に從いましたが、其事が又幕府に知れて、嘉永三年捕吏の向うと共に、奮闘力戰して花々しい死様を致しました。時に年四十七、長英や其親友の華山などわ、幕末の志士の内でも、最も先見の明のあつた豪い人で御座いました。

Kyokutei Bakin



八犬傳の作者

紀元二千五百一年

1841

曲亭馬琴　本姓瀧澤、江戸の人で名高い小説作者です、初め醫學に志しましたが、中途で目的を變え、山東京傳に就て著述に從い、之を以て一生を終りました。著す所の小説わ實に二百五十餘種に上り、就中今も猶世に行るゝものわ、南總里見八犬傳、椿說弓張月、俠客傳、朝比奈巡島記などで、何れも勸善懲惡を主として、有益にかつ趣味の多い書物です。晩年に眼病を患つて盲目となり、家人に口授して筆記させるなど、其精力の程わ驚くばかりです。又馬琴と前後して現われた小説作者の重なるわ、山東京傳、十返舍一九、式亭三馬、柳亭種彥、爲永春水などで、何れも各々特色があつて、當時の讀書界に持て囃されたのです、併し馬琴わ其中で最も名高い人で、學問も深くありました、天保十二年歿す、時に年八十二歲。

+ Tokugawa Joshiaki



大砲を鑄る

紀元二千五百一年

1841

七 徳川齊昭 わ景山と號し、兄哀公に次で水戸城主となりました。天保十二年弘道館を建て、又大砲を鑄て幕府に疑われ、一時駒込に幽閉されましたが、嘉永六年米艦の浦賀に來るや、幕府わ齊昭に其措置を相談しましたから、齊昭わ十條の意見を書き、豫て造つて置た七十四門の大砲を献じたのです。後安政二年井伊直弼の爲に禁錮せられ、其爲に水戸の浪士わ井伊大老を櫻田門外に刺しました。齊昭わ又朝日丸と云う大船を造りましたが、之を見て諸藩多く船を造り、海防の事にも注意する様になりました。さて齊昭わ万延元年六十一歳を以て薨じましたが、文久年間に至つて從二位大納言を贈られ、明治二年勅して特に從一位を加贈せられたのです。世に烈公と申すのわ、取りも直さず此の水戸齊昭のことで御座います。

+ Perui Raiko



浦賀の浪風

紀元二千五百十三年

1853

＋ペルリ來航　嘉永六年六月三日、不意に四隻の軍艦が、相模國浦賀の港に現われて、德川幕府太平の夢を驚かしました。元來歐洲諸國わ、十八世紀の末から、文明の進歩著しく中にも米國わ八年の戰爭に獨立し、次でカリホルニャの金鑛發見となり、俄に繁榮を來して漁業等も盛になりましたから、勢い東洋方面に手を延したのです、水師提督ペルリわ、如何にもして日本を開國させようと、旗艦サスケハンナ以下四隻の艦隊を率いて、我國を訪うたのであります。幕府わ非常に驚いて、邊海の備を嚴重にし、ペルリの求めわ明年確答する旨を答えました、でペルリわ翌年八隻の大艦隊を以て江戶灣に入り、本牧沖に碇泊して、神奈川に於て和交條約十二款を結びました、之ぞ日本が外國と條約を結んだ始で、又開國の基となりました。

45

Egawa tan-an

品川砲臺の築造



紀元二千五百十三年

1853

十江川坦菴 わ伊豆韮山の代官でした。名わ英龍、世々太郎左衛門と呼び、曾て砲術を高島秋帆に學び、父に次て韮山の代官となるや、質素儉約を旨としたので、領内わよく治りました。天保十年幕府の役人が、大島の視察に行つた時、英龍も一所に大島に渡航して、歸つて後幕府え大島の警備策を上りました。又十四年にわ鐵砲方に任ぜられ、業を受けた弟子が四千人以上も有りましたが、此の者は皆一定の帽子を被り、夫れをば世間で韮山笠と名付けたのです。次で嘉永二年米艦が浦賀に來た時にわ、幕府の命を受け、之を諭して一時退去させました。夫れから後屢々海防策を幕府に献じ、特に品川砲臺の築造に就てわ、主として英龍の力に依つたので有ります、英龍わ安政二年江戸で歿しましたが、殊に書畫にも巧な人でした。

+ Yoshida Sho-in



壯士外艦に投ず

紀元二千五百十四年

1854

✕吉田松陰

海暗き所山の如き巨艦わ、碇を下して居ます。一人の壯士わ小舟を以て、艦側に漕ぎ付けさせました。所わ伊豆の下田港、時わ安政の元年、壯士名わ吉田松陰、佐久間象山の門下の秀才です。松陰わ長門の藩士で、兵法に精しく古今の書物に明るく、末頼母しい人でありました。其頃外人が頻りにやつて來て天下が騒いので、松陰わ專ら外國の事に心を注ぎ、嘉永三年殿樣に從つて江戸に出てからわ、益海防の急を覺りましたが、折から米艦が下田に來たので、之に乘つて外國え行こうとしました、けれども艦長わ其求めに應じません、すると早くも幕府に知れて獄に入れられ、後幕吏間部詮勝が朝廷の命令に從わぬを憤つて、折を見て詮勝を殺そうとする間に、却つて幕府に捕つて、刀の露と消えてしまいました時に年僅に廿九。

+ Ansei no jishin



江戸の破壊

紀元二千五百十五年

1855

安政の地震

安政二年十月二日、江戸に未曾有の大地震が起りました。即ち夜の十時頃から曉方迄に、震動數わ大小三十餘度に及び、潰れ家一萬四千三百四十六、市中の出火三十餘ヶ所、燒失せた町數わ、長さ二里十九町幅平均二町に達し、男女の死亡者わ寺院に埋葬した丈でも、六千六百人と云う夥しい數に上りました、で幕府でわ一萬石以下の士にわ金を貸下げて、災後の處分をなさせ、死者をば回向院に合葬して、永く其不幸を弔ったのであります。彼の水戸の藩士として、齊昭に重用された藤田東湖、戸田蓬軒の二人わ、主君を援けて避難させる爲め、梁の下に壓潰され、敢なき最後を遂げました、一體嘉永年間にわ、内裡が燒け、米艦が來、地震が有りしたので、安政と改元せられたのに、又もや此の災難が起つたのです、

外船の影を絶つ



紀元二千五百十八年

攘夷の勅

孝明天皇わ幕府の專斷を憎せ給い、水戸齊昭に勅して、將軍を援け外夷を退けて國家を安んぜよと仰せられ、同時に幕府に下された勅にわ、尾張越前水戸の三藩わ、忠誠にして國家を憂う、三藩以下列侯、皆朕が意を體して將軍を援け、國家を安泰ならしめよと、幕府わ之を聞て大いに驚き、間部詮勝わ水戸が朝廷の威を借て、幕府の大官を壓する樣な勢となつたのを見て、いろ〳〵と計を廻らし、遂に名高い安政の大獄を起したのです、此の間にも薩摩の島津久光わ、京都に在て朝廷と幕府との間に周旋しましたし、又長州の毛利慶親わ攘夷を主張したのです、で文久二年正三位大原重德を勅使とし、久光を護衞として、江戸に下らせ、鎖港の勅を傳え、幕府に諭すことゝなり、やがて長州藩わ外船を馬關に撃ちました。

+ Gokoku Kariјō yaku



井伊大老の專斷

紀元二千五百十八年

1858

五國假條約　米國總領事外交事務官ハルリスわ、安政三年七月下田港に入り、翌年將軍家定に謁見し、夫れより屢々堀田閣老と會見して、世界の有樣を說き、開港の急務を述べ、遂に新條約の訂結を相談し、明年三月を交換の期と定めました。で幕府わ朝廷のお許しを得ようとして、再三使を出しましたが、朝廷でわ容易に御許可になりません。所が一方のハルリスわ、幕府の約束に反いたのを責め、役人わ板挾となつて、どうする事も出來ないのでした、かくて家定薨じ家茂が紀州藩から入つて、將軍となり、井伊直弼わ大老に任ぜられ、世界の大勢に鑑みてハルリスの要求を納れ米英佛蘭露の五國と假條約を結びました。併し直弼わ勅許を待たないで、恣に此の事を斷行しましたので、天下の志士わ皆直弼の仕方を憤つたのです。



薩摩潟の夕嵐

紀元二千五百十八年

僧月照　わ京都清水寺の住持でしたが、勤王の志厚く、職を譲つて專ら國事に盡しました。西郷吉之助が京都に居る頃、月照と同氣相親み、吉之助わ月照に賴まれて、近衞公の密旨を持て水戸に行き、夫れより屢々江戸と水戸との間を往復してる内に、幕府の疑を受け、吉之助と月照とわ、共に西に走り、吉之助獨り先に鹿兒島に入り、月照と平野國臣とわ追行きました。安政五年十一月、吉之助わ船を雇つて日向に向おうとし、二人も又同じく夫れに乗りました、そして月照と吉之助とわ國事を心配して、相抱いて海中に身を投げましたので、國臣等わ大いに驚き、直に救い上げて介抱しましたが、月照わ最早や此の世の人でわなく、吉之助わ間もなく遠い遠い大島えと流されたのです。吉之助とわ誰あろう、西郷隆盛の事です。

+ Ansei no daigoku



天下の志士を斬る

紀元二千五百十九年

1859

安政の大獄　五國假條約が結ばれてから、天下の志士わ皆幕府の專斷を憤り、大老直弼を斥けて攘夷を決行しようとし、朝廷の公卿中にも此の說に贊成する者がありましたが、直弼わ老中間部詮勝を京都に遣して樣子を探らせ、先づ鷹司近衞三條の三卿を幽し、吉田松陰梅田雲濱賴三樹三郎等三十五人を捕えて江戸に送り、橋本左内日下部伊三次等二十七人を江戸に捕えて其主謀者をば悉く小塚原に斬りました。又水戸中納言わ直弼の專斷の爲めに幕府が勅命に反いた罪に陷つたのを憤り、將軍と大老とに詰問し樣として、却つて幽閉の身となり、尾張慶恕と越前慶永とわ禁錮せられ、土佐山内、宇和島伊達の二侯わ隱居を仰付かりました、之が當時世間を驚した安政の大獄で、直弼が暴狀わ、遂に天下の人心を憤らせたのです。

+ Sakurada no hen



血染の雪

紀元二千五百二十年

1860

櫻田の變　井伊直弼わ近江彦根の城主で、掃部頭と呼び、安政五年大老となりましたが、其時外人わ通商を迫り、朝廷わ攘夷を主張せられ、中に立た直弼わ勅許を得ないで、五ヶ國と假條約を結び、一方に頼三樹等の志士六十餘人を獄に下しましたので、天下の志士わ直弼の專斷を憤り、遂に櫻田の變となりました。萬延元年三月三日憤慨せる水戸の藩士佐野竹之助黒澤忠三郎等十七人、降りしきる雪を侵して、直弼の登城を櫻田門外に要擊し、先づ其前驅を破り、左右より直弼の輿を刺しました。直弼の從士共わ奮い戰いましたが力及ばず、やがて士の之に死んだ者が六人あつたのです。さて竹之助等わ薩摩の人有村治左衛門兼淸わ、直弼の首を搔き落し、從直に脇坂老中の邸え行き、潔く白狀して、夫れ〳〵刑を受けました。

+ namamugi jiken



久光英人を斬る

紀元二千五百二十二年

1862

生麥事件　文久二年五月薩摩の島津久光わ、勅使を江戸に護衛しての歸りに、生麥村迄來掛ると、折から四名の英國人が、騎馬で久光の前驅を犯しました、之を見た藩士わ其無禮を怒り、直に進んで一人を斬殺し、二人に傷を負せたのです、殺されたのわリチャードソンと呼ぶ商人でしたから、歐米でわ此の出來事をリチャードソン事件と云つて居ます。かくと聞いた横濱在留の外人わ大に怒り、遂に英艦の示威運動となり、事が甚だ難しくなりましたので、幕府わ遂に先方の要求を容れ、十萬磅の償金を出して落着しました、所が其翌年英國辨理公使ニール大佐わ、軍艦に乘つて鹿兒島に行き、更に要求しましたから、茲に英艦と薩藩との間に戰爭が起つたのですが、結局償金を出すことゝし、大事に及ばずに濟んだのわ何よりでした。

+ Kagoshima Hōgeki 97



英艦薩摩を襲ふ

紀元二千五百二十三年

1863

鹿兒島砲撃

英國公使ニールわ、生麥事件に就て、鹿兒島に行き、直接に談判し様と思い、東洋艦隊司令長官中將クーペルに、七隻の軍艦を率いさせて出掛けました。鹿兒島藩でわ既に之を豫期して居ましたから、砲臺の守備を嚴重にし、城下の婦女老幼を避難させました、すると、英艦わ薩藩の汽船三隻を捕獲したので、直に開戰の令を下し、兩軍激しく戰を交えました、此の日わ朝から雨が降つて、英艦わ自由を失い、檣頭に白旗を掲げ、又錨を落しましたが、薩藩でわ白旗の譯も知らず、又錨を落すのわ、歐州の例として甚だしい耻ですが、薩藩わ後に其錨を拾つて、英艦に送り届けましたので、英人わ深く之を德としたと云う事です、戰が濟んでから、薩藩わ軍艦買入の事や、歐州留學の事を、ニール公使と約束しました。

+ Shichikyō ochi



七卿長州に下る

紀元二千五百二十三年

1863

七卿落　文久三年攘夷決行の時わ定り、長州藩わ第一に戰爭を開きましたが、幕府わ躊躇して居りますので、長藩わ其不都合を怒り、遂に大和に行幸を請て討幕の師を起そうとし、朝議も略纏りました。けれども常に長州と仲の惡い薩摩わ、此の事に反對を唱え、公卿の中にも此の擧を心配する者があつて、朝議又一變し、尊融法親王入朝して長藩士に退京を命じ之に代るに會津と薩藩とを以て京都の守護としたのです、變を聞いて三條實美、毛利慶親等わ、逸早く入朝し様として許されず、却つて屛居待命を仰せ付かりましたので、慶親わこゝに意を決し、三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆謌、壬生基修、錦小路頼德、澤宣嘉の七卿を奉じて、長門國えと走りました、之が即ち歴史に名高い七卿落の始末であります。

+ Kyoto no hen



蛤御門の戰

紀元二千五百二十四年

1864

京都の變

元治元年六月二十三日、長州藩の家老福原越後わ、三百人の兵を率て京都に來り、七卿の復職と藩士の入京を許される樣に願いました。而して越後等わ守護職松平容保を襲おうとしましたので、慶喜等わ諸藩の兵に命じて宮門を守らせ、七月十九日會津藩の兵わ蛤御門の附近に於て、大いに長藩の兵と戰い、長兵わ公卿の邸に匿れて發砲しました、で慶喜わ砲隊を指揮して鷹司邸を砲擊し、之を燒き拂いましたから、長兵わ大いに敗れ、眞木和泉をはじめ來島久阪等の勇士わ戰死し、越後の船に乘つて命から〴〵長州に逃げ延びました。で之を甲子禁闕發砲の亂とも云います、此の事有てから、幕府わ朝廷に請て長州征伐の旨を布告し、長藩主毛利慶親父子の官爵を削り、尾張候德川慶勝を總督として、出征させました。

+ Bakumatsu no shishi



勤王黨起る

紀元二千五百二十四年

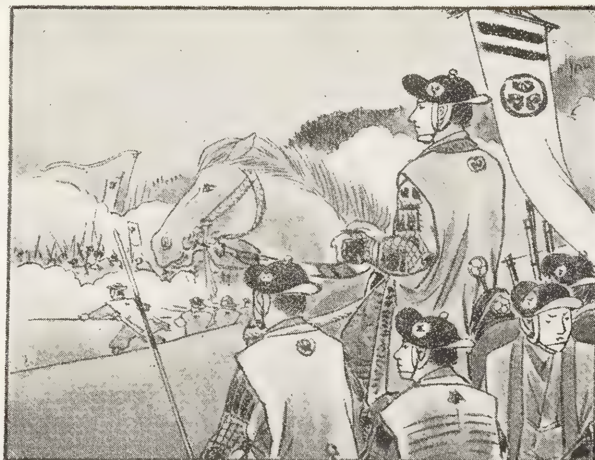
1864

幕末の志士

朝議變じて七卿落となり、折角頼みにした攘夷の事も、思わしく運ばないので、天下の志士わ之を憤慨して諸國に旗あげをしました。即ち文久三年にわ藤本鐵石等が中山忠光を奉じて、大和五條に兵を擧げて天誅組と號し、平野國臣や澤宣嘉を奉じて但馬生野から起り、元治元年にわ水戸の藩士武田耕雲齋が筑波山に據て反對黨と戰うなど、一時に騷がしくなりましたので、幕府でわ其鎮撫策として、諸國の浪士を募り、之に旗本の士を合せて隊を組み、新選組、或わ新徴組など丶呼んで万一の場合に備え、その隊長の中でも近藤勇、土方歳三等わ最も剛勇の士で、其名わ全隊に鳴り響き、天誅組をはじめとし、重なる黨派わ、大概之等の人の手にかゝつて、敢えなき最後を遂げ、主謀者の多くわ何れも斬られてしまいました。

+ Chōshū seibatsu

幕府長州を征す



紀元二千五百二十六年

1866

長州征伐　徳川幕府の末に、長州藩わ専ら尊王攘夷の說を唱え、遂に朝廷を奉つて幕府を討うとしました、所が元治元年に京都の模樣が一變して蛤御門の戰となり、こゝに長州藩わ禁裡を犯して一敗全く勢力を失つたのです、豫て長州藩の處分に苦心して居た幕府わ、同藩が禁裡に向つて發砲し、朝敵の大罪を犯した上わ、最早棄て置かれぬと、直に長州征伐の策わ決せられました、けれども幕府の軍わ、到る所長州藩のために破られ、一方にわ家茂が薨じて幕軍の士氣益々衰え、やがて一時休戰することゝなりました。之に依つて幕府わ、其實力のない事を、天下に廣告したのも同じでした。さて家茂に次で慶喜が將軍となり、今上陛下の御即位と共に、大勢又もや一變して、慶應三年慶喜わ大政を奉還し、德川幕府わ滅びました。

+ Taisei hōkan



慶喜政を奉還す

紀元二千五百二十七年

1867

大政奉還　長州土佐の二藩主わ、幕府に建言して大政奉還の事を勸めました。將軍慶喜も又幕府の勢の日に衰えて、天下を制することが出來ぬを知り、遂に決心して其旨を親藩譜代の人々に告げたのです。所が事の意外に驚いて、可否の議論騒しくなりましたが、將軍わ少も驚かず、慶應三年十月十四日上表して將軍職を辭退したのであります。で翌日入朝しますと、天皇陛下わ大政奉還の事を嘉せられ、之より諸藩と力を併せて皇國を維持し、以て朕が心を安んぜよと仰せられました。又之迄の諸官を止めて、新に總裁議定參與の三職を置き、有栖川宮を總裁に、中山日野岩倉の諸卿尾張越前土佐の三氏を議定とし、勅して今日以後、大小の政令わ朝廷より出づ、四方其旨を解せよ、と達せられ、こゝに目出度く王政維新となりました。



天下の二英雄

紀元二千五百二十八年

西郷と勝　慶喜わ上野の寛永寺に屏居して、只管恭順を表し、勝安芳山岡鐵太郎等を使として、罪を官軍に謝せしめたのです。で二人わ先づ參謀西郷隆盛の許え馳附けて、詳しく事情を述べ、征討軍を停める樣に願いました。所が隆盛わ度胸もあり物も解つた人ですから、早速其旨を總督宮に申し上げ、一江戸の城地及び軍艦鐵砲を沒收すること。一慶喜の罪死一等を減じて水戸に幽する事、一朝廷え抗つた人々を刑する事と、此の三ヶ條を以て攻撃を中止することゝなり、四月四日官軍の先鋒わ江戸に入り、夫れ〲手配をして條件の執行を致しましたが、中にも江戸城沒收のことが、容易に行われたのわ、全く西郷隆盛と、勝安房とが、互に國家の爲を思つて、忠實に談判を纏めたからで、之以來二人わ非常に親密に交際することゝなりました。

+ Nishiki no mi hata



官軍の威大に振う

紀元二千五百二十八年

1868

錦の御旗

明治元年徳川慶喜征討の勅わ下り、征討の諸軍わ、錦旗を奉じて東海東山北陸の三道より、江戸に向つて進發しました。即ち征討大總督にわ有栖川宮熾仁親王、總督府參謀西郷隆盛、東海道の先鋒兼鎮撫總督にわ橋本實梁、參謀木梨精一郎海江田信義、東山道の先鋒兼鎮撫總督にわ岩倉具視、參謀板垣退助伊地知正治、北陸道先鋒兼鎮撫總督高倉永祜、參謀黒田清隆品川彌次郎、奥羽の先鋒兼鎮撫總督にわ九條道孝、參謀大山綱良世良修藏、別に海軍總督にわ聖護院宮、參謀曾我祐準の人々が、多くの官兵を引き連れ、輝き渡る錦の旗を押し立てて進み、既に三月にわ大總督わ駿府に着き、天皇又御親征遊ばさるべく大阪に行幸まし〳〵、事いよ〳〵重大となりました、けれども徳川慶喜わ只管恭順を表して居りました。

+ B Byakkotai

紀元二千五百二十八年

1868



白虎隊　江戸城が開渡されてから、幕府の志士わ會津に走り、東北の諸藩も之に組して一時非常に勢いがよくなりました。で官軍わ北陸東海東山の三道より進み、仁和寺宮を會津征討總督として、行く〱賊軍を破り、遂に九月二十三日を以て、賊の本據たる會津城を陷れました。之より先き城内にわ、少年の決死隊が結ばれて、健氣にもよく働き、當時白虎隊と云えば、誰知らぬ者もありませんでしたが、旣に會津の城も陷り、城内の將士わ悉く戰死しましたので、白虎隊の勇士等も、最早や施すべき策を失い、生き殘れる十餘人の少年わ、燒け落つる城を眺めながら、今わ之迄ぞと、前後して自殺しましたが、其死際の見事なのわ、流石に勇名を轟かした丈に、大人も及ばぬ花々しい振舞いでした。吁飯盛山頭如何に其日の悲しさよ。



上野の戦

紀元二千五百二十八年

彰義隊　江戸に在つた幕臣の中で、江戸城開渡しに不平を懐いた者が、隊を組で彰義隊と呼び、上野に據て輪王寺宮を立て、官軍に敵對し様としました。會津以下奥羽の諸藩も之に應じたので、其勢わ中々盛です。で有栖川總督の宮わ、令を德川氏に下して、彰義隊を解散せ様となされましたが、彼等わ容易に命に服しません。そこで朝廷でも愈々彰義隊討伐の令を布き、大村益次郎を長として、元年五月十五日諸道より上野に迫り、折から降り來る大雨に乗じて、黒門口を砲撃して之を破り、賊兵を走らせて火を寛永寺に放ちましたから、輪王寺宮わ間道より走つて會津藩に投じ、官軍の威わ江戸城下に振いました。此の際田小原藩わ、脱走兵を援けましたが、間もなく首謀者を斬つて降り、關東八州わ錦旗の光に被われたのです。

+ Fushimi Toba no tatakai



幕府の勢いよく〱衰う

紀元二千五百二十八年

1868

鳥羽伏見の戰　討幕の內勅が漏れて、江戸大阪に聞えましたので、將軍德川慶喜わ、入洛の策を定め、明治元年正月三日會津桑名の二藩、及び幕兵を先鋒とし、松平豐前守、竹中丹後守等之を率い、姬路松山大垣の諸藩後陣となり、慶喜わ旗本の士を率いて中陣に扣え、鳥羽伏見の二道より進發しますと、薩長の二藩わ早くも之を路に要し、幕府の兵わ路の狹さに苦められて、散々に打破られ、大阪城え退きました、そこで慶喜わ六日の夜、そつと大阪城を出て、會津桑名の二侯と老中等を從え、軍艦に乘つて江戸え歸つて來たのです、かくして幕兵の戰略わ全く敗れ、大阪城を棄て丶東に逃げましたから、薩長の二藩わ錦旗を奉じて、諸道より江戸え向つて攻め込み、こ丶に於て彼の名高い戊辰戰爭の幕わ開かれたので有ります。

x Gosokui no rei



今上陛下即位し給う

紀元二千五百二十八年

1868

御即位の禮　慶應四年　陛下御歳十七歳にならせ給い、正月十五日元服を加え、勅して大赦の令を下され、一方官軍わ江戸を收めて關東も平定しましたので、八月二十七日即位の禮を紫宸殿に行わせられました、當日陛下の御装わ、すべて古式に據らせ給い、侍臣わ御劒御璽を捧げて從い、水戸藩から上つた直徑二間餘の地球儀を式場に具え、陛下にわ左右の御足を擧げさせられ、日本の部分を交る〳〵お踏みなされて、帝國に君臨する即位の大禮とせられたと承りました、一體御即位の禮わ、中古より唐制により、皇室式微の頃にわ至つて簡略でしたが、今わ萬機神武天皇創業の古に復つたこととて、其御儀式もなるべく壯嚴に行わせられたので有ります、かくて九月八日明治と改元し、一世一元の勅わ下されました。

東京に都を奠む



紀元二千五百二十八年

東京奠都　參與大久保利通わ、時勢を見て遷都の次第を上表し、天皇之を嘉納まし〱て、明治元年七月勅を下され、江戸わ東國第一の重鎭、四方輻輳の地なれば、こゝに親臨して万機を見ると仰せ出され、八月即位の大禮を京都に擧げ、九月明治と改元し、十月東京に行幸遊ばされて、江戸城を以て皇居と奠めさせられたのであります。東京わ奠都以來僅に四十餘年にしかなりませんが、日本の首府としての設備わ、年一年毎に進歩發達して、内治外交共によく整い、世界萬邦に秀づる繁榮を來しましたのも、一に我允文允武なる聖天子の御威德に依つたのです、嗚呼有り難い事でわ御座いませんか、嗚呼また幸福なことでわ御座いませんか、帝都に住む者わ勿論、日本全國の人々わ、相共に此の都を發達させなければなりません。

+ Gojō no goseimon 178



紀元二千五百二十八年
1868

十　五條の御誓文

幕末に於ける天下の說わ、開國と攘夷との二派に分れ、一わ幕府の主張、一わ勤王黨の目的でした。併し勤王黨わ世界の事情に明るい人々で、夫れが攘夷を主張しましたのも、實わ幕府に反對の爲めで、既に幕府が倒れた上わ、鎖國の舊法を守ることわ出來ません、で西郷大久保木戸の諸氏わ、萬國並立の規模を立ることを相談し、三條岩倉の諸公も之に贊成して、遂に明治元年三月十四日　天皇陛下わ紫宸殿に出御まし〳〵て、五條の御誓文わ發せられたのです。即ち夫れわ『廣く會議を興し萬機公論に決す。上下心を一にして盛に經綸を行う。官民一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す。舊來の陋習を破り天地の公道に基く。智識を世界に求め大に皇基を振起す。』以上の五條でありました。



大久保、木戸、西郷

紀元二千五百二十八年

1868

維新三傑　とわ誰々でしよう、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通の三人を云うのです、即ち此の人々わ、何れも王政復古の大業を成し遂げた大功臣ですから、世間で維新の三傑と呼びました。さて西郷わ正三位參議陸軍大將に迄昇進しましたが、明治十年鹿兒島の城山で陣歿し、木戸わ初め桂小五郎と呼び、參議に任じて内政に力を盡し、西南の亂に車駕に從つて京都に止り、こゝで病を得て薨じました。又大久保わ初名一藏、西南の亂後勳一等に叙し正三位に昇りましたが、十一年五月島田一郎なる者が、利通の登朝する所を要撃して、紀尾井阪に命を隕しました。此の樣に維新の三傑わ、揃いも揃つて、僅か一年ばかりの間に世を去つてしまいました、けれども三傑の志を承けた幾多の偉人わ、よくわが國家を治めたのであります。

+ Hakodate no tatakai



五稜郭陷る

紀元二千五百二十九年

1869

函館の戰　徳川慶喜が水戸に退隱しましたので、榎本武揚荒井郁之助等わ、回陽蟠龍回天などの九艦を率て品川灣を脱し、先づ會津の軍を援け、更に北海道に進み、官軍を破て函館五稜郭を占領しました。明治二年三月官軍わ海陸並び進み、松前城を抜き、賊の本據たる函館を衝いて、賊將土方以下數十人を殺し、賊わ最早や五稜郭に籠り、こゝを先途と戰いましたが、次第に勢が衰えて、迚も長くわ支え切れません。即ち榎本武揚、大鳥圭介、荒井郁之助等わ、悉く官軍に降り、兵器彈藥をも殘らず献じましたので、官軍わ之を東京に護送し、間もなく皆之を赦しました。玆に於て東北地方わ全く平ぎ、從つて日本國中に戰亂が止んだのです。此の戰に官軍の參謀黑田淸隆が、榎本等の助命に盡力したのわ美談として後世まで殘されました。

+ Zenken taishi no haken



歐米各國の巡視

紀元二千五百三十一年

1871

全權大使の派遣　安政五年五國に對して結ばれた假條約わ、我國に取つて不利益な事が多いので、如何しても之を改正しなければなりません。所が此の條約わ十四年後に改正する條件でしたから、丁度明治四年が其年限に當りますので、之が任務を本とし、併せて歐米の文物制度の視察をも兼ね、こゝに全權大使を派遣することゝなりました。で外務卿岩倉具視を大使に、參議木戸孝允、大藏卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、文部大輔山口尚芳等を副使として、四月十一日横濱を出發し、遍く泰西諸國を視察して、六年九月に歸朝しました。併し此の行の目的とする條約改正の上にわ、あまり目覺しい効果もありませんでしたが、之が爲めに日本人の頭に、一大變化を來した功わ、決して永く忘るゝことが出來ないのであります。

+ Seikan ron



隆盛征韓を主張す

紀元二千五百三十三年

1873

×**征韓論**　明治初年以來朝鮮の亡狀わ日に月に甚だしく、我政府の一部にも征韓の問題が起りました。中にも西鄕隆盛わ最も熱心で、副島種臣、後藤象次郎、板垣退助、江藤新平等も之に贊成したのです。元より二三反對論者も出ましたが、大勢の赴く所愈〻夫れと決し、遂に三條實美に迫りますと、實美わ餘りの重大事件なので、屢々諭して止め樣としても、隆盛等わ少しも聞入れません、で餘儀なく其旨陛下に奏聞しますと、陛下わ岩倉大使等の歸朝を俟つて決せよと仰せられました、所が六年九月大使わ歸朝して歐米文化の盛大、武備の整頓を稱し、極力征韓論を卻け內治の完備を必要としましたから、隆盛わ非常に憤り、桐野利秋篠原國幹等と共に辭職して國に歸りましたが、西南の大亂わ早くも此の時に端を開いたのです。

+ Saga no ran

江藤新平反す

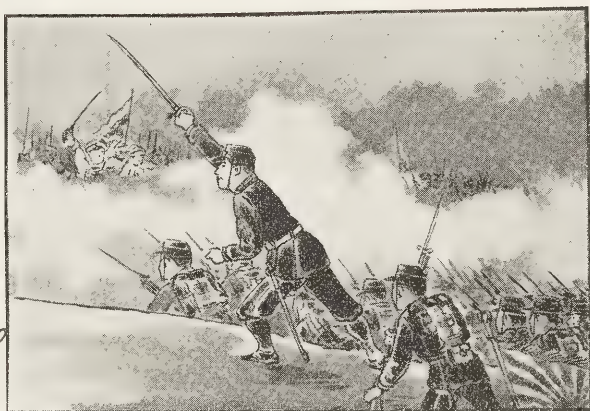


紀元二千五百三十四年

1874

佐賀の乱　征韓論の成就せぬと見るや、江藤新平も同じく職を辭して佐賀に歸り、島義勇等と黨を集めて反旗を掲げ、明治七年新平わ、義勇以下二千五百の兵を以て、先づ小野商會を襲いて金銀を奪い、縣廳を攻て縣令を逐いました。で朝廷わ令を熊本鎮臺に下して之を討せ、大久保利通河野敏鎌を佐賀に遣し、野津少將を熊本に鳥尾少將を大阪に、山田少將を西海道に、山口外務少輔を長崎に遣して賊軍討伐の事に當らせ、彰仁親王を征討總督に山縣有朋を參軍として大軍を發しましたが、已にして亂人全く平ぎ、四月十三日新平義勇の首を斬て之を梟し、其徒十人を斬り、他わ懲役禁錮等に處して、さしもの大亂も茲に鎮定したのですが、何しろ一時わ賊の勢も餘程盛でしたから、朝廷の人々の心配したのも其筈でありました。

+ Taiwan sei batsu



西鄕從道臺灣を伐つ

紀元二千五百三十四年

1874

+ **臺灣征伐**　明治四年琉球宮古八重山二島の人民が、六十餘人臺灣に漂着して土蕃の爲に殺され、六年にわ備中小田縣の者四人が、同じ毒手に罹りましたので、我政府わ七年四月征伐の軍を出し、陸軍中將西鄕從道を都督とし、少將谷干城 同赤松則良を參軍として、兵數三千六百餘、日進孟春大宥等の軍艦を以て蕃地に入り、頻りに諸蕃を降伏させましたが、獨り牡丹社ばかりわ頑强に抵抗しましたから、我わ十二人の戰死者を出したのです、併し氣候が悪いので病者が續發し、遂に死者五百六十餘人に上り、軍費七百八十萬圓に達しました。はじめ我軍が臺灣に向う時、淸國の罪を責めますと、臺灣にわ關係がないと云つて來ましたから、征伐に取かゝりますと、今度わ淸國から臺灣わ我領地だから妄に兵を動すなと云い出しました。

+ Okubo toshimichi



利通清國に使す

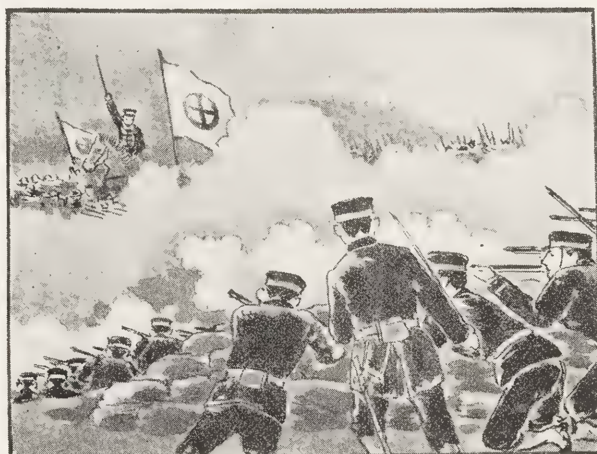
紀元二千五百三十四年

1874

大久保利通　臺灣征伐に就いて、清國わ日本の不法を詰りましたので、丁度其時同國に居た柳原前光わ、頻りに其理由を辯論しましたが、清國政府わ固く執て動きませんから、我政府わ內務卿大久保利通を辨理大臣として派遣したのです。けれども清國わ言を左右にして、何時迄も纏りませんでした、依て利通わ大に怒り、席を拂つて國に還り、日清兩國わ茲に戰爭を開くの狀態となりましたが、折柄英國公使のウエードが、兩國の間に立て調停し、清國わ銀四十萬兩を我に納れ、臺灣の土蕃を檢して再び害を加えぬ樣にと約束しました、で利通わ臺灣に渡り、從道と共に目出度く凱旋したのです、一體臺灣征伐わ、かの征韓論を止めさせる一策として、專ら從道の企てになりましたが、其結果わ征韓論者に少しも滿足を與えませんでした。

+ Seinan no Ran

隆盛亂を作す



紀元二千五百三十七年

1877

西南の亂

征韓の議が合わで、隆盛わ利秋國幹等と共に歸國し、夫れより私學校を立て、二萬餘の少年を養い、專ら武藝を學ばせましたが、事を以て謀反を企て、官軍を熊本城に圍みました。此の時熊本鎮臺にわ、司令長官少將谷干城、參謀長中佐樺山資紀以下、僅に三千五百の少數の將士が居たばかりで、敵の大軍を引受けて、一方ならぬ苦戰に陷りました。一方朝廷でわ有栖川宮熾仁親王を征討總督とし、近衞鎮臺を動かして海陸並び進み、田原坂吉次越に敵の大部隊を破り、官軍の勢い加わると共に、熊本城の圍みを解き、隆盛をば城山に包圍したのです、所が隆盛わ間もなく岩崎谷の壘で流丸に中り、從士に首を刎ねさせて自殺しましたから、西南の亂わこゝに全く平定しました。戰鬪二百餘日、出征の將士六萬餘人。

+ jū shichi nen jiken



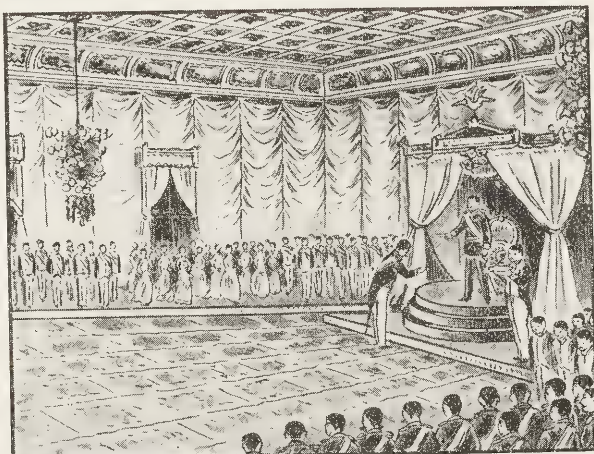
韓人我公使館を襲う

紀元二千五百四十四年

1884

+ **十七年事件**　朝鮮の政府にわ、當時日本黨と清國黨とが有りましたが、十七年十二月京城　郵便局　開設祝宴の時、日本黨わ清國黨の重なる者數人を殺し、金玉　均朴泳孝などわ大臣になつたのです。時に朝鮮國王わ、我竹添公使に王宮の守護を頼み、清國黨わ又清將袁世凱に王城の守護を任せました。所が王わ私に清軍に投じましたので、竹添公使わ公使館に歸る途で、清韓の兵と戰い、公使館も暴徒の爲に焼れ、磯林大尉以下三十餘人が殺されました。此の報の達すると共に、政府わ高島中將及び樺山海軍大輔に兵を付し、全權大臣井上薫を護つて京城に入り、國王に謁して談判を開き、五ケ條の約束を結で歸り、更に伊藤博文を清國に遣して天津條約を結ばせ、今後朝鮮に出兵する時わ、兩國で互に報告する事を固く約束しました。

Kenpō happu

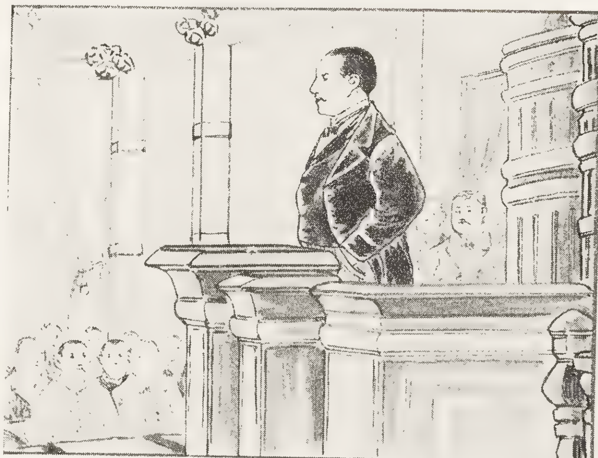

日本帝國の規則

紀元二千五百四十九年

1889

憲法發布　明治十四年立憲政體を始むる勅を下され、伊藤博文わ歐洲諸國を巡回して其制度を調べて歸りましたが、いよ〳〵明治廿二年二月十一日、紀元の佳節をトして、天皇わ群臣を召させられ、こゝに日本帝國憲法七章七十六條を御發布なし給い、同時に皇室典範十二章六十二條を發布し、更に同年の天長節にわ皇子明宮嘉仁親王を立てゝ皇太子となされ、我皇室の基礎わ、いやが上にも堅くなつたのです。畏多くも憲法發布の御詔勅の一節を拜するに、朕わ國家の隆昌と臣民の慶福とを以て中心の欣榮とし、朕が祖宗に承るの大權に依り、現今及び將來の臣民に對し、此の不磨の大典を宣布す云々と仰せられました。捧げ讀み奉るにつけ、天皇陛下が吾等臣民を思わせらるゝ大御心の厚き、只々感泣せずにわ居られません。

Teikokugikai



貴衆兩院を開く

紀元二千五百五十年

1890

帝國議會　明治二十三年十一月廿九日、憲法の定むる所に從つて、第一回帝國議會を東京に開かれました。貴族院の方でわ伊藤博文が議長に、東久世通禧が副議長に任ぜられ、又衆議院に於てわ、中島信行が議長に、津田眞道が副議長となり、夫れ〲熱心に、國家の事件を協議したのです。之より帝國議會わ毎年一回宛召集せられ、時にわ議會と政府との折合が付かないで、解散を命ぜられたことも有りますし、又時には政府の方で、內閣の更迭を見る樣なことも御座いましたが、之と云うのわ、全く政府も議會も熱心誠實を旨とするから、勢いここに意見の合わぬ事も起るのでした、明治四十三年わ恰も第二十六回の召集となりました。かく回數を重ぬるに從つて、立憲政體の美點わ、愈ます〲發揮されて國家の基礎は動かないのです。

+ Kyōiku chokugo　57

教育の方針定まる



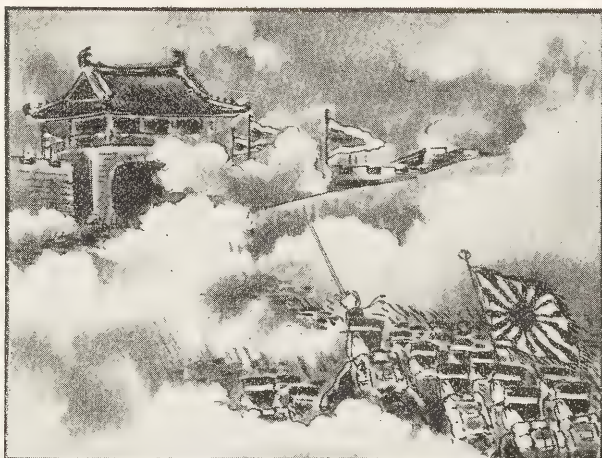
紀元二千五百五十年

1890

教育勅語

徳川時代にわ小學校と云う様なものもなくて、僅に寺の僧侶が讀書習字を教える位でありました。夫れが明治維新後わ、全國に小學校が設けられ、學齢に達した兒童わ必ず此所で初等科の教授を受くることゝなつたのです。さて今や政府の規則わ改正せられ、又憲法も發布せられ、一方國民教育も大いに進歩して來ましたので、常に臣民を思わせらるゝの厚き天皇陛下わ、いよ〳〵明治二十三年十月三十日を以て、教育勅語を賜つたのであります、之まで成程教育わ進みましたが、此の有難い勅語を下し賜つてからわ、教育の方針が一定して、千歳の後までも動かぬものとなつたのです。諸君が學校の寶、我身の寶として、日夕捧げ讀み奉る勅語わ、陛下が深く大御心をつくさせられて、特に諸君に下された有難い賜物で有ります。

+ Heijō no eki



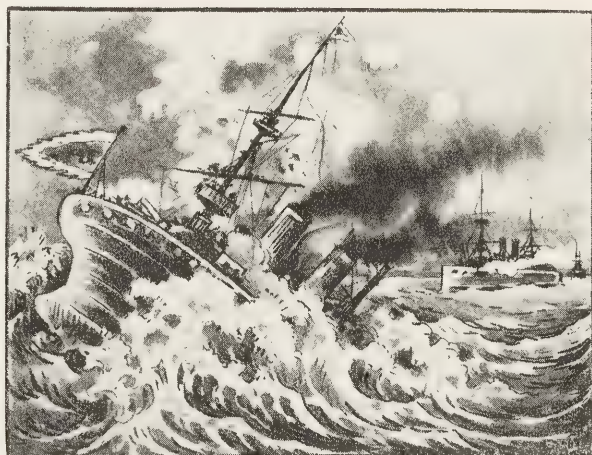
我軍平壤を陥る

紀元二千五百五十四年

1894

平壤の役　日清戰爭の幕わ少將大島義昌の混成旅團が、成歡牙山に淸兵を擊つて開かれました。所が牙山に敗れた敵わ、遠く平壤に落延びて、こゝで日本軍を喰止め樣としましたが、我わ一時も休まず、牙山で勝つた勇氣を振つて、直に平壤に迫つたのです。時わ廿七年九月十六日、實に黃海々戰の一日前でした、さても我軍わ第五師團と三師團の一部を以て攻擊に當り、全軍を統ぶるに中將野津道貫あり、又大島義昌わ本隊を率いて大同江より進み、少將立見尙文の一隊わ牡丹台を拔き、十八聯隊長佐藤正わ元山から進み、玄武門を破て敵の退路を遮り、各隊共非常の苦戰を經て、遂に未曾有の大勝利を博し、朝鮮全國に一敵兵をも止めぬ樣になりました。又敵將左寶貴わ此の戰に戰死を遂げ、各種の分捕品わ山と積まれたのです。

Kōkai no tatakai



我海軍清艦を撃破す

紀元二千五百五十四年

1878

黄海の戰

明治廿七年九月十七日、海軍中將伊東祐亨の統率する聯合艦隊わ、淸國の北洋艦隊と海洋島附近で戰いました。之より先吉野浪速秋津洲の三艦わ、豊島沖で敵艦濟遠廣乙に會して之を撃破し、操江を捕獲し、運送船高陞を撃沈して戰の幕を開きましたが、之より敵わ威海衛に潜んで容易に出て來ません、所がこゝに偶然にも相會しましたので、我全艦隊の勇士わ、何れも雀躍して各其部署に就きました。此の戰に敵わ四艦を撃沈せられ、提督丁汝昌の旗艦定遠も、火災を起して大破し、辛くも遁走した程ですが、我わ一艦をも失わないで、見事に黄海の海上權を占め、軍隊輸送の上にも、大きに都合がよかつたのです、此の役に軍令部長樺山資紀が、微々たる商船西京丸に乗て督戰したのわ、艦隊の士氣を一層旺にしたのです。

+ Bakan jōyaku



伊藤博文と李鴻章

紀元二千五百五十五年

1895

馬關條約

清軍わ海陸共に連戰連敗して、李鴻章わ最早や戰爭を續ける事が出來ぬと覺り、明治二十八年三月十九日、自ら下ノ關に來て、我全權辨理大臣伊東博文、陸奥宗光と講和談判を開きました、開場わ下ノ關の春帆樓です。此の談判の間に無智の狂人小山六之助わ、短銃を以て李鴻章に傷を負わせましたが、我政府でわ之を憫んで、忽ち休戰を許し、李鴻章の快復するを待て再び談判を開き、七回目の會合で講和條約の記名調印が終つたのです。此の條約の主とする所わ、遼東半島と臺灣島とを我國に收め、別に償金として二億兩の金を支拂うこと、なりました、思うに清國わ今度の戰爭で、世界列國に向つて、自國の貧弱なことを廣告し、列國をして清國に對して、種々の惡い策略を起させる基を作つたのでありました。

+ Ryōtō-kampu



露獨佛の忠言を容る

紀元二千五百五十五年

1895

遼東還附　日清講和條約わ結ばれて、日本國民わ萬歳を歡呼する間もなく、意外にも露獨佛の三國から干渉して、日本が遼東半島を永久に占領するのわ、東洋平和の爲に宜しくないから、清國に還すがよいと申込みました。何しろ對手わ歐洲の三強國、我わ東洋の一孤島てす。此の干渉わ退けることが出來ません、殊に露國の提督チルトーフわ廿余隻の大艦隊を集合し、浦鹽斯德にわ五萬の陸軍に用意をさせて盛に示威運動をしましたから、我國わ到底今新たに此の三大強國を敵とする譯にわ參りませんから、殘念ながら東洋平和のために、遼東半島をば清國に還すことゝし、五月十日其詔勅が發布されました。吁我同胞が血を流して得た半島わ、此の樣にして失つてしまつたのです。どうして之が默つて居られましよう。

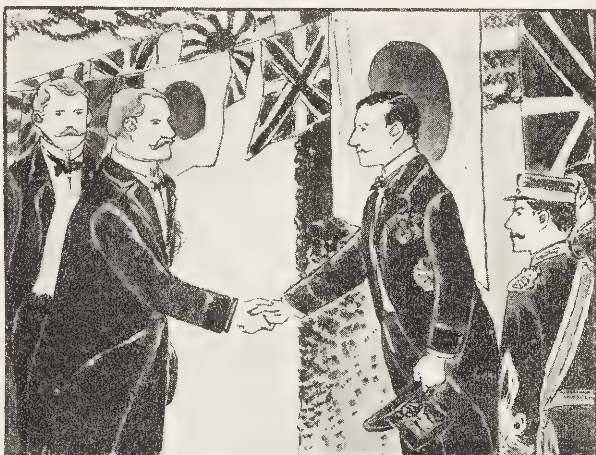


列國聯合軍北京を陥る

紀元二千五百六十年

北清事變　明治卅五年清國に義和團と云ふ暴徒が起つて、頻りに外國人を殺し、或わ鐵道を破壊して遂に北京城え攻寄せました。時の我駐清公使西德二郎わ、各國公使を相談して、太沽にある列國の水兵を、入京させて守護したのです、所が清國政府わ暴徒を討うともせず、却て益々其威を逞うさせましたから、列國の陸戰隊二千餘人わ、英國東洋艦隊司令長官中將シーモーアに率いられ、頗る優勢でしたが、夫れすら北京に入ることが出來ず、外人の命わ危く見えたのです。で我わ第五師團を動かし、獨逸わ元帥ワルダーゼーを起せ、各國共に増員して漸く北京に入り、皇帝西太后わ西安に遁れましたが、間もなく戰止み、北京に各國使臣會議を開いて、清廷わ夫れ夫れ償金を出し、謝罪使を特派して、事わ收つたので有ります。

x Nichi-ei-domei



日本と英國の握手

紀元二千五百六十二年

1902

×日英同盟

北清事變の起るや、我國が專ら義の爲に戰い、常に難局に當つて武名を列國に輝したことわ、大いに英國の人心を動かし、一方露國が滿洲を領有して、暴威を振うを憤りました。で自ら日英兩國の意氣が一致して、明治三十五年一月此の同盟わ結ばれたのです。日英同盟わ表面にわ東洋の平和を維持し、清韓二國の領土保全と云うのですが、一面わ確かに滿洲に於ける露國の行動を制するのでありました、されば日露戰爭後にわ、一層其範圍を擴めて、印度地方に迄も及ぼし、且つ年限も十年に延ばされました。かくして我日東帝國わ、海上の女王と呼ばる丶世界の最强國と、對等の攻守同盟を結び、國光わ世界萬國に輝きましたが、吁夫れにしても次代の國民たる吾等少年の責任わ、決して輕くわ御座いません。

Ryojunko



旅順要塞を攻圍す

紀元二千五百六十五年

1905

旅順口　わ曾て明治廿七八年の日清戰役に、我軍が奮戰して占領した所です、所が例の三國干涉の爲に、一旦淸國え還附しましたが、やがて露國わこゝを借り受けて、立派な要塞を築き、港にわ大きな軍艦が、自由に出入の出來る樣になつたのです。さて日露の戰爭がはじまつた時も、東郷大將の聯合艦隊わ、第一着に旅順口を衝き、夫れより或わ廣瀨中佐の閉塞隊となり、艦隊の封鎖運動となり、又陸方面からわ、乃木大將が第三軍の精鋭を盡して、七月から十二月迄、約半歲の間攻圍して、惜氣もなく血と肉とを費し、首尾よくここを我物とし、露國の借受けた年限だけ、淸國から借りて、鎮守府を設け、關東都督府を置き、滿洲の重鎮となりました。吁日本國民と離れることの出來ぬのわ、此の旅順口でわありませんか。

x Ryojunko Kaijo



乃木大將とステッセル

紀元二千五百六十五年

1905

×旅順口開城　旅順口わ曾て明治廿七八年役に、我軍が苦戰の結果占領した所ですが、遼東還付の後、露國わこゝを借受けて、永久築城をしました。日露戰爭の起るや、第三軍司令官大將乃木希典わ、三個師團の兵を以て之を攻圍し、海軍も又相應じて卅七年七月より攻擊に着手して、殆ど人力の盡せる限りの最大苦戰を續けたのです。實に旅順口わ東洋無比の要地です、露國がこゝに永久設備をしたのも其筈です。我軍如何に勇猛とわ云え、自然の力に克つを得ず、攻むる毎に多大の損傷を被りました、けれども百折千挫、勇氣更に倍加して、徐に敵の本防禦線を奪い、翌年一月一日にわ守將ステッセルをして、見事白旗を立てさせ、水師營附近で開城の談判わ調印せられ、さしもの堅城も、こゝに全く我軍の手に落ちました。

Hōten no daisen



我軍奉天附近に大捷す

紀元二千五百六十五年

1905

奉天の大戰

旅順口開城となつて、乃木大將の第三軍わ、新に滿洲軍に加わり、茲に三月十日を以て、我軍わクロバトキンの大軍を奉天附近に攻擊して、遠く敗走させました。此の戰わ兩國合戰中、最も長期に亘つたもので、我軍わ既に二月のはじめから、戰を交え、だん〳〵敵を北方え壓迫して行つたのです、何しろ兩軍の兵數わ百萬に上り、戰線數十里に連つて、互に精鋭なる武器を利用しましたから、一時わさしもに廣い滿洲の原も、砲煙彈雨に包まれ、敵も味方も死傷者を續出しましたが、結局我軍の攻擊に堪え兼て、敵わ多くの死傷者捕虜、武器を棄てゝ北方え退却してしまいました、そして此の一戰でわ敵もとう〳〵冑を脱ぎ、再び戰う勇氣も失せ、最早や大戰もありませんでしたが、其爲め間もなく休戰となりました。

+ Nihonkai Kaisen



バルチツク艦隊の全滅

紀元二千五百六十五年

1905

日本海々戰

旅順口の開城と共に、露國の東洋艦隊わ全滅しました、之より先露國わ波羅的艦隊を發して東洋に送り、浦鹽の殘艦に合せ樣としたので、之を率いる提督わ中將ロゼストウエンスキーであります、我わ暫く朝鮮海で英氣を養つて居りましたが、敵の近くと共に用意整い、五月廿八日を以て對馬水道に迎え、激しく砲火を交えたのです、此の時司令長官大將東郷平八郎わ、全艦隊に向つて、皇國の興廢此の一戰にあり、各員奮勵努力せよとの信號を下しました。而して交戰一晝夜、敵わ旗艦スワロフ以下十數隻を擊沈せられ、少將ネボカトフわ一艦隊を率いて降り、司令長官亦捕えられ、殆ど全滅したに反して、天祐と神助とに依る我軍わ、一艦をも失わないで無前の大勝を博し、敵に向つて再び起てぬ大打擊を加えたのです。

+ Gaisen kankanshiki



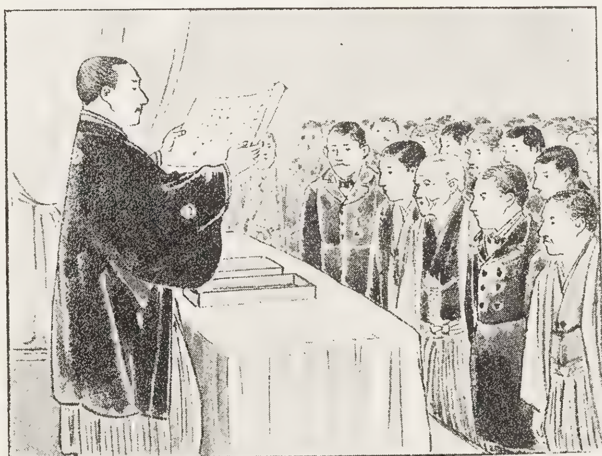
戰勝艦東京灣に集る

紀元二千五百六十五年

1905

凱旋觀艦式　明治三十七八年の戰役も、首尾よく濟んで媾和條約も結ばれ、こゝに東郷平八郎の統率する我聯合艦隊わ、三十八年十月廿三日を以て、東京灣頭に大觀艦式を行い、大元帥陛下も御親臨あらせられました。初め聯合艦隊わ根據地を拔錨して、先づ伊勢大廟に參拜し、舳艫相銜みて豫定の錨地に就き、各艦列を正して陛下の臨御を奉迎しました。此の日大元帥陛下わ、巡洋艦淺間を御召艦となされ、各艦列の間を徐々に御親閲遊ばされ、檣頭高く飜る天皇旗わ、折から一片の雲もなき秋の空に、一段の高崇を加え、轟々たる皇禮砲の響わ、天地を搖がせて、偉觀とも壯觀とも云い樣がありません、特に世界に向つて誇とするわ、夥しい戰利艦が、同じく一樣に列んで、我大君の厚き御惠の露に沾うたことであります。

+ Boshin shōsho



勤儉の詔下る

紀元二千五百六十八年 1908

×戊申詔書

日露戰爭の結果として、世の中が一般に奢りに流れかけ、兎角着實な仕事を嫌う風が見え出しました、若しもこんな悪風が日本中に廣まろうものなら、折角戰爭に勝つたのも、何にもなりませんので、天皇陛下わ大層之を御心配なされ、四十一年十月十三日、國民一般に對して、勤儉の詔を賜わつたのです。此の詔の御主旨わ、日本の國運を發展させるにわ、先づ內から整えてかゝらねばならぬが、夫れにわ互に勤め勵み、無用の費を儉約して必用の事に應じられる樣にせよと、仰せ出されましたので、此の後日本全國にわ村にも町にも靑年や農民の團體を作り、仕事に精を出して學問を勵み、互に勵み勵まされて、今や其良風が到る所に起り、少しも奢りの沙汰を聞かなくなりました、何と愉快でわありませんか。



ハルピンの朝嵐

紀元二千五百六十九年

1909

伊藤博文わ韓國統監を辭して、樞密院議長となりましたが、まだ滿洲を旅行した事がないから、一度彼地の有樣を見て來ようと、健氣にも出掛けました、そしてハルピンで露國の大藏大臣と會見して、停車場を出ようとしますと、不意に歡迎の群衆中から、一人の朝鮮人が現われて、五連發の短銃で博文を討ちましたから、殘念にも此の明治の元老、東洋第一の大政治家わ、こゝに屍を横たえて、歸らぬ人となつてしまいました。吁時わ明治四十二年十月二十六日の午前九時、天皇陛下の無二の忠臣わ、風寒いハルピンの露と消えたのです、けれども博文の流した血わ、決して徒にわなりまん。之で東洋の平和が、益々固くなる、その基かと思えば、博文の靈わ必ず滿足するでしよう、吁明治の大偉人伊藤博文公。（**大尾**）

明治四十三年四月一日印刷
明治四十三年四月五日發行

編者　木村小舟

發行者　東京市神田區錦町二丁目三番地　岸野英一

發行元　東京市神田區錦町二丁目三番地　文王閣

發賣元　東京市神田區錦町二丁目角　勉強堂

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　青木弘

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

正價金六十五錢
送料金八錢





